第６７回　関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会

山梨大会
資料集

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会
山梨県高等学校ＰＴＡ連合会

第67回　山梨大会 スローガン

◎ メインテーマ

「子どもたちの自律を支援するために、今、私たちにできること」

○ サブテーマ

- 自ら学び、考え、評価できる主体性を持った人間の育成を支援する
- 主体的に進路を選択し、行動・判断できる力を育む教育を支援する
- 規範意識を高め、ルールを守る精神を涵養する教育を支援する
- 地域や学校と連携して、子どもたちの社会性を高める取組を支援する
- 自立と社会参加を目指す特別支援教育の推進を支援する

シンボルマーク

人と人とのつながりを大切にし、すべての人々が協力し支え合えるよう願いを込め、ＰＴＡの文字を人の形にしました。

また、山梨県の地形や富士山を描くことで、自然豊かな山梨と人々が自然と深く結びついていることを表しました。心豊かで温かい山梨県をこのマークで表現しています。

考案者　山梨県立白根高等学校
石　丸　陽　向

目　　次

◇ あいさつ
関東地区高等学校ＰＴＡ連合会　会　長　金丸　　正　‥‥ 1
全国高等学校ＰＴＡ連合会　会　長　泉　　満　‥‥ 2
山梨県教育委員会　教育長　三井　孝夫　‥‥ 3

◇ 記念講演
山梨学院大学教授　上田　誠仁　氏　‥‥ 4

◇ 分科会
第１分科会　学校教育とＰＴＡ　埼玉県立杉戸高等学校ＰＴＡ　‥‥‥‥‥‥ 17
群馬県立大間々高等学校ＰＴＡ　‥‥‥‥‥ 21
第２分科会　進路指導とＰＴＡ　栃木県立小山高等学校ＰＴＡ　‥‥‥‥‥‥ 25
埼玉県立松山高等学校ＰＴＡ　‥‥‥‥‥‥ 29
第３分科会　生徒指導とＰＴＡ　山梨県立都留高等学校ＰＴＡ　‥‥‥‥‥‥ 33
神奈川県立相模原弥栄高等学校ＰＴＡ　‥‥ 38
第４分科会　家庭教育とＰＴＡ　千葉県立松戸馬橋高等学校ＰＴＡ　‥‥‥‥ 42
茨城県立真壁高等学校ＰＴＡ　‥‥‥‥‥‥ 47
第５分科会　特別支援教育とＰＴＡ
講　演　都留文科大学特任教授　原　まゆみ　氏　‥‥ 51

◇ 広報誌紹介　‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 57

◇ 関東地区高等学校ＰＴＡ連合会被表彰者（団体）一覧　‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 64

◇ 令和３年度関東地区高等学校ＰＴＡ連合会役員名簿　‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 66

◇ 令和３年度関東地区高等学校ＰＴＡ連合会　事務局一覧　‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 67

◇ 関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会年次別開催県一覧　‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 68

◇ 関東地区高等学校ＰＴＡ連合会会則・表彰規定　‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 71

◇ 山梨大会準備記録　‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 79

◇ あとがき　‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 84

あ　い　さ　つ

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会　会長　金丸　　正

第６７回関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会山梨大会誌の発刊にあたり、ご挨拶申し上げます。

まず初めに、新型コロナウイルス感染症の影響下にあるとはいえ、本大会は紙上開催となりました。目的の一つである、関東地区高等学校ＰＴＡ会員代表３千名が一堂に会し、ＰＴＡとしての資質を高める機会を設けることが出来ず、主催者として大変申し訳なく思っており、お詫び申し上げる次第であります。本大会は紙上開催となりましたが、全国島根大会はＷｅｂ開催となりました。ＰＴＡとしての学びの場を確保していただき感謝いたしております。

昨年度を振り返ってみますと、学校では臨時休校や部活動、各大会の中止など大きな影響を受けました。また、ＰＴＡ活動においても、大会や行事が中止になるなど、同様でありました。進路面においても新型コロナウイルス感染症の影響から、オープンキャンパスへの参加が出来ず、志望する学校の実際の雰囲気を感じる機会を逸したまま、志望校の決断を迫られたり、オンラインによる面談への切り替えなど、例年とは違った形での対応は子供にも保護者にも、教職員にも大きな負担となったと思います。

さて、本大会のメインテーマ、

「子どもたちの自律を支援するために、今、私たちにできること」

という観点から考えてみますと、「自律」とは自分をコントロールすることと考えられます。言い換えれば心が健康な状態です。今の子供たちは、外出制限や人との接触制限（ソーシャルディスタンス）が求められ、良好な状態にあるとは言えないのではないでしょうか。

そういった中で学校におけるスクールカウンセラーの配置、家庭での会話、地域との関わり等が求められていると思います。また、学校における教員の多忙化についても目を向ける必要があるのではないでしょうか。子供たちを指導する教職員の先生方が日々の業務に追われ、子どもと向き合う時間が確保できない、という現状は見過ごせません。ＰＴＡとしても学校と連携を図りながら、教員の負担軽減に取り組むことが子供たちの自律にもつながると感じております。

休業期間中に取り沙汰された「オンライン学習」についても現在は大学等で多く導入されていますが、今後は高校でも多く活用される時が来ると思います。その時にむけて「１人１台端末」の早期実現や、家庭における通信環境の整備など、災害や感染症の発生等による学校の臨時休業等の緊急時においても、ＩＣＴの活用により全ての子供たちの学びを保障できる環境を、早急に実現していく必要があると思います。これらのことが、今、私たち（ＰＴＡ）にできることの一端と捉え、会員の皆様にも意識を向けていただきたいと思います。

結びに本紙上開催に際しまして多大なるご協力を賜りました皆様方に対しまして心から厚く御礼申し上げますとともに、関東地区高等学校ＰＴＡ連合会加盟の各県連合会及び各校ＰＴＡの益々のご発展と、会員の皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げましてご挨拶とさせていただきます。

ご　挨　拶

全国高等学校ＰＴＡ連合会　会長　泉　　満

第６７回関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会山梨大会が、山梨県高等学校ＰＴＡ連合会主管のもと、新型コロナ感染症の影響により通常開催が困難な状況のなか、紙上開催という新たな様式に取り組まれますことに対し、お祝い申し上げますとともに、共催者として感謝申し上げる次第です。

さて昨年より、今だ続く新型コロナ・パンデミック、一方でコロナ禍は、人類に多くのことを気づかせました。例えば「あたりまえのことと認識し、社会活動の基盤と捉えてきた、人と人との緊密なコミュニケーションは、時として制限することが求められるものであること」「信頼を寄せてきた広域な移動やサプライチェーンは、時として機能し得なくなるもの」など、こうしたことに気づかされた私たちは、医療現場にも、教育現場にも、家庭にも、モノづくりの現場にも、行政にも、更には都市の在り方においても、デジタルシフトや強靭性を高めるなど、これまでとは違った「新しい社会様式」を期待することとなりました。「新しい社会様式」の実現には、新しいイノベーションが求められます。この期待されるイノーベーション像の実現には、社会総がかりで取組みや教育界、政策当局に加え家庭・地域が自分ごととして積極的に参加することが求められています。

このようなコロナ禍で加速する社会変容の中、本年１月の中央教育審議会から「令和の日本型学校教育」の構築を目指して、答申が打ち出されました。これは、ポストコロナ時代の新しい学びのポイントを示す各教育段階を含む幅広い提案です。善くも悪くも歴史の教科書に刻まれることになるであろう２０２０年、国難ともいえる未曾有の危機、そして歴史的な社会の分岐点に居合わせた私たちが、子どもたちと教育と日本の未来のために今すべきこと、使命とは何か、問われています。

今や学校という限られた場だけですべてを解決することは極めて困難な状況です。多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく健やかな学びを保障するためには、家庭・学校・地域と連携・協働し感染症対策の徹底とともに社会に開かれつながる教育を実現することが急務です。すなわちソサイアティ５．０時代の持続可能な社会と幸福な人生の創り手として、予測不可能な未来社会を自立的に生き、多様な人々と協働しながら社会の形成に創造的に参画するための資質・能力の育成が求められているのです。

そのうえでコロナ禍の逆境と社会総ががりの探究が子どももおとなも大きく成長させ、人と人、学校と家庭・地域の絆を結びなおす機会となるとともに、コロナ禍を乗り越えた経験が子どもたちや教職員、保護者、地域の人たちの大きな自信と誇りになり、子どもや学校を支える、教育に参画する土壌がレガシーとして受け継がれていくはずです。

その意味においては、今回のメインテーマ「子どもたちの自律を支援するために、今、私たちにできること」は、まことに時宜を得たものであり、地域の将来、日本の未来を担う人材を育むためのキーワードとして重く受け止める必要があります。本大会を通じ、新たな様式へ参加されるお一人おひとりの学びと気づきを深めていただくとともに、各学校のＰＴＡ活動の進化に資するヒントを得る貴重な機会になることを期待しております。

終わりに、本大会開催に関わる全ての方々にＰＴＡ活動に対するなお一層のご支援ご協力をお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会
山梨大会の大会誌の発刊に寄せて

山梨県教育委員会　教育長　三井　孝夫

第６７回関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会山梨大会誌の発刊にあたりまして、御挨拶申し上げます。

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会の皆様におかれましては、日頃から，それぞれの県におきまして、高等学校、特別支援学校のＰＴＡ活動を通じて、子供たちの健やかな成長と教育環境の充実・発展にご尽力されておりますことに対し、深く敬意を申し上げます。

さて、今日、高度情報化やグローバル化の急速な進展、人口減少や高齢化等、社会情勢がめまぐるしく変動する中、安全・安心に対する意識や多様な学びの必要性の高まりなど、教育を取り巻く環境も大きく変化しております。さらに、新型コロナウイルス感染症の拡がりに伴う社会の変化は、子どもたちの成長を支える教育のあり方にも大きな影響を与えております。

このような状況にあって、子どもたちが自己の能力と可能性を最大限に高め、自己実現と社会貢献を図ることができるようにするためには、家庭や地域社会との密接な連携･協働が大きな力となります。本大会のメインテーマは、「子どもたちの自律を支援するために、今、私たちにできること」であり、未来を担う子どもたちの豊かな成長を社会全体で支えることが大切になってくると考えております。

山梨県では、新しい時代を拓く本県教育の進むべき方向を見定め、その実現に向け、基本的な施策を盛り込んだ「山梨県教育振興基本計画」を策定し、取り組みを進めております。変化する社会を生き抜き、世界に羽ばたく人材を育成するため、基礎となる確かな学力はもとより、豊かな心、自己実現を図る力を子どもたちが身に付けられるよう、学校教育の更なる充実に全力で取り組んでおります。

現在、新型コロナウイルス感染症の収束が見えない中、ＰＴＡ活動は多くの対応を迫られているかと思います。ＰＴＡの皆様方には、引き続き、家庭・学校・行政の連携を図る中で、様々な課題解決に向けて取り組んでいただきますようお願い申し上げます。

大会の中止により、皆様が一堂に会して学校教育や家庭教育についての取組成果の発表や研究協議の場をなくされてしまいましたが、本大会誌が今後の活動に十分活かされるよう願っております。

結びに、関東地区高等学校ＰＴＡ連合会の、益々の充実発展と、皆様方の御健勝・御活躍をお祈り申し上げまして、激励の言葉といたします。

記　念　講　演

◇演　題

「遥かなる夢に向かって　～限りなき挑戦～」

Toward the dreams
That await you
Keep on challenging yorself !

◇講　師

山梨学院大学　スポーツ科学部教授・陸上競技部監督　上田（うえだ）　誠仁（まさひと）

◆プロフィール◆

1959 年（昭和 34 年）香川県善通寺市生まれ。

善通寺市立東中学３年時に日本中学放送陸上 2000m において５分 43 秒４の日本中学新記録を樹立。

地元尽誠学園高等学校に進学し２年次の全国ＩＨの 1500m において第５位、３年時の全国ＩＨの 5000m においては大会新記録で準優勝、国体３位。部員７名のチームながら全国高校駅伝にチームとして初出場を果たした。翌年の２月に行われた別府毎日マラソンのハーフマラソンにおいて１時間 04 分 15 秒の日本高校最高記録を樹立。

順天堂大学時代は２年～４年まで連続箱根駅伝山登り区間の５区を走り、区間賞２回･往路優勝２回･総合優勝２回に貢献した。

卒業後は香川県立三豊工業高校にて非常勤講師を経て、1982 年より香川県丸亀市立本島中学教員として奉職した。

1982 年～ 1983 年国体連続３位入賞、1983 年日本陸上競技選手権 5000m において準優勝、翌年の全日本クロスカントリー 選手権において優勝し同年の世界クロスカントリー 選手権日本代表として出場した。

1895 年より山梨学院大学陸上競技部監督として招聘され現在に至る。

駅伝監督としては 2019 年に後進に引き継いでいる。その間、昭和 62 年第 63 回箱根駅伝に創部２年目で初出場。以後 33 年連続出場。優勝３回　準優勝５回　３位２回を達成している。

大学三大駅伝と呼ばれる出雲大学駅伝優勝６回・全日本大学駅伝準優勝１０回。

山梨学院高校との高大連携から 2013 年第 64 回全国高校駅伝で初優勝を果たしている。

昭和 57 年より４年間箱根駅伝のＮＨＫラジオ解説を担当、全国都道府県対抗女子駅伝ラジオ解説も担当した。平成９年ＮＨＫスポーツ教室では「駅伝」のスポーツ教室を担当。都道府県対抗男子駅伝のラジオ解説などを歴任。

2000 年４月～２年間･四国新聞　「故郷へのエール･甲斐駒の麓から」と題してエッセイを連載した。

2018 年９月～翌年・月刊ランナーズ　コラム「疾風に勁草を知る」連載

2019 年１０月～ 31 回・スポーツニッポン「我が道」エッセイ回顧録連載

2020年９月～web月刊陸上・「雲外蒼天」コラム連載中

その他の役職として関東学生陸上競技連盟駅伝対策委員長・箱根駅伝実行委員会渉外委員長として箱根駅伝等の開催運営に尽力している。

◆主な代表選手◆

○オリンピック代表選手

シドニーオリンピック	柳沢　哲	男子２０ｋ競歩
アトランタオリンピック	三森由佳	女子１０ｋ競歩
北京オリンピック	尾形　剛	男子マラソン
	大崎悟史	男子マラソン
ロンドンオリンピック	藤沢　勇	男子２０ｋ競歩
リオデジャネイロオリンピック	藤沢　勇	男子２０ｋ競歩

○世界選手権代表選手

１９９４年	柳澤　哲	２０K競歩
	１９９４年　１９９５年　２年連続日本記録樹立	
	２０００年　日本記録更新	
１９９５年	中村祐二	男子マラソン
２００１年	柳澤　哲	２０K競歩　７位入賞
２００３年	尾形　剛	男子マラソン
２００５年	尾形　剛	男子マラソン　銅メダル
２００７年　連続出場	尾形　剛	
２０１５年	藤澤　勇	２０K競歩
２０１７年	井上大仁	男子マラソン
	藤澤　勇	２０K競歩

○アジア大会

２００２年	柳澤　哲	２０K競歩　銅メダル
２００９年	藤澤　勇	２０K競歩　４位
２０１０年	藤澤　勇	２０K競歩　４位
２０１４年	松村幸平	男子マラソン　銀メダル
２０１８年	井上大仁	男子マラソン　金メダル

○マラソン

２０１８年　東京マラソン　第２位　井上大仁　２時間６分５４秒（日本歴代５位）

○その他

２０２０日本陸上選手権大会８００ｍにおいて大学４年生の瀬戸口大地が優勝した。

コロナ感染症拡大の収束が見通せない日々は、教育現場やスポーツ活動のみならず全ての生活様式の変貌や転換を余儀なくされました。

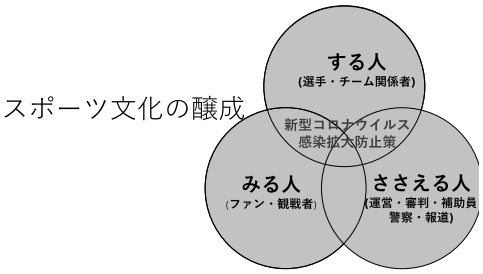
はじめに、関東学生陸上競技連盟駅伝対策委員長として箱根駅伝の開催及び運営に携わり感じたことを述べさせていただきます。

スポーツ文化の醸成を願って～コロナ禍のスポーツに思うこと～

2020 年から現在に至るまで何処に行こうと新型コロナウィルス感染拡大防止のため、「自粛」を選択しなければならない行動規範がついてまわりました。そのような中にあっても選手は自らが望む競技レベルの獲得を目指して鍛錬を積み上げてきました。感染症対策で抑圧された日々を過ごしているからこそ、日々研鑽を重ねている競技者や指導者の皆様方の気持ちに寄り添ってみることを忘れてはなりません。そのうえで、開催の可否が決定された時の選手や関係者に対する対応と自分自身の言動をしっかりと決めてゆかねばならないと思っています。

競技会の開催に向けては誰しもが我慢や不自由を強いられます。しかし一番大切なのは人命であり、安心安全の担保をどのように構築するかにかかっていることは言うまでもありません。競技会は、「する・みる・支える」というそれぞれの立場が一体となって運営され、スポーツ文化が醸成されてゆくものだと私は信じています。

いかなる競技会開催をするにあたって、最も重要なのは人命であり、それを守るべく感染を防止する対策が講じられなくてはならない事は十分承知しています。ただオリンピックの開催可否の決定がされるまでにあっても、各所から「競技会の中止」という発表を聞くにつけ、選手たちの慟哭の叫びが聴こえてくるようでもあり、中止の決断を迫られた関係者の無念も背に感じるのです。進むも引くも最善であると胸を張れない消化不良感をずっともどかしく思っていたのは私だけではないはずです。



中止 ⇨ **選手 ＝ 慟哭の叫び**
⇨ **役員 ＝ 決断を迫られた無念**

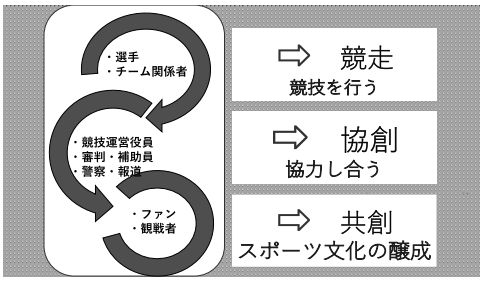
最善であると胸をはれないもどかしさ

開催 ⇨ **完全完璧 ＝ 達成される保証はない。**

感染症という目に見えないリスクへのマネジメントは想像するよりもはるかに厳しく、いかなる専門家のアドバイスを反映させようとも、完全完璧が達成される保証はどこにもありません。この状況の中、我々が再認識した事は、何事も個人の責任を果たすべく行動することと、人々の連携と協力なくして感染症対策は完結しないという至ってシンプルな人としての行動規範を実践することこそが重要であるということです。

「する・みる・支える」の視点からスポーツをそれぞれの立場で見直してみます。

競技会の目的は実力を競う「競争」です。それを支えるための審判や補助員をはじめ、大会開催に向けて様々な準備を推し進める競技団体の組織があります。する側と支える側との関係性は、協力しながら新たな形を作り上げる「協創」になります。また中学総体やインターハイ予選は学校関係者や保護者には応援自粛、現場観戦はご遠慮頂くなどとなったと思います。今年開催した箱根駅伝の場合も、取材方法や行動



範囲の縮小と限定などで実施することとなり、ファンやOBなどの皆様にはテレビなどの観戦で見守っていただきました。共に汗を流した陸上部員にも現地応援の自粛をしてもらいました。それでも互いの心象風景は共有されていたと思うのです。これも、「する・みる」の互いが協力して新しい形を作り上げた「協創」であったと感じました。準備から退場・機材撤収完了まで粛々と滞りなく終了出来たのも「協創」の賜物と言えるでしょう。これらのすべての輪を重ね合わせると、共に新たな形を作り出そうとする心のつながりとして「共創」というものが生まれた気がするのです。

ウィズコロナの新時代こそ、新たなスポーツ文化や価値観を生み出すことが望まれるとすれば、競走⇒協創⇒共創へと、思いと行動を一致させることにあると思います。

この絵は30回連続出場を果たしたときのイラストです。

29回から30回への襷リレーでみんなが笑顔で襷を掛けています。このイラストのようにレースだけでなく、時代、時代をつないでいく役目が私たちにはあるのではないかと考えています。このイラストを描いてくれたのは箱根駅伝初出場の時に10区アンカーを走った高橋しん君です。彼は現在プロの漫画家として活躍しています。

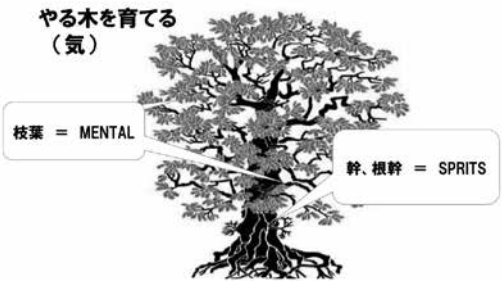
指導者とは何を目指すのでしょうか？

スポーツは楽しさとか喜びなど、人が持つ感情の喜怒哀楽すべてのものを味わわせてくれます。そのスポーツを通じてどんな選手を育てていけば良いのかということをまず考えなければなりません。まずは凧揚げの和凧のように、空高く舞い上がるように工夫・指導してあげることから始まります。例えば、河原で小さな子どもたちが凧揚げをしています。でもなかなか上手く上がりません。それを見た学校帰りの中学生が、糸の調整をしたり、尻尾の調整をして、風向きはこっちだから川上の方に向かって走ってごらんと言ってパッと手を放し、糸を持った子供たちが走り出すと、空に舞い上がる。そのような体験を通して知識や技術を習得してゆく。これがコーチングの原点だと思います。

最初は和凧が大空高く上がるように目指しますが、凧揚げの凧は紐が付いていないと上がりません。コーチングの最初はそれでいいのです。しかしながら、本当の目的はその次を目指さなければならないのです。最終的な目標はグライダーのように自分の判断力・技術力で大空を滑空でき無事着陸できるように導くことなのです。例えば、私が指導して成功に導くことができたとしても、別の場所では上手くいかない、やっぱりお前に

は俺がいなきゃダメだよと言うようでは指導者としての完結したコーチングはできていないわけです。目指すコーチングは、「よしっ、お前はこれから次のところへ行っても、社会に出ても自分の力で工夫しながら大空を飛んで、ちゃんと着陸できる力があるよ。」と言えること。または、選手自らが、「ありがとうございました。」と言って、今までつながっていた糸を、勇気をもって切って大空を滑空する。そのような選手を育てたいのです。そのためには、和凧のままではなく、日々のトレーニングや経験、仲間との関わりの中で主翼や尾翼を作っていくことを徐々にやっていかなければなりません。そういうものを目指すのがコーチングの目標ではないかと考えています。

選手やチームに対してどのように語りかけてアプローチしているか。



指導の現場ではどのように選手に語りかけるのかはとても重要です。スポーツではよく“やる気”という言葉を使います。心理学では達成動機といいます。例えば「お前やる気がねえじゃないか、その態度は何だ！」とか言ったりしてしまいます。

そこで、やる気を“木”として説明すると合点がゆきます。

一番大切なのは物事の根幹としての幹と根っこの意味を考えます。それを私はスピリッツだと思っています。何のためにやるのか、どんな誇りを持ってやるのか。または、自分の人生の中で陸上競技や長距離に取り組むのはどんな価値があるのか、どんな価値が生まれてくるのか。そこをしっかり認識させ、個人やチームとしても何を目指しているのかを理解させることです。スピリッツは育てていかなければなりません。自分のやっていることに価値観が見いだせない時は、その価値観について語らなければならないのです。

そして枝葉はメンタルと言えます。メンタルとは、例えば野球選手がブルペンでいい球を投げています。「よしっ、今日はいい球を投げているから起用しよう」と思っても、大観衆を前にしてマウンドに立つと急に気持ちが委縮してしまうこともあります。そうなると、あいつは大きな試合や本番に弱いやつだというレッテルを貼りがちになります。しかしながら選手にとっては、それはメンタルな部分の未熟さと想うことが大切です。メンタルは学習できます。大会で萎縮してどうしても自分の力が出せないときは、メンタルの問題として捉えて指導しなくてはなりません。メンタルは学習できるので経験を積ませます。メンタルは、コントロール出来るものなので、自分で自分の気持ちをコントロールする術を細かく教えます。それをスピリッツもメンタルも一緒にして、「お前はやる気がないな」とか、「やる気があるのかよ」とか指導者の思い込みで決めつけてはいけないと思います。結果が悪いと結果に対して非難的になるのではなく、次回の好結果につながるよう気付きのチャンスを与えなければなりません。

特に重要なのが根幹の部分のスピリッツをどう育てていくのかです。スピリッツがしっかりしていれば、枝葉は自然に繁ってきます。この二つを分けて考えることで、やる気を育てることはできると思います。ですから選手は、どちらに悩みを持っているのか。不安を持っているのか。どんなことで伸び悩んでいるか。そこのところのポイントをしっかり絞って向き合ってあげなければと考えています。

スポーツを通して、学生、競技者は何を得るのか

① スポーツの足場と心象風景の共有

悲喜こもごものスポーツ体験を通して学生、競技者は何を得るのかを語るにあたって、スポーツを血と汗と涙で分類してみたいと思います。

血も流す、汗も流す、涙も流すのはチャンピオンスポーツです。その最たるものがプロスポーツだと思います。私が小学校のときは、『巨人の星』『アタックナンバーワン』の時代でした。たぶん、みなさんと多少時代のズレがあるかもしれませんが『巨人の星』のテーマソングは血と涙の歌でした。♪～思い込んだら試練の道を、ゆくが男のど根性、真っ赤に燃える王者のしるし、巨人の星をめざすまで、血の汗流せ、涙をふくな…♪です。当時はスポーツ根性ドラマ全盛の時代ですした。全てをなげうってでも一直線に向かって行って、血の滲むような努力をする。悔しさ・敗北・涙を流しそうになってもぐっとこらえて、次に向かって行く姿を見て、「よしっ、俺も頑張ろう！」という気になっていました。血と汗と涙の中で、血の部分は、血の滲むような努力をするという意味合いです。

汗と涙のところをクローズアップするのがエデュケーション（教育的）スポーツです。部活動などで共に汗を流し、共に泣いたり笑ったりと喜怒哀楽のいろんなシーンをスポーツを通じて分かち合う。そのように感じ合う体験は貴重です。

そのことを私は心象風景を共有するという言葉で語りかけています。相手の心象風景を感じることができるかどうか。これもスポーツの持つ喜びの一つだと思います。そんな感性豊かな人間作りができるのもスポーツのもつ力であると思います。

もう一つは、血と汗と涙の、血と涙を取ると汗だけになります。汗だけかけばいいとなると、それはヘルシースポーツです。健康のためのスポーツですが、これにも十分スポーツとしての役割があります。爽やかに汗を流すひと時は心身ともにリフレッシュできます。

あと一つが、血と汗と涙の全部を取って、スポーツを楽しむレジャースポーツがあります。これにもスポーツの良さがあります。気分転換や親子のキャッチボール、ボウリング場に行くと小さな子ども用にレーンの横にロープを張って、絶対にガーターにならないようにして楽しんでいます。子どものスポーツをやる喜びや親子コミュニケーションなどにはとりあえず血も汗も涙も必要ありません。

スポーツにはいろんな足場があって、その中でも私たちがやっているのは学生競技としてのエデュケーションスポーツです。スポーツを通じて何を得られるかをしっかりクローズアップしそれを柱に据えないとなりません。そうでなければただ勝てばいい、結果を出せばいいという方向に走ってしまいます。当然、私が指導する足場の片方はチャンピオンスポーツに置かれています。箱根駅伝も、オリンピックを目指すのもチャンピオンスポーツです。その過程の中でどんなことを身に付けていくことができるか。そこを見ていかなければなりません。

② 人間力・私が大切にしている三つの言葉

最近、人間力とか、社会人基礎力と言う言葉がよく使われます。就職戦線でも人間力を高めなければとか、社会人基礎力を高めなければと言われています。それゆえに、アスリートとしての人間力とはどういうものなのかが指導をする上でとても大切になってくるのです。選手たちに陸上競技・駅伝を通して身に付けてほしいと願って指導の柱としてきた言葉があります。私自身が指導者として忘れてはならぬこと、またこれだけは踏み外せないこととして、毎年手帳に書き続けている言葉です。

このような選手、人間に成長してほしいと願いつつ指導者として中心に据えている「疾風に勁草を知る」という言葉です。

強い風の時に、強い草を知ることができる。勁草の“勁”という字の意味は、鋼鉄や杉の大木のような強さではなく、竹のような節を一つ一つ作ることによって、雪が積もって重くなっても元に返る力、しなやかな強さを表すそうです。

年輪は1年に一つしかできませんが、節は日々の中で一つ、二つ、三つと作っていくことができます。そういう積み重ねで勁草になるわけです。順風満帆で行くことはなく、辛いことや苦しいこと、怪我や故障・敗北いろんなものが日々自分の前に立ちはだかってきます。それを乗り越えて行くことによって、勁草のような選手や人間になれるではないかと解釈しています。入学式の後に保護者を交えて、新入生にミーティングをします。「箱根駅伝を走ってみたいと思っている者は手を挙げて下さい。」というと全員が手を挙げます。ただ、箱根駅伝は10区間なので、10名しか走れません。新入部員はたいてい10名以上ですが、4年生まで合わせると自分のチームの中で選手になれる確率は非常に低くなります。保護者の皆さんが居られる中で、「君たちの夢を全員にかなえることができないんだよ。」と、最初に言います。「君たちは箱根駅伝を走りたいという夢があるけれど、その夢を全員にかなえることができない。10人しか走れないから。でも4年間君たちと歩む中で、勁草の如き強さを身に付けることは約束したい。」そんな話をします。

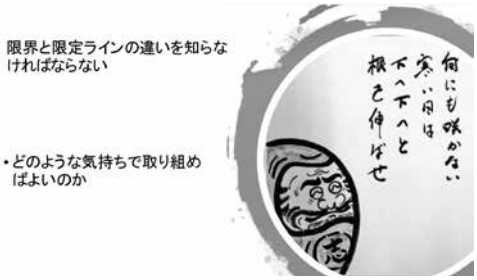
疾風は自分に降りかかるアクシデント、困難・苦難だと思います。疾風に挫折して諦めて、背を向けるのではなく、たとえ遠回りでも重い扉でも何とかしようと一歩踏み出す勇気が持てる、そういう人間力を付けてほしいと願っているからです。

では、そのためにどんな努力をすればいいのか。どんな気持ちで取り組めばいいのかが知りたいところだと思います。例えば選手とこのような会話がありました。「監督、ちょっと時間よろしいでしょうか」と言ってくる選手。そのような時の話はあまり良い話でないことが多いです。いい話のときはもっと軽い感じで話しかけてきます。「陸上部を離れたいと思っています。故障して何とか回復して大会に出ようと思っていたら、また故障してしまって、それがもう三度続いて・・気持ちが切れて、グラウンドに出てくるのが辛いのです。みんなが頑張っているのに、やる気のないこんな自分がグラウンドに出てきたんじゃ、みんなに対して申し訳なくて。自分の中でももう限界だと思うので辞めさせてください。」とまあこんな話の内容です。「そうか、君自身が精神的に追い込まれて限界と感じて辞めたいというその気持ち分かるよ。でも君の言っている事の中で、一つだけ言い換えてほしい言葉がある。今言った“限界”って言葉を“限定”という言葉に置き換えて言ってくれないかな。・・・・」と言うと、しばらく考えて「あっ、いや言えません」となるわけです。限界を限定に変えるとなかなか言えません。自分の持っているコンパスで円を描いて、そこまでが自分なりの精一杯のラインだと思います。そこが限定ラインであって、限界のラインではないのです。それでも限定ラインのすぐ内側までくるというのは立派です。スポーツの喜びは自分で引いた限定ラインの際まで来るぐらいに本当に苦しい時、ちょっと勇気を振り絞って自分の引いたラインのところに足先を掛けてみる時に生まれます。そうすると自分で引いた限定ラインがパッと消えて、こんな小さな円しか描けないと思っていたコンパスが大きくなり、今まで以上の大きな円が書けるようになります。これが成長感・達成感を伴うということです。その逆もあります。自惚れたり、いい気になって努力を放棄したり、やっている振りをすると大きなコンパスでも錆びついて、なかなか広がらなくなって、小さな円しか描けなくなってくることもあると言うことを肝に銘じておかなければなりません。

二番目の言葉として努力の方向性を示した「何にも咲かない寒い日は、下へ下へと根を伸ばせ。」を指導に生かしてきました。

この言葉は、高橋尚子さんが、シドニーオリンピックで金メダルを取ったときに、テレビインタビューで「何にも咲かない寒い日は、下へ下へと根を伸ばせ。」を色紙に書いて、「お陰さまで今日は大輪の花を咲かせることができました。ありがとうございます」と答えてくれました。それで有

名になった言葉です。実は高橋尚子さんを高校時代に指導したのが、山梨学院の箱根駅伝初出場の時に箱根駅伝の６区山下りをやった中沢選手です。彼は岐阜県の教員採用試験に合格して、赴任したのが県立岐阜商業でした。そこで３年間、高橋尚子さんを教えています。彼が山梨学院大学時代に、ミーティングで私がこの言葉を度々言っていたので、教員になってこの言葉を高橋尚子さんに伝え、コツコツ努力をしろよと言っていたようです。金メダルを取ったときにこの言葉を言ってくれたというわけです。



私がこの言葉に出合ったのは、大学時代です。京都の大徳寺の尾関宗園さんの著書の中にあった言葉で、とてもいい言葉だったので練習日誌に書き留めておきました。その後、監督として山梨学院に赴任したとき、努力の仕方はこれが全て表していると思い、この言葉を一つの柱にしました。やがて来る春を待って、大輪の花を咲かせようとするのなら、寒い冬の時期にしっかり根を張る努力をしなければなりません。根を張る努力は地表からは見えません。見えないから周囲も評価はしてくれません。そんな中でも樹木は寒い冬の時期でも根を張る努力はしています。そして、しっかり力を溜めてここ一番のときに大輪の花を咲かせる。そういう姿こそが、スポーツの醍醐味で、そのような努力ができる人を育てたいと考えています。

三番目の言葉は大学の教員、指導者になってからのものです。指導者になって２年目、当時箱根駅伝の予選会には 15 チームが参加でき、９位までがシード校、残りの６校を予選会で選んでいました。新設チームだった山梨学院大学は１、２年生だけでした。チャレンジするぞと出場したら、運が良かったのか、作戦が上手くいったのか、６位ギリギリで箱根駅伝の初出場を獲得することができました。大学の関係者や陸上関係者、その他大勢の方々からも祝福の言葉とともに握手を交わしていました。香川を後にして赴任２年目で箱根駅伝に出場できる感激もありうれし涙を流しながらの対応でした。その時のことです。ある人が私の手をギュッと握って「上田君ね、地方の大学がぽっと出て来て、今日はなかなか上手いレースをやったよね、箱根駅伝出場おめでとう。今回限りかもわかんないけどね。」と言うわけです。一瞬、何言ってるんだ！と思いました。でも、その方が「上田君、うれし泣きをしていてもね、箱根駅伝本戦は大変だよ。まだリングに上がってないんだ、何泣いてんの大丈夫…」と言葉を覆いかぶせてきました。その上、「今日が最高だと思うと、月だって欠けていくんだよ。」と、別れ際の言葉です。腹は立ちましたが、そうかと納得できるものがあり、気持ちの整理ができました。大会の結果発表が終わった後、大学の関係者の前に選手たちが並ぶと、学部長が「おめでとう。初出場を記念してバンザイ三唱！」と言ったので、慌てて、「ちょっと待ってください。」と言葉を止めました。「バンザイはまだまだ先になると思います。将来は絶対にそのときを作りますから、今日は聞いていてください。」と言って、キャプテンに号令をかけさせ「箱根駅伝目指して頑張るぞ、オー！」というシュプレヒコールに変えました。バンザイをやると掌から大事なものがこぼれそうな気がしたからです。握り拳を固めて「オー」と言った方が、本大会向けて、チームとしてまとまるのではないかと思ったからです。バンザイをやめたのは、あのとき耳に痛い言葉を言ってくれたからです。もしあのときバンザイをしていたら、30 数年後の今日、この原稿を書いていなかったかもしれません。

あのときの言葉の、「おごるなよ、丸い月夜もただ一夜」を戒めの言葉として心に留めています。
スポーツはいい結果を出して勝ったとしても、まだまだだ、次に向かって一歩踏み出そうという気持ちを持たなければいけません。ですから、疾風に勁草を知る

・驕るなよ
丸い月夜もただ一夜

がごとき選手＝人間になってほしい。そういう力を陸上競技や経験を通じて、君たちに身に付けてほしいんだ。そのためには、「何にも咲かない寒い日は、下へ下へと根を伸ばせ」の言葉のように、日々の努力を怠ったらダメなんだ。でも、根は順風満帆にすくすく張るものではありません。岩盤があったり、砂地だったり、水脈がなかったりと、たとえ遠回りをしてでも、根を張る努力をしなければなりません。堅い岩盤であれば、時間をかけて少しずつ根を張って包み込んでいくしかありません。その間、葉は繁らないかもしれませんが、岩を包み込むことができれば、勁草の勁にはなれます。雨が降ったら流される、風が吹いたら飛ばされるような弱い草ではなく、強風でも大雨でも飛ばされず流されない強さは身に付けることができます。

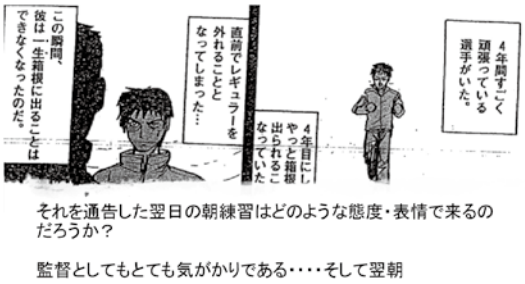
もし、何かが達成できたとしても浮足立たずに、素直で謙虚な姿勢を失わず、探究心を持ち続けることが大切だということを伝えたいのです。

以上の三つの言葉を大切に、学生たちと向き合って話をしています。

駅伝から学んだこと

駅伝の襷ですが、チームのスピリッツが襷には込められていると思っています。駅伝を語るにふさわしい次のような出来事がありました。「駅伝とは？」と聞かれたときに、このエピソードが駅伝の全てを語っていると思っています。今の箱根駅伝は、16 名のエントリーで、10 名が走ります。４名まで変更が可能です。昔は年末の 29 日に 16 名から 14 名にしなければいけないという非常に厳しいルールがありました。年の瀬も押し迫った 29 日に２名を外さなければならないわけです。大会が目前に控えたときにこの判断はとても厳しいものがありました。この発表の時とその後の選手の立ち居振る舞いがとても気になります。選ばれた選手ではなく、外れた選手の行動をずっと目で追っています。外れた選手の言動がチームを変えるからです。

４年生で最後で初めて箱根駅伝の登録メンバーに入っておきながら、29 日に箱根駅伝のメンバーから外れたその選手は、翌朝も変わらず早朝からグラウンドで元気いっぱいで走っていました。暗い顔でとぼとぼ歩いているのではなく、颯爽と走っている姿につい目を奪われました。“ 冗談には本気が混じる、言い訳には嘘が混じる ” と言われていますが、元気よく走っている彼に冗談めかしに次のように声を掛けました。「やけに元気がいいじゃないか、落ち込んで布団を被って泣いているんじゃないかと思っていたぞ。」と言うと、彼は、「僕の駅伝は昨日で終わりました。でも、僕たちの箱根はまだ終わってないですから」と言って、また走り出しました。彼は登録から外された悔しさや悲しみよりもチームのために自分はどうするべきかを自ら考え行動に移したのだと思います。



スポーツが人を育てるということを実感した一瞬でした。今でも大切なことを彼に教えられたような気がしています。

監督としての覚悟を決めたとき

山梨学院大学に 1985 年に就任し、同時に創部をしたのですが、その前は香川県の工業高校で１年と丸亀市立本島中学校で３年間教員をしています。中学の教員になって２年目に、福島県の郡山ロー

ドレースに参加した帰りの新幹線で、そのレースのテレビ解説を行っていた恩師の沢木先生から「山梨学院大学で陸上部を創部し箱根駅伝を目指したいと言っている。上田やってみないか。」と話を持ち掛けられました。陸上部を創る⇒予選会にチャレンジする⇒予選会を通過する⇒箱根に出る、お前やってみろでした。周りの人に相談したら、ほとんどの人が「無理だ、やめろ。」でした。故郷に帰って教員になり、地元の中学校で体育の先生をしているのに、なぜ故郷を離れてリスクを背負うのかと皆に言われました。全国高校駅伝に出ていなかった高校に入学してチームづくりをして、７人の部員で最後の年に初出場できた。この経験を生かせば出場までこぎつけるのではないかと思いながらも迷っていました。そんなある日、夕餉を共にしているとき父親が「沢木先生にそろそろ返事をしなくては駄目だろう。すでにお前の顔にはやるって書いてあるぞ。」と言われ、「覚悟を決めて行くのなら、どんなことがあってもつま先を夢の方向に向けて頑張れ。何かに躓いたり、転んで泥水の中に顔を突っ込んだりするようなことがあるかもしれないが、そのときこそ、自分のつま先が夢の方向に向かっていることを確認して、一歩を踏み出せ。その気持ちを失わずにやり通せるのか。」そんな風に語りかけてきました。

そして、さらに「苦しさを理由に、どうせ…しょせん…という言葉でつま先を夢の方向から外らせると、この先にあるチャンスが脇腹をすり抜けて行ってしまう。そんな気持ちなら監督は引き受けるな。」と厳しい言葉でもあり、励ましとしての惜別の言葉でもありました。今でもとても大事に思っている言葉です。

チームが試練に立たされた時にかけた言葉

監督として３４回の箱根駅伝を経験させていただきましたが、その中で途中棄権を２回経験しています。一度目は優勝した翌年です。大学生で世界選手権のマラソン代表にもなった中村選手です。彼が４区を走ったのですが、走り始めた直後に足を痛めて歩き始めました。しばらく並走したのちの 10㎞地点で無念のリタイアをさせました。この時の並走の時間はとても長く感じました。二回目はケニヤ人留学生選手オムワンバが 10 キロ手前で疲労骨折を起こし走行困難となったときです。この時はルール上即座に棄権の判断を下すことができました。

チームにとって無念の棄権をした後に、監督として語りかける言葉はとても重要です。レース後に松葉杖をついて現れたオムワンバと、学生部員たちにどんな言葉をかければいいのだろうか。ここでかける言葉が、これからの１年の起爆剤にならなければなりません。

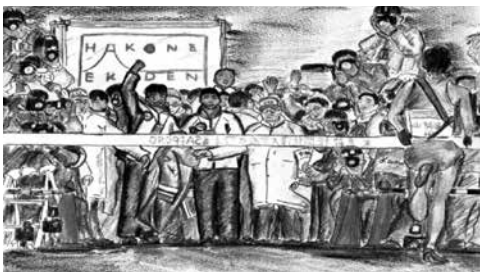
そして、心から振り絞るように学生部員に伝えた言葉は「人生において何が起きるのかは重要ではない。それをどのように受けとめて行動するかが重要なのだ。過去を変えることはできないけれど、自分と自分たちの未来を変えることはできます。であるならば、君たちと共に未来を変えてみようではありませんか。」でした。今できることは、これからの未来をどう変えていくかなんだと、気持ちを切り替えるよう話しました。この言葉が翌年の大会に向けてのテーマとなりケニヤ人留学生抜きでシード権獲得という結果につながりました。このとき３区で炎のような快走を見せたのが後のマラソンで活躍する井上でした。

駅伝とは

駅伝とは、信じる気持ちを未来向かって運ぶ競技です。襷に「行ってらっしゃい」そして「お帰り」なんです。自分たちのチームのスピリッツを込めた襷を、200㎞の２日間の旅に行ってらっしゃいとチー

ムが送り出す。そして結果はどうであれ、お帰りと言って迎えます。ゴールを目指しているのではなく、チームのもとへ帰るという気持ちでアンカーは走っています。アンカーはゴールした瞬間に、来年に向けての第一歩を踏み出しています。その気持ちを「ただいま！」と言って持って帰ったのなら、迎える家族は受け止めなければなりません。なので、最終ランナーがゴールラインを越えて踏み出す一歩は、１年後に向けて最初に踏み出す一歩です。チームは送り出すだけでなく、何が起きても迎える準備を整えておかなければなりません。

襷は、ゴールではなくチームメイトのもとへと帰って行きます。



ユニフォーム・ゼッケン（ナンバーカード）・襷の意味

駅伝では、ユニフォーム、ゼッケン、襷が身に付けるものです。

ユニフォームには所属しているチームの大学名や企業名が入るので、自信と誇りの象徴です。

何のためにやるかのスピッリッツを込めて日々トレーニンクをしてゆきます。メンタルな経験を積んでチャレンジして失敗しても、またチャレンジをする。このようにして葉を繁らせてゆく過程で、自信と誇りを身に着けます。ユニフォームに袖を通したときに、身が引き締まる思いをする。そういうものでなければなりません。君自身がそういう心持ちを育んできたかどうかそれが試される。

自信と誇りの象徴のユニフォームにナンバー（ゼッケン）を付けます。私はこの区間を走る選手ですと宣言するわけです。だから、途中でお腹が痛くなっても足が痙攣しても中継点やゴールまで行かなければなりません。途中でランナー交代はないのです。

ナンバーは自覚と責任の象徴です。ゼッケンを付ける自覚と責任を全うできる選手であるかどうかということです。

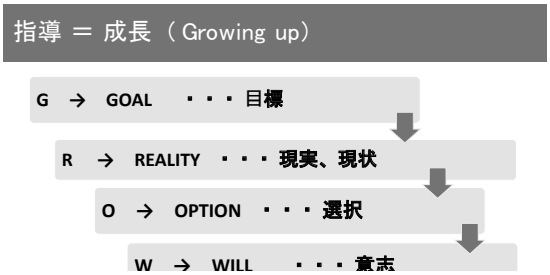
最後は襷です。山梨学院の襷は、山梨県の伝統工芸の甲斐絹織でできています。織物は縦糸と横糸でできていますが、縦糸は 365 日、どのチームにも平等の時間軸です。その縦糸に横糸を毎日１本ずつ織っていきます。ただし、一人の努力だけでは布は織れません。マネージャーや上級生、下級生、それぞれの一本ずつの横糸を全員で毎日織り込んだ布で襷を作っているということだと思うのです。そして、スタートのピストルが鳴るまでに自分たちはどれだけ織り上げてきたのか。それを証明するためにレースがあるのだと言えます。

襷の布を織るのは日々の努力。だから、やった振りやったつもりをしていたのではきちんとした襷は織れない。結果が悪かったときは、どこかにチームとしての織り方のミスがあったはずです。そんなふうに考えるとすれば襷は団結と絆の象徴であると言えます。

成長するための４つのステップ

監督として指導の現場に立つ時、選手たちをどのように成長させてゆくかと日々思考を巡らせています。その思考の過程でどこにフォーカスを当てて考えたら良いか悩むところです。そんな時に４つのステップを用意してそれぞれの選手の状態に当てはめて考えています。成長はグローイングアップ

（growing up）と言います。GROW の頭文字からシンプルにそれぞれのどこで立ち止まり悩み苦しんでいるのかを探り、アドバイスするように心がけてきました。



Ｇは GOAL で目標を明確にすること。ただ単に提示されたスケジュールをこなしていれば良いというわけではありません。何のためにやっているかを選手それぞれが考えなければなりません。

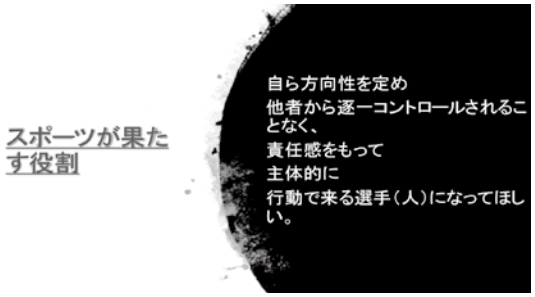
Ｒは REALITY、現実・現状です。どこがどれだけ足りないか、今の状況を見極めて理解し、ゴールまでの距離感を把握しなければならないのです。

Ｏは OPTION・選択です。目標と現状が理解できた上でどのように行動に移すのか選択をしなければなりません。どんなトレーニングをすればいいのか。どんな日常を送ればいいのか。貧血の予防やフードコントロール等々、たくさんの選択肢の中から一つを選ばなくてはなりません。

そして最後は決断し実行に移すＷは will・意志が必要になります。何事もこの志がなければ完結しません。判断・決断・実行の連続です。特に実行に移すにはこの will が必要だからです。

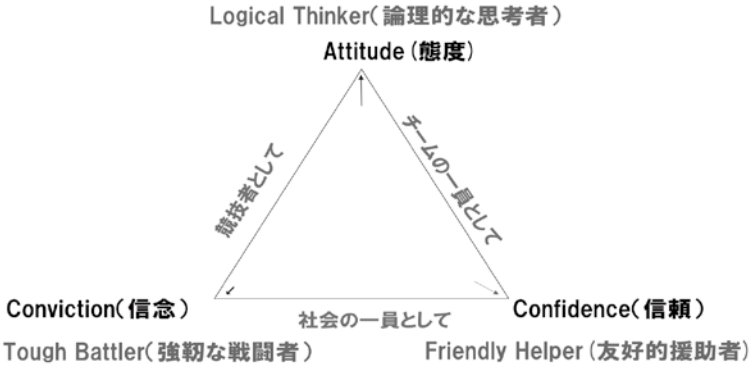
目標を定めて、成長（GROW）という言葉に則ってやっていく中で、最初に言った疾風に勁草するがごとき選手になれると思うからです。

疾風に勁草がごとき選手とは、まず自ら方向性を定めることができる選手でしょう。他者依存ではなく、自ら方向性を定める人間になってほしい。そして、他者から逐一コントロールされることなく、責任感を持って、主体的に行動できる選手になってほしい。これらのことを、スポーツを通して学んだり、気付いたりすることがスポーツのすばらしさだと思っています。



学生アスリートとして伸ばしてゆかなければならない課題

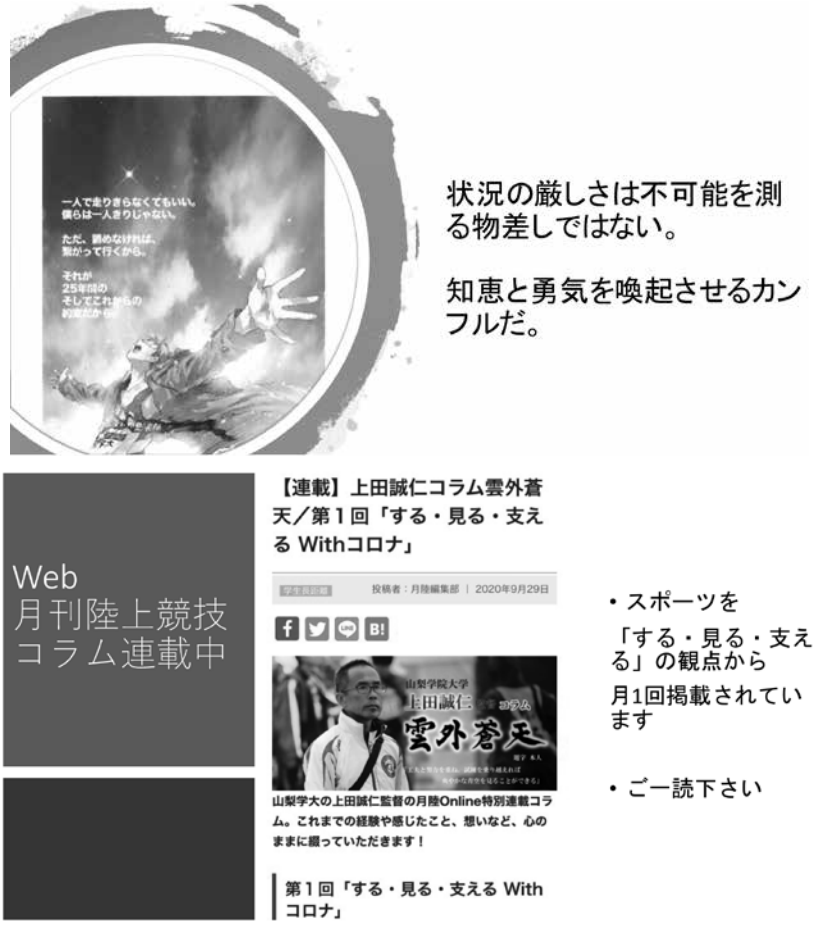
三角錐があって、その底辺だと思ってください。目標に向かって高さを高く上げようと思っても、底が小さいと倒れやすくなります。大きな目標、高い目標を上げるのであれば、底辺を広げなければなりません。



そのためには先ずそれぞれの頂点を態度 ATTITUDE・信念 CONVICTION・信頼 CONFIDENCE としてそれぞれの頂点を伸ばしてゆくことを考えなければなりません。態度は論理的な思考者（LOGICAL THINKER）として捉えてほしい。物事は筋道を立てて考え感情的にならず冷静に判断する力を指します。続いて信念は強靭な戦闘者（TOUGH BUTTLER）として捉えてほしい。トレーニングでタフになったとしてもスタートラインやコートに立って、相手と対峙しなければならない。このイメージを持たないと、グラウンドでは強いけれどもレースでは通用しない選手をつくってしまいます。襷を掛けて、駅伝の中継地点に立って、何分遅れて来ようが、どんなライバルと競り合おうが、俺は行ってみせるという気持を持たなければいけない。困難苦難の中にあってもあきらめずに最後まで戦い抜く気概を持てということです。そして、最後の信頼は友好的援助者（FRIENNDOLY HELPER）として捉えてほしい。チームとしてフレンドリー

なことに越したことはないのですが、真のチームワークはそこから生まれません。ヘルパーとしてそれぞれの援助者としてなる気持ちや視点を持つことを忘れてはいけません。自分が不利になっても相手のためにとか、厳しいけれど後輩にはきちんと言う。態度と信念と信頼の頂点がどんどん伸びていくことで高い人間性が生れてくるのではないかと思っています。

人生には挫折しそうなこと、絶望しそうなことがたくさんあります。そういうときにこそ、スポーツは知恵と勇気を喚起させるカンフルだという気持ちをはぐくんでくれると信じています。これからもスポーツの現場で学生たちと向き合う日々を送っていきたいと思っています。



【連載】上田誠仁コラム雲外蒼天／第１回「する・見る・支える With コロナ」
月刊陸上競技 (rikujyokyogi.co.jp)

【連載】上田誠仁コラム雲外蒼天／第２回「With CORONA に思う　～共創なればこその競走～」
(rikujyokyogi.co.jp)

【連載】上田誠仁コラム雲外蒼天／第３回「浮遊する言葉～自粛 ...　(rikujyokyogi.co.jp)

４回目　https://www.rikujyokyogi.co.jp/archives/20862
年末特別寄稿　https://www.rikujyokyogi.co.jp/archives/21270
５回目　https://www.rikujyokyogi.co.jp/archives/22714
６回目　https://www.rikujyokyogi.co.jp/archives/24600
７回目　https://www.rikujyokyogi.co.jp/archives/26779
８回目　https://www.rikujyokyogi.co.jp/archives/30043
９回目　https://www.rikujyokyogi.co.jp/archives/34430
10 回目　https://www.rikujyokyogi.co.jp/archives/37308

第1分科会　「高校教育とＰＴＡ」

発　表　県　埼玉県
発　表　校　埼玉県立杉戸高等学校
発　表　者　ＰＴＡ会長　木村　千恵　　校長　蛭間　督
発表テーマ　「コロナ禍でも～共に目指そう　夢の実現～」

1　学校概要・沿革

本校は、昭和５２年４月、男女共学の全日制普通科高等学校として、埼玉県立杉戸農業高等学校の移転跡地に開校した創立４４年目の学校です。１学年は７クラス、２、３学年は８クラスずつの全２３クラス、在籍生徒数は９１０名（男５４５名、女３６５名）です。

「一人ひとりの能力を確実に伸ばし、夢の実現を支援する学校」を目指し、進取の気概を持ち、社会に貢献できる人材を育成し、総合的な知の習得ができる人間に成長させることを目標にしています。様々な教育活動を通して、「主体性」「協調性」「発信力」「共感力」「継続力」といった５つの力を持った生徒を育てます。入学直後の学習オリエンテーション合宿、早朝・放課後、土曜日や長期休業中の進学補習、定期考査前の勉強マラソン等、生徒の進学希望実現に向けて学校全体で取り組み、杉高生は、勉強に部活動にフル稼働で夢の実現を目指しています。

対話を取り入れた授業

ＩＣＴを活用した授業

「主体性」を伸ばす「体育祭」の応援合戦

全国大会出場のダンス部

2　ＰＴＡ活動の概要

＜組織＞

会長１名　副会長１８名　監事６名

専門部・・・教養文化部、広報部、生徒指導部、進路対策部、保健体育部

＜主な年間の活動内容＞

・本部…昨年度から継続してＰＴＡ活動を見直し、各支部で行っていた研修会・講演会を実施しないこととしました。また、文化祭の際、

近くのスーパーマーケットに駐車させないための駐車場警備と学校周辺も含めた清掃活動を行っています。保護者が来校する機会を有効活用して、地域貢献も図っています。関東高Ｐ連、研究協議会、東部地区バス旅行に参加し、他県他校のＰＴＡ活動について見聞を広めています。

・各支部…年２回の支部活動を今年度から廃止し、保護者の方の負担軽減を図っています。

・教養文化部…例年、文化祭でのＰＴＡバザーを主催しています。昨年度はかなりの数のバザー提供品を会議室に並べて、７万円ほどの売り上げがありました。売上金は生徒会に寄付しています。今年度は文化祭が中止のため、バザーも実施できませんでした。

・広報部…年２回、広報誌発行しています。昨年は、年３回発行していましたが、今年度から負担軽減に取り組み、２回としました。

・生徒指導部…春・秋の交通安全週間の立哨指導と文化祭の警備をしています。今年度おそろいのビブスを準備したのですが、活動できませんでした。

・進路対策部…ＰＴＡ大学見学会及び進路講演会と併せて実施する学年懇談会の主催をしています。今年度は、GoogleMeet を活用して講演会や学年の動画上映を行いました。大学見学会は実施できませんでした。

・保健体育部…体育祭と長距離大会への協力をしています。長距離大会では走り終えた子ども達に飲み物を配付しています。今年度は、中止のため実施しておりません。

昨年度の学年ＰＴＡ懇談会の様子

今年度の学年ＰＴＡ懇談会の様子（Meet を活用）

東部地区バス研修旅行　長野県にて（昨年度）

おそろいのビブスでＰＴＡ活動

3　休校中に実施した保護者アンケート結果

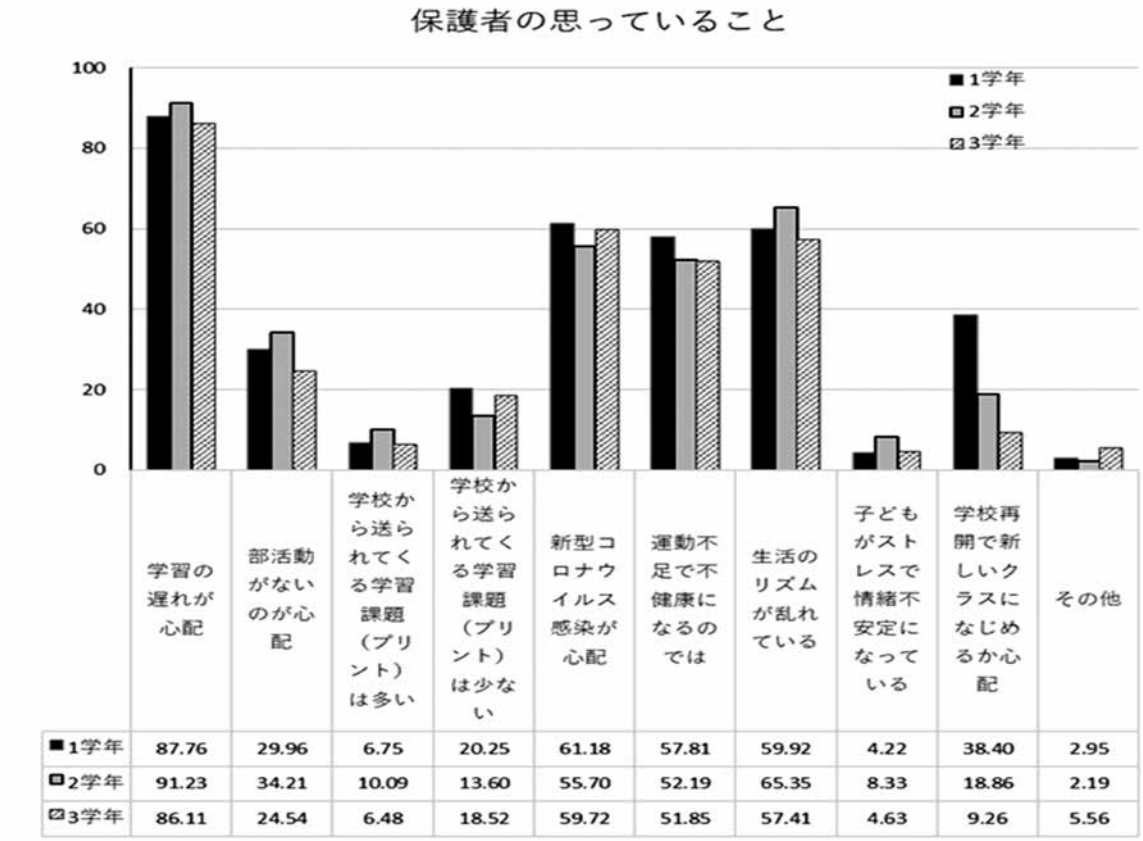
新型コロナウイルス感染症予防のため休校中の令和２年５月１日～５月９日に保護者対象のアンケートをＨＰ上で発信し、ネットコモンズを利用して回答を集計しました。

【回答率１年８５．３％、２年７１．９％、３年６８．６％】

（１）保護者の思っていること

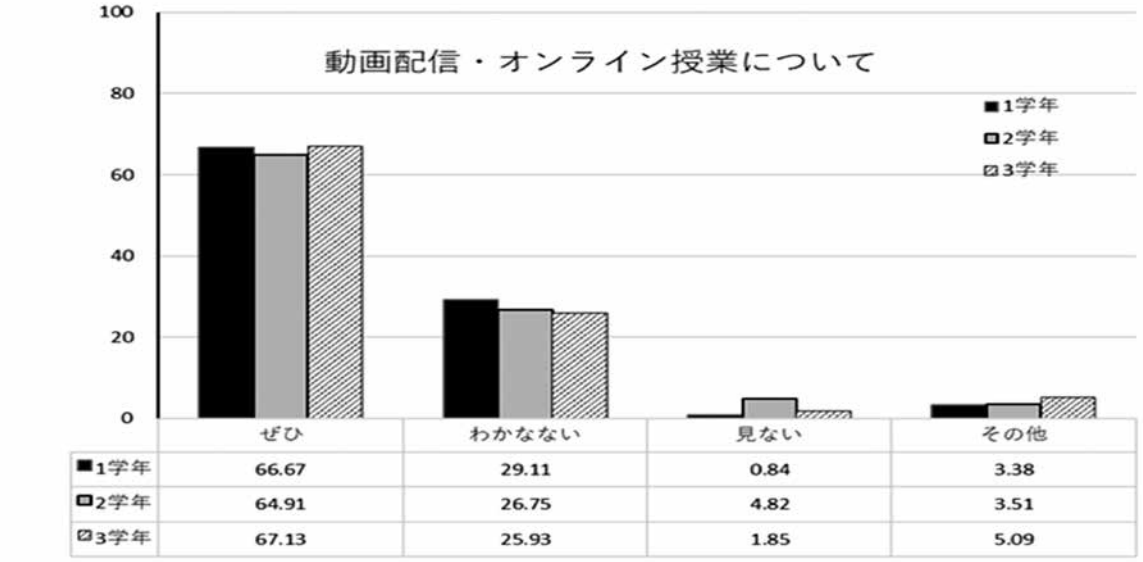
「学習の遅れが心配」との回答が８８．４％。どの学年も９割近い数字。「生活のリズムが乱れている」との回答が、６０．９％。「新型コロナウイルスの感染が心配」との回答が、５８．９％。「運動不足で不健康になるのでは」との回答が５４．０％。「部活動がないのが心配」

との回答が２９．６％。「学校から送られてくる学習課題」については、「少ない」との回答が「多い」を上回った。「学校再開で新しいクラスになじめるか心配」との回答は１年生の割合が最も多かった。



（２）動画配信・オンライン授業について

「ぜひ、行ってほしい」との回答が６６．２％。「よくわからない･どちらでもいい」との回答が２７．３％。「子供は見ない、通信料や通信環境などでやめてほしい」との回答が２．５％。



（３）自由記述より

「このようなアンケートを待ってました！」「オンライン授業を希望します。動画配信やオンラインなどで、生活、学習のリズムをつけたい。」「私立高校はすでに毎日オンライン授業を行っており格差が気になる。」「勉強の遅れや進路相

談など、通年にできていたことができないので、親子共々何をどうすればいいのか心配しています。」「先の見えない緊急事態で、先生方のご苦労に大変感謝しております。子どもは学校に行きたい気持ちでいっぱいです。貴重な楽しい学校生活を１日でも多く送れるよう、親としてできる限り協力させて頂きたいと思っております。」「先生方もＷｅｂの授業に慣れていないと思われ、お互いに不具合が発生すると思われます。それでもオンライン授業実施に向けて取り組まれていることを感謝いたします。大変だと思いますが、頑張ってください。」「先生方各々の家庭の不安もある中、子どもたちへのお気遣いありがとうございます。何かできることがあればお手伝いしたいのでおっしゃっていただければと思います。」「今回の長期休業中に子どもと将来について、たくさん話し合うことができたので、私たち家族にとってはとても良い機会だったと思っております。」

（４）まとめ～学校より～

突然、家の中に閉じ込められる生活が始まり、生徒も保護者も不安に耐えるこの時期のアンケートでしたが、自由記述に「待ってました！」とあるようにこのような不安な時期こそ保護者からの声を聞くことは、学校にとって必要なことだったと思います。最も多かった「学習の遅れ」に対する不安に応えるため、郵送による課題の配布（２回）、教科とＨＲの Google Classroom での連絡、教科の動画配信を実施してまいりましたが、休校中にオンライン授業の実施は実現できませんでした。分散登校時にオンライン授業を試行し、９月にオンライン授業を実施したところです。一気にＩＣＴ化が加速し、教員研修、スマートフォンに頼るＩＣＴ環境が課題として見えてきたところです。

また、抑圧された生活の中でも、学校に対して優しい思いやりの言葉をかけてくださる保護者の存在が大変励みになりました。ありがとうございました。

４　オンライン授業実施後の保護者アンケート結果

９月にオンライン授業を行ったクラスの生徒及び保護者対象にアンケートを取りました。８６％の生徒が学校のタブレットを使用しました。意欲的に取り組めたということに肯定的に回答した生徒が９０％、保護者もほぼ同数でした。オンライン授業の満足度は、生徒は９５％が肯定的回答をしていたのに対し、保護者の満足度は少し減って８７％でした。生徒のみに聞いた質問でしたが、教室の授業と比較して「オンラインでも十分補える」と回答した生徒が半数いました。自由記述による保護者からの意見には「聞くだけでなく、質問や会話で指名もあり満足していたようです。」「課題のみよりは良かった」「オンラインなので聞き逃さないよう、より集中してやった。質問したいけどできないといった不便さは感じていると思うので、きちんと理解できたかどうか気に掛けてやってほしい」「教室での授業の方が、先生から指名されたりと緊張感があって良かった様子でした。」という回答がありました。５月は「オンライン授業をどうするか」という課題が学校にありましたが、半年も経たないうちに、オンライン授業は当たり前でどう充実させるかということに課題が移っていることがわかりました。オンライン授業は保護者の目がより反映されるものであるということも実感できました。

５　おわりに

日々の生活の中では高校教育について、学校との保護者のかかわりについて考える機会がなかなかありませんでした。しかし、思わぬコロナ禍で当たり前だった子どもの高校生活や普段どおり家庭生活が送れなくなり、子どもたちにとって大事なものが何であるかが浮き彫りにされたように思います。

ＰＴＡ活動においてもオンライン化が加速しました。今後のＰＴＡ活動にも活かしてまいります。

杉高のキャッチフレーズ「共に目指そう夢の実現」の「共に」には、生徒・教職員だけではなく、保護者も含まれます。学校が充実した教育活動を展開するためには保護者の協力が不可欠です。子どもたちのために「共に夢の実現」を果たしていく協力的なＰＴＡ活動を推進していきます。

第1分科会　「高校教育とＰＴＡ」

発　表　県　群馬県
発　表　校　群馬県立大間々高等学校
発　表　者　ＰＴＡ会長　河内　陽子
発表テーマ　「地域に貢献する学校を目指して」

１　学校沿革

本校は、明治３３年に教育者井上浦造氏により共立普通学校として開校され、以来１２１年の歴史と伝統を誇る学校です。昭和１３年に町立大間々農業学校として引き継がれ、昭和２３年に町立大間々高等実科女学校を併合し、群馬県立大間々高等学校となりました。平成１０年には、県内初の全日制・単位制高校となり、少人数制による基礎基本の定着を重視した学習に加え、豊富な選択科目の設置により生徒の興味・関心に応え、多様な進路に対応できる教育を行っています。

２　校訓・校風・スローガン・教育目標

校訓：「自立」「至誠」「前進」
校風：「雄健」「学勤業励」
スローガン：「個性を伸ばし、夢をかなえよう」
教育目標：
「進展する現代社会の実態を考慮して、次に掲げる諸目標を重点とし、生徒の人格の完成に努めるとともに、将来、国家・社会の発展に貢献することのできる有為な人材の育成を期する。」
(1) 向学心の高揚　(2) 社会連帯精神の育成
(3) 心身の錬成　(4) 楽しい学校生活の創造

３　本校の教育活動の特色

本校ではこの教育目標にあるように、１２０年経った今も初代井上浦造校長の「人間性を高める」ことに軸足をおいた教育は大切に受け継がれ、みどり市唯一の高等学校として、「地域で活躍できる人材の育成」を目指しています。そして、「地域に根ざした学校づくり」を忘れずに、地域の信頼を得て、学校と地域が協力しながらやっていくことをとても大事にしてきました。

昨年度からＳＤＧｓの取り組みを通して、大間々高校生の育成と、学校の活性化を図っています。具体的には、総合的探究の時間のテーマとして全校生徒で取り組み、生徒の自主的活動である、井上浦造みらい塾の生徒たちをリーダー育成の場として、生徒主体の取り組みにしています。彼らの意見を基にＳＤＧｓへの理解を深めるためにさまざまな実践活動を行っています。

そして、さらに、本校は、生徒の取り組みを自分たちの中で完結するのではなくて、社会へ示していく活動にも力を入れています。高校生が発信することの効果もあり、よりＳＤＧｓの目指すべき社会へ近づくために地域の方々が理解を示してくださることに、生徒も達成感や有意性を実感することができています。実際に、新聞やＴＶなどのメディア等にもたくさん取り上げられてきました。それは、生徒にとっても大きな自信や誇りにも繋がっています。ＳＤＧｓの視点から地域を見つめ直し、これからの時代を生きていくのに必要な能力を身につけ、広い視野を持った生徒の育成を目指しています。

４　教育課程

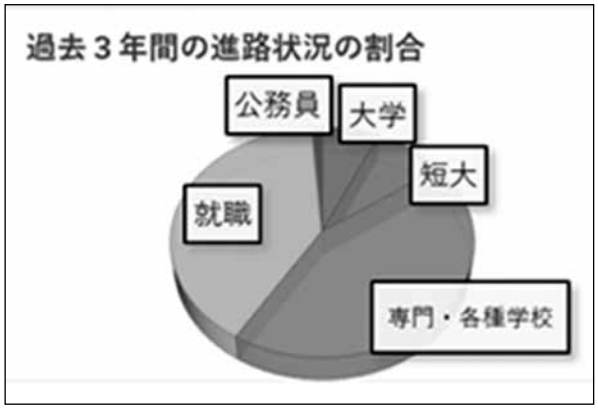
単位制高校として、選択科目の多さが特徴となります。１年次は必修科目が中心ですが、２年次は３つの選択科目群、３年次は１１の選択科目群が設置されています。また、選択科目が多いとい

うことで、少人数での授業が展開され、１年次の必修科目も国数英で２クラス展開の授業を行い、きめ細やかな指導が行われています。

生徒自身は進路や興味・関心に応じて３年間の計画を立て、自らの進路目標に向かって、何が必要かを考え、何を学ぶかを自分で選択し学習することができます。選択科目は、幅広い進路に対応できる科目が用意されています。

５　進路状況　（過去三年間）

大学	短大	専門･各種	就職	公務員
２２	２８	１４４	１３２	４



６．本校のＰＴＡ活動

（１）組織

本校のＰＴＡ組織は、各学年１２名、合計３６名の本部役員で構成しています。その中から役職として、会長、副会長、書記、会計、監事、第３学年委員が選出されますが、実際の運営には、全員で参加協力をしています。

（２）主なＰＴＡ行事

・ＰＴＡ入会式
・本部役員会年５回
・ＰＴＡ総会、ＰＴＡ歓送迎会
・「ゴミのない町大間々」クリーン大作戦
・企業大学見学会
・各高Ｐ連行事への参加
・マナーアップ運動
・みどり市主催各種啓発活動行事への参加
・大間々祇園まつりみこしパレード
・文化祭
・開校記念式典
・ＰＴＡ研修旅行
・マラソン大会
・ＰＴＡ祝賀会、懇親会
・学校保健委員会
・卒業式、卒業学年保護者会、卒業祝賀会
・ＰＴＡ新聞発行
・新入生オリエンテーション（新役員選出）

（３）ＰＴＡ参加の主な学校行事

・「ゴミのない町大間々」クリーン大作戦

大間々町に所在する高校として、より住み良い生活環境づくりを目的とし、日頃お世話になっている地域への感謝を込めて、２００２年から実施しています。

メンバーは、生徒会、部活動を中心とする生徒、同窓会役員、ＰＴＡ、教職員など、総勢２００名ほどが毎年参加して行われています。ＰＴＡも本部役員以外の保護者も協力してくれます。また、インターアクト部や家庭クラブを中心にプランター作りも同時に行って、大間々駅や赤城駅、希望の家などに贈呈しています。今年度も残念ながら中止となってしまいましたが、学校行事として定着しています。

・大間々祇園まつりパレード

大間々祇園まつりは、３９０年の歴史があり、「上州三大祇園」にも数えられる伝統を誇ります。

本校では、長年にわたり、大間々高校ＰＴＡとして、オリジナルのはっぴを着て、大間々高校の校章が付いた神輿を担いで、本町通りをパレードしています。近年では、生徒会、部活動中心に有志の生徒、また、ＰＴＡや教職員など総勢１００名程が参加しています。今年度は中止となってしまいましたが、地域の方々との貴重な交流の場になっており、今後も伝統あるまつりを盛り上げていけたらと思います。

・マラソン大会

新里総合グラウンドを拠点に校外で行われるマラソン大会ですが、ＰＴＡ本部役員も軽食や飲み物の配布、応援などを行っています。子どもたちが活躍している姿や表彰式の様子なども見ることができるなど、全校生徒の学校行事に参加している実感があります。

（４）コロナ禍におけるＰＴＡ活動

昨年度は様々なＰＴＡ行事が中止となり、楽しみにしていた文化祭も創立１２０周年記念式典も中止を余儀なくされました。そのような中でも、この歴史と伝統ある大間々高校を誇りに思ってもらいたい、子どもたちにとって、何か思い出に残るものを残したいという思いから、中止になってしまった記念式典の代わりに、創立１２０周年記念事業として、ＰＲ動画及びＰＲポスター制作しました。ＳＤＧｓを意識した、地域とのコラボレーションが特徴となっています。折しも、大間々町にある「わたらせ渓谷鐵道」がコロナ禍の影響を受けている記事が地元紙に掲載されたことから、共立普通学校時代から現在まで通学の足としてお世話になっている「わたらせ渓谷鐵道」とタイアップして今回の企画が行われました。また、撮影、制作にあたっては、日本で唯一の映像学部を有する立命館大学に依頼しました。動画とポスター制作のコンセプトは、「生徒たちが地域とともに、生き生きと活動する姿を伝える」ことで「１２０年つながる大間々高校 OneStory」として学校と地域が１つの物語を紡ぐように、学校や地域の魅力を交えながら学校生活を紹介するものになっています。そこで、ＰＴＡとして、是非ポスター掲示に協力させていただきたいということで、本部役員を中心に全校の保護者に呼びかけ、広報活動に参加することになりました。

本部役員会においては、立命館大学映像学部学生によるリモート講義形式でＳＤＧｓに関する学習会を行いました。子どもたちが総合的な探究の時間に学習しているＳＤＧｓを保護者にも理解してもらい、家庭においても一緒に取り組めたり、学びが共有できたらと考えています。

ＰＴＡ研修旅行もコロナ禍で県外への移動を自粛することもあり、かねてからのわたらせ渓谷鐵

道とのコラボレーションもあり、ＳＤＧｓを意識して地元のわたらせ渓谷鐵道トロッコ電車に乗り、富弘美術館等を散策しました。地元の良さを再発見するものとなりました。

年末にはＳＤＧｓ水上研修として、ＰＴＡ本部役員と井上浦造みらい塾生徒との合同研修も企画されていましたが、折からのコロナ感染者増加を受けてやむなく中止となりました。

今年度の取り組みとしては、第１回新旧本部役員会においては、カレンダーの配布と掲示協力を依頼、上野千鶴子氏のリモート講演会の案内、ＳＤＧｓ出前授業の案内をＰＲしました。カレンダーは、昨年 10 月から、性別にかかわらず、スラックスかスカートか自由に選べる選択制制服になり、すべての人にとってスラックスが履きやすいものになるように、また、地域に対して、大間々高校が取り組んでいることを知って欲しい、理解して欲しいという思いを込めて、井上浦造みらい塾の生徒が立命館大学学生のお力をお借りして制作したものです。その取り組みについては、NHK の「ほっとぐんま６３０」でも取り上げられました。選択制制服については、動画も制作し、ＰＴＡ総会において、全校の保護者に対してこのような取り組みを紹介する予定でしたが、総会中止に伴い、ＨＰ等で配信予定です。

上野千鶴子氏のリモート講演会は、子どもたちが総合的な探究の時間に行うものですが、保護者や地域の方々も一緒に参加することができます。子どもたちが学んでいるものを共有できる貴重な機会になります。

7　おわりに

本校のＰＴＡ本部役員は、何か子どもたちのために動きたい気持ちが強く、役員会などを通して、学年を越えた役員同士の絆を感じたりしてきましたが、今回はコロナ禍の影響で、様々な活動が中止になったり、制限されたりで、やりたくても出来ないもどかしさを痛感しております。

そのような中においても、このような大間々高校生の取り組みや成長を、まずは保護者代表であるであるＰＴＡ本部役員に知ってもらうことが大事であると考え、共に学ぶ機会を、心掛けています。

今年度のＰＴＡは、本校の様々な取り組みに対して、広報活動の一端を担い、その宣伝活動により、生徒の教育活動への支援と協力をしていくスタイルも大切なＰＴＡ活動であると考えています。そして、目指すべきは、本部役員の姿勢が、理解協力から、一緒に活動できることであり、今年度の文化祭等で実践していけたらと考えています。

第2分科会　「進路指導とＰＴＡ」

発　表　県　栃木県
発　表　校　栃木県立小山高等学校
発　表　者　ＰＴＡ会長　後藤　春美
発表テーマ　「進路指導をサポートするＰＴＡ」～不屈の歩みを次の１００年へ～

１　はじめに

本校は、１９１８年（大正７年）小山町立小山農商補学校として開校以来、社会の変化、時代の要請に応えるべく、農業科・商業科・普通科・国際会計科・英語人文科等、いくつもの学科の変遷を経て、現在は普通科（５クラス）と県内唯一の数理科学科（１クラス）で構成されています。

社会の各方面で活躍する卒業生は約 24,000 名を数え、創立１０３年目を迎えた伝統校です。

不屈の歩みを次の100年へ

２　本校の取り組み

（１）朝の学習

本校独自の取り組みとして７：５０～８：２０の３０分間、基本的に毎日朝の学習を行っています。３年間の積み重ねで、３５０時間の累積学習時間を確保することができ、基本的生活習慣の確立と志望校合格への学力向上に寄与しています。

（２）盛んな部活動

運動部・文化部ともに、学業との両立を図りながら熱心に活動しています。特に、全国大会入賞実績を誇る剣道部・ウエイトリフティング部や、甲子園出場経験もある野球部が有名で、将来有望な選手や地域で活躍する指導者を輩出しています。

（３）大学との連携協定

宇都宮大学・東京都市大学等と連携協定を締結したことにより特別授業・体験学習・体験型課題研究学習等の教育活動が充実しています。大学卒業後まで見据えたキャリアが構築できるよう、生徒の視野を広げる様々な指導を展開しています。

（4）病院と教育連携協定

栃木県で初めて、総合病院と教育連携協定を締結しています。また、医療系進学希望生徒を対象に、インターンを実施しています。外部と積極的に連携することで充実した医療系指導を実施し、生徒の進路選択をサポートしています。

医療の道 視界すっきり

小山高「総合的な探究の時間」

病院と教育連携協定

体験や講話で進路支援

このような取組を積み重ねた結果、現在ではほとんどの生徒が四年制大学への進学を希望し、ここ３カ年の国公立大学合格者数の合計は約１５０名ですが、例年４０名程度だった国公立大学への合格者数が６０名まで増加し、ひとりひとりの進路目標を具現化できる進学校へと進化しています。

3　本校 PTA の進路指導をサポートする取り組み

＊１学年

（1）PTA １学年部会における進路講演会

PTA 主催で Benesse コーポレーション関東支社より講師の方を迎え、ｽﾀﾃﾞｨｻﾎﾟｰﾄの結果分析や今後の学習指針、保護者として生徒を支援していく上で留意すべき点等を講演していただいています。

（2）１学年一日大学見学会

生徒が大学・学部学科の理解を深める一環として学校が企画運営する行事を、PTA も連携・協力する形で支援し、生徒が大学の施設見学、模擬授業等を受講することに協力しています。

（3）保護者〔１学年〕のための進路ガイダンス

学校が主催し、PTA は連携･協力しています。小山市生涯学習センターを会場に、河合塾から講師を迎え、急激に変化する新入試に対応していくための情報提供をしています。講演後多数質問もあり、保護者の意識の高さがうかがえました。

＊２学年

（１）学部・学科説明会

国公立大学・私立大学から講師を招き、学部系統別に計１２の会場に分かれて、具体的に学部・学科に関する説明等を聞く行事を、PTA も連携・協力して実施しています。

（２）PTA ２学年部会における進路講演会

PTA が主催して実施しています。山形大学アドミッションセンターより門馬教授をお招きし、「受験生になる」心構えと効果的な学習方法・学習習慣の確立法や、「受験生の親になる」保護者の心構え等について講演いただいています。

（３）保護者〔２学年〕のための進路ガイダンス

学校が主催し、PTA は連携･協力しています。小山市生涯学習センターを会場にして税理士の方を講師に迎え、受験に必要な費用、またそれに備えるための具体的な対応策等についてお話しいただきました。アンケートでも「とても参考になった」というコメントが多く好評でした。

＊３学年

（１）PTA ３学年部会における進路講演会

PTA が主催して実施しています。河合塾東日本本部長野村先生を講師に迎え、『希望進路・納得進路実現のために』という演題で、受験に向けた受験環境、来年度入試の傾向と対策、効果的な学習方法等や、受験生の保護者としての「心構え」について講演いただきました。

＊全学年共通

（１）進路・受験指導講話【各学期１回実施】

学校の企画・運営を PTA が連携・協力しています。外部講師等を招き、その時期の進路・受験・学習の重要事項について講演会を実施しています。

（2）土曜課外【毎月２回程度･年 14 回程度実施】

学校の企画・運営を PTA が主催・協力しています。

生徒は原則全員参加し、普段の授業では十分に扱えない内容等を補強したり、教科書の基礎基本事項の徹底に取り組んだり、受験に向けた実践的な対策等の指導を行っています。

（3）小山市・宇都宮大学連携土曜課外

PTA が主催・協力し、学校が企画・運営しています。希望者を対象に、他校と合同で宇都宮大学より講師を招き、学部の内容や大学での学びについて理解を深める課外授業を行っています。

（4）東北大学見学会

学校が企画・運営し、PTA は連携・協力しています。希望者を対象に、東北大学及び各学部･学科の研究内容等について理解を深めるため、バスツアーを実施しています。実際に現地に立ち、そこで学ぶ自分の姿をイメージして、進路を実現するための学ぶ意欲が高まることを期待しています。

（5）保護者面談

夏休み前半に全学年で実施し、１２月には３学年進学希望者全員を対象に実施しています。それ以外にも、希望する保護者等のニーズに応じて、随時実施しています。

（6）卒業生による合格報告会

学校が企画・運営し、PTA は連携・協力しています。卒業生を学校に招き、在校生に対して合格体験報告会や学部別に分かれての具体的な受験体験報告会を実施しています。

最後まであきらめずに目標を達成した先輩の言葉は、生徒達にとって何よりの「教科書」であり、激励と勇気をいただける行事にもなっています。

4　おわりに

小山高校 PTA は学校と連携しながら、生徒は勿論のこと、「保護者の」進路意識が高まる取組を数多く実施しています。今後は今まで以上の進路指導行事の充実と、保護者が学校の全ての教育活動に対する参加意識を高め、PTA 活動が生徒ひとりひとりの進路実現の支援に結びつくよう、「不屈の歩み」を継続していきたいと考えています。

第2分科会　「進路指導とＰＴＡ」

発　表　県　埼玉県
発　表　校　埼玉県立松山高等学校
発　表　者　ＰＴＡ会長　水村　誠
発表テーマ　「～松山高校における進路指導について～」

1　はじめに

松山高校がある東松山市は、埼玉県のほぼ中央に位置する人口約９万人の市である。毎年１１月に開催される日本スリーデーマーチ（令和元年、２年は中止）は、世界２位のスケールを誇るアジア最大の国際ウォーキング大会で、世界各国から８万人を超えるウォーカーが訪れる。また、名物はやきとりだが、東松山市のやきとりは鶏肉ではなく、豚肉のカシラ肉を炭火で焼き、ピリ辛のみそだれをつけて食べる独自のスタイルである。市内には数多くのやきとり店があり、遠方からも観光客が訪れる。

松山高校は、東武東上線東松山駅東口から徒歩約１５分のところに位置している。周囲には半径５００m以内に松山第一小学校や松山中学校、松山幼稚園等の教育機関が隣接しており、東松山市のいわば文教地区と言える場所となっている。

2　学校概要

⑴　創　　立　大正１２年（今年で９８年目）
⑵　学 級 数　普通科
　１学年７クラス（２８０名定員）
　うち１クラスは特進クラス
　・１年生は８クラス少人数学級編制
　理数科
　１学年１クラス（４０名定員）
⑶　生 徒 数　９５１名（5月１日現在）
⑷　教職員数　８１名（事務職員等を含む。）
⑸　国、県からの指定事業
　スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）
　未来を拓く「学び」プロジェクト研究開発校
　ＡＩによる学びの改革プロジェクト指定校

記念館（左）と校舎

3　松山高校の教育活動

松山高校は建学の精神として「文武不岐」、つまり、勉学にも部活動にも頑張る生徒を育成することを掲げ、創立以来、高い見識と幅広い教養、礼節を備えた品格あるリーダーの育成を目指し、多くの優れた人材を世に輩出してきた。

⑴　普通科

国公立大学への進学希望が多いため、１・２学年では国語・英語・数学の学習に重点を置き、３学年では豊富な選択科目を置いて進路希望に応じた学習を支援している。きめ細かな学習指導を実現するため、１学年では７学級募集のところを１クラス３４人の少人数学級編制での８学級展開としている。

また、平成２１年度から特進クラスを１クラス設置（特進クラスは４０名編制）し、国公立大学の進路実現に向けて、夏期休業中の

「勉強合宿」※をはじめとするハイレベルな学習指導・進路指導を展開している。

⑵　理数科

理科・数学に関心・意欲を持つ生徒のため、科学的な思考力や想像力、探究心を養う。理数系大学への進学希望実現に向けて、夏期休業中の「勉強合宿」※を実施している。また、近隣のＳＳＨ校や県内の理数科設置校と連携して課題研究を英語で発表するなど、生徒の学習意欲や探究心をさらに高める取組を行っている。

⑶　スーパーサイエンスハイスクール

平成２４年度から１期目５年間、平成２９年度から２期目５年間、併せて１０年間、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）に指定されている。科学技術分野で活躍する人材育成のため、大学や研究機関との連携の下、最先端の科学技術に触れ、探究活動や研究発表会を活発に行っている。

平成２８年度からは隔年でＳＳＨ海外研修※を開始し、１５名の生徒が８日間オーストラリアでホームステイをしながら国立公園でのフィールドワーク、語学研修等に取り組んでいる。

⑷　学習活動

進学補習「松高塾」として、早朝・放課後や長期休業中に年間１００講座を超える補習講座を実施している。このような計画的・組織的な学習をとおして、各教科とも基礎力から大学合格への実践力の養成に積極的に取り組んでいる。さらに、２学期制の実施や長期休業期間の短縮に取り組むとともに、隔週土曜授業や７時間授業の導入によって、授業時間を確保し、生徒の一層の学力向上に取り組んでいる。

⑸　学校行事

松山高校では様々な学校行事を行っている。入学当初の放課後に校歌・応援歌練習※が行われ、新入生は応援団の上級生から３日間みっちりと松山高校の校歌・応援歌を叩き込まれる。そして、５月の新入生歓迎球技大会※や９月の文化祭（令和２年度はオンラインで実施）、１０月の体育祭※、１１月の比企一周駅伝競走大会※、３月のスポーツ大会など、一連の行事をとおして生徒たちはたくましく成長していく。

⑹　部活動

運動部が１６部、文化部が１３部ある。約６０％の生徒が運動部に、約４０％が文化部に所属して活動し、充実した設備と指導のもとで大きな成果を上げている。３年生になっても約９割の生徒が部活動を続けている。令和元年度は関東大会・全国大会に７つの部活動が出場している。

４　松山高校の進路指導　～「行ける」大学ではなく、「行きたい」大学へ～

松山高校の進路指導は「チーム松高」としての組織的指導力に基づき、生徒の学力向上に努め、進学実績を一層向上させることを重点目標としている。

⑴　進路指導の流れ（３年間）

１年生では、入学直後に５教科の学習法を学ぶガイダンスを実施し、高校での学習へのモチベーションを上げている。６月には文系理系の類型選択に向けた適性診断を実施、その後、１１月には学部分野別説明会を実施する。学部分野別説明会では、大学の先生に講師として来校していただき、大学でどのような研究が行われているのか直接生徒に説明していただき、進路選択の一助としている。１２月には大学見学会を実施する。これは生徒の目標とする大学を選択させるためであり、見学でお世話になる大学は、国公立大学や難関私立大学である。

２年生では、１０月に大学教授による出張講義を実施する。この出張講義では、大学で行っている研究について前年度より深く理解

することを目標としている。その他、夏休みにはオープンキャンパスへの参加を課題として課し、冬休みには「第一志望大学への『志望宣言』を書く」という課題を課して、受験への意識向上を図っている。

３年生では、７月と１１月に大学別説明会を実施する。生徒が希望する大学から講師を招いてのガイダンスが行われる。また、進路指導主事による複数回のガイダンスも開催され、大学別説明会と合わせて受験準備の道しるべとなっている。

⑵　外部リソースの利用

１・２年生で年３～５回、３年生で１０回以上の模擬試験が学校内外を会場として実施され、進学指導の基礎データとして活用されている。また、2・3年生ではＩＣＴ教材「スタディサプリ」「スタディサプリ ENGLISH」を契約し、自宅で動画視聴による自主学習が進められる環境が整えられ、学力向上に効果を発揮している。

⑶　面接指導・小論文指導

３年生の推薦型選抜や総合型選抜の指導では、先輩たちが残してくれた受験報告書を活用して全ての先生方が担当する個別の面接指導を、また、小論文指導でも分野ごとに専門科目の先生方による個別の添削指導を受けることができる。今年は新型コロナウイルス感染症流行のためリモート面接試験も多くなっているが、生徒の状況に応じたより緻密な指導に取り組んでいる。

５　進路指導とＰＴＡ

現在、松山高校ＰＴＡは「保護者にとって必要な情報の発信に関して、学校側の積極的な活動に協力し、より多くの保護者の参加を促すことにより、間接的に生徒の『行ける』大学ではなく、『行きたい』大学への進路実現に寄与する」方針で活動している。そして、活動の際は松山高校の進路指導がさらに充実するように、ＰＴＡとして集約した意見を学校へ伝えて、学校とともに生徒の進路実現に寄与するように努めている。

進路指導の取組にＰＴＡが大きく関与する行事は２つである。６月に行われる保護者進路指導説明会と２月に行われる進路保護者研修会である。この２つの取組は、いずれも保護者からの強い要望をうけて開始されたものである。

⑴　保護者進路指導説明会

保護者進路指導説明会は、全学年の保護者を対象として、学年ごとに実施している。それぞれの学年の保護者として注意すべき事項を伝えることを目的としており、進路指導主事の説明と卒業生の体験談をもとにした説明を行っている。

進路指導主事からは、前年度の入試結果の報告のほか、今年度の進路指導計画の説明、大学入試の基礎知識、今後の高校生活における家庭での準備・心構え、三者面談に向けて知っておきたいこと等の説明がなされる。

卒業生の体験談は、実際に松山高校で過ごした高校生活のなかで、受験する大学を決定するまでの過程や、合格するまでの道のり等であり、保護者として共感できる内容である。また、各家庭の中で大学受験への不安、子供の家庭での様子への悩みや焦りを抱える保護者にとって今後の高校生活における家庭での準備・心構え等の説明は毎年好評である。

保護者進路指導説明会は、かつては保護者の参加者が少なく、全学年の保護者を一堂に集めての開催であった。しかしながら、参加者を増加させるための工夫を行うことにより、保護者の参加率は約４０％から約６０％まで増加し、平成２２年には３年生の部と１・２年生の部の二部構成になり、令和元年度からは学年ごとの三部構成になった。

⑵　進路保護者研修会

進路保護者研修会は、１・２年生の保護者を対象として、進級後４月からのスケジュー

ルを知り、進路に関する意識を高めるとともに計画的に取り組むことを目的として実施しており、予備校関係者等の外部講師による講演と進路指導主事による説明が行われる。

外部講師による講演では大学入試に向けて留意しておくべきことなど、専門的な視点からのアドバイスを聞くことができ、進路希望の実現に向けて、多様化する入試情報や受験への心構え及びその対策について、今後のスケジュールに沿った形で説明を受けることができる。

進路指導主事からは３年生の大学受験状況と１・２年生の今後の指導スケジュールについての説明がある。

進路保護者研修会も、かつては参加者が少なかったが、保護者進路指導説明会と同様に工夫をすることで、約４０％だった保護者参加率は毎年少しずつ増加し、現在では約６０％になっている。

⑶　その他

かつては、ＰＴＡ広報誌に卒業生による大学入試に関する座談会を掲載する取組や、学校とＰＴＡ進路指導委員の懇談会を開いて進路指導に関する要望を直接学校へ伝える取組、保護者による大学見学会等も行っていた。

しかしながら、以前に比べて共働きの保護者が増加するなど、近年では保護者の多忙化が進み、ＰＴＡ行事への参加が難しい保護者が増加する傾向にある。

その状況を踏まえ、保護者の進路指導に関する要望を学校へ伝えることを目的とした懇談会については取りやめ、その代わりに行事におけるアンケートで保護者の進路指導に関する要望を学校へ届けることとし、卒業生による座談会については保護者進路指導説明会における卒業生の体験談へ、保護者の大学見学会は生徒による大学見学会やオープンキャンパスへの参加等へとリニューアルしてきた。行事内容の充実、行事の土曜日開催、実施回数の精選等、日頃からの不断の見直しにより、保護者の行事への参加率を上げることができた。

今後もＰＴＡとして学校側へ建設的な要望を届ける等、松山高校の進路指導がさらに効果的なものとなるよう、積極的に連携していきたい。

６　おわりに

６月にＰＴＡ会長となってから、本部役員をはじめとする多くの保護者の協力の下で活動してまいりました。しかし、新型コロナウイルス感染症流行の影響のため、現在まで例年どおりのＰＴＡ活動はできていません。そのような状況の中にあっても、「チーム松高」として、保護者と先生方が協力し合いながら、子供たちが充実した高校生活を送り、松山高校を巣立つときには「行ける」大学ではなく「行きたい」大学への進路実現ができるよう、今後とも精一杯バックアップしていきたいと考えています。

※　新型コロナウイルス感染症流行のため、令和２年度は中止。

第3分科会　「生徒指導とＰＴＡ」

発　表　県　　山梨県
発　表　校　　山梨県立都留高等学校
発　表　者　　ＰＴＡ会長　中村　真一
発表テーマ　　「生徒との意見交換会」

1　はじめに

百二十余年の歴史と伝統を持つ都留高校は、これまで県内外を問わず、政財界に多数の優秀な人材を輩出してきた。校訓は「質実剛健・自学進取」であり、教育方針も「誠実な心と健康な身体を持ち、学に励み克己に努める、心身ともにたくましくしなやかな生徒を育成する」と謳われている。

高校のある大月は東京圏へのアクセスがよく、保護者の中には東京の企業へ通勤している方も多い。生徒のちょっとした買い物も甲府へ出向くよりはむしろ、八王子、立川方面へ向かう。教職員の中には東京都に居を構える者もいる。山梨にありながら目は東京に向いており、洗練された文化度の高さや自主性を重んじた校風も東京圏にあることと無関係ではないように思われる。

ＪＲ大月駅から徒歩数分、富士急行上大月駅は学校のすぐ隣にあり、大月・都留にとどまらず広く生徒を確保できる一方で、他地域への生徒の流出もあり、交通の利便性の良さはまさしく諸刃の剣ともなっている。少子化・過疎化の影響で生徒数の減少が予想される昨今、都留高校も生き残りをかけ、伝統校として地域の期待に応えていかなければならない。

目指す生徒像は地域の(集団の)リーダーとなって活躍できる人材の輩出である。素直で真面目な生徒が多く生徒指導上、手のかからない生徒達ばかりであるが、一方でここ数年、「自学進取」の気概に欠ける受け身の姿勢が目立ってもきた。「自学研鑽室」という自習室の利用や、学園祭等各種行事の生徒の自主的な取り組みには、自由で自主性を重んじた校風も部分的(個人的)に見られはする。しかし今後は、それを学校全体へと広げ、高めていかなければならず、ＰＴＡとしてもそこにどう関わっていけるかが課題となっている。

2　本校のＰＴＡ活動

過去には校内強歩大会が実施され、そこでの安全指導・給水補助等がＰＴＡ活動の大きな柱となっていた。しかし、強歩大会が取りやめとなり、それに代わる体育祭の給水補助活動、地域の祭典の巡回等も、コロナ禍の中で中止を余儀なくされている。以前から行っている活動の中で、昨年度継続・実施されたのは、マナーアップ運動への参加とフードドライブへの協力である。

山梨県は、自分や他者の生き方や存在を認め合い、自他を敬愛する「しなやかな心の育成プロジェクト」に取り組んでいる。事業の一環として取り組んでいる「マナーアップ運動」は、県下一斉に

年間５回実施される。都留高校は生徒の 80% が電車通学をしている。参加保護者はＪＲ大月駅、富士急行上大月駅前でのあいさつ励行、マナー向上の呼びかけ、また、大月市内交差点での交通安全指導等行った。保護者を前に、幾分緊張気味の通学生徒も、笑顔でことばをかける保護者に触発され、明るく爽やかなあいさつを交わしていた。

食品ロスを福祉に役立てるフードドライブの活動も全国的な広がりとなってきた。都留高校でも年２回、家庭で遊休品となっている食品の回収を行い、福祉施設への提供をしている。朝の通勤途中に学校へ立ち寄り、食品提供に協力する保護者もいる。ＰＴＡとしては、回収された食品の福祉施設への運搬等に協力している。昨年度は 30 品目、141kg の食品提供があった。今後は回収時期や方法等工夫し、どうすれば活動の輪が広げられるか考えていきたい。

３　都留高探究プロジェクト（通称「つる探」）

都留高校は H29･H30 の２カ年にわたり、県からの指定を受け、生徒指導研究推進校として「生徒の社会性や人間関係能力を高めるための指導のあり方」について研究実践を行った。この研究の中心的活動に据えたのが、H27 に立ち上げ、ようやく軌道に乗ってきた、「都留高探究プロジェクト」（通称「つる探」）である。

「楽しく身体を動かそう」（体育）大月東小学校にて

「つる探」は座学のみならず、地域において様ざまな実践・体験を行うことで、生徒が自ら設定したテーマに対し、探究を深めるという試みである。その成果をまとめ、発表するまでの一連の過程を通し、各自が課題解決力、コミュニケーション力、プレゼン力を涵養するとともに、地域を知り、連携を深め、その活性化に寄与することを主な目的としている。

カテゴリー別発表会の様子

都留高校は、H17 ～ H26 にかけて、SSH 指定校としての、また、地域活性化への取組における過去の経験と実績から、生徒は、主体的に考え、他との繋がりのなかで行動･実践することでこそ、本来のポテンシャルを発揮し、自立に向けより一層成長できるという手応えを得てきた。そこで、

これまで「希望者・代表者」中心であった取組を、１．２年次生全員へと拡大し、一人一人が地域と関わり、社会貢献、自己実現を果たす機会を得ることで、先述の、失われつつある自主性の回復、人間力の獲得を目指したのである。「総合的な探究の時間」を中心的な活動の場としながらも、放課後や休日、年２回の研究推進期間等利用しながら、探究活動は進められている。

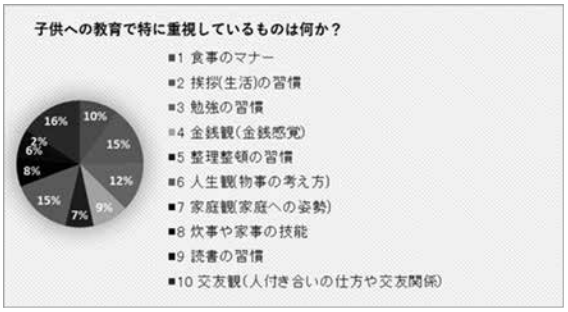
２～５人程度から成るグループに分かれて、自らの興味、関心に基づいて設定したテーマは多岐にわたる。「駅前商店街～高校生が考える地域活性化」「バンクシーから学ぶ芸術の力」「脱スマホ計画」「錯覚の多様性」…など。多種多様な研究の中に、昨年度は世代間ギャップについて研究したグループがあり、ここでの研究が「学校評議員と高校生徒の意見交換会」へとつながっていく。

４　世代間ギャップ研究班の取り組み

「生徒と保護者の考え方、立場の違いを理解し、認め合い、前向きの一歩を踏み出そうと思ったから」世代間ギャップ研究班のテーマ設定理由である。以下世代間ギャップ研究班の研究考察結果を一部抜粋する。

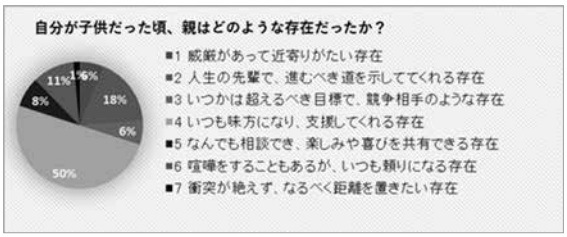
研究テーマ：

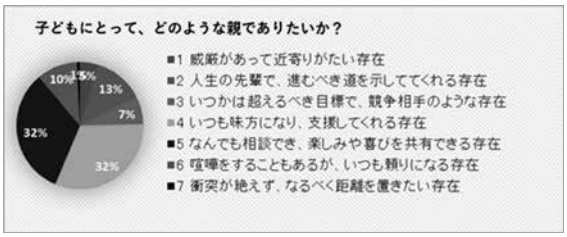
都留高生は「親の心子知らずなのか」

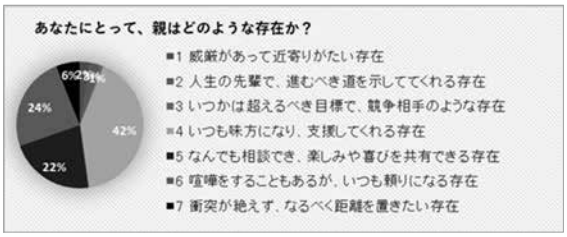


親が人との付き合い方や挨拶、物事の考え方など、人としての在り方を重視したしつけをしているのに対し、親のおかげで金銭感覚が身についたと答える生徒が多いのが面白い。現代の若者は、教えられ、身につけていくというよりも、敏感に感じ取る気質なのかもしれない。

世代間ギャップが叫ばれて久しい。「最近の若い者は…」という枕詞に、いつしか私たちも、慣れっこになってしまっている。父母の世代も祖父母の世代から同じことを言われたはずだ。







家父長制の中で、祖父母世代から厳しく教育された親世代は、私たち若者世代に、むしろ対等な立場から接してくれている。「喧嘩をするほど仲がいい」とはよく言ったもので、現代の親子関係に価値観の違いこそあれ、溝のようなものはなく、むしろフレンドリーであるがゆえに、その裏返しとして口ごたえもしてしまうのだろう。

５　学校評議員と高校生徒の意見交換会

世代間ギャップ研究班の問題意識は、今後の学校運営に資する企画を検討していた学校側の思いとも合致し、意見交換会という形で実を結ぶこととなる。「学校評議員と高校生徒の意見交換会」にはＰＴＡ女性部長も参加した。

意見交換会当日の具体的なテーマは３つ、(1) 進路選択・将来設計について、(2) 世代間 (親・自分・子) の相違について、(3) 地域の将来像について、である。校長がファシリテーターとして会を進行したが、活発な意見交換がなされ、終了後も会場に残り、話し込む姿が印象的であった。参加者からも肯定的な意見が相継いだ。以下は参加した生徒、評議員の感想である。

～生徒感想～

・最近の若者はよく勉強しているし力もある、しかし、挑戦しないと言われ、もっと自信を持つべきだと思った。「あえて苦手なものに挑戦」ということばは、今まで嫌いなものから逃げていた自分にとってとても心に残った。失敗を恐れずにポジティブな気持ちで挑戦したい。

・「今どきの若いもんは…」と考えていると思っていたので、「優秀」「知識が豊富」といった声は意外でした。一部の人が言う悪いイメージばかりが、世間には浸透しているのだなと感じました。自分の思っている以上に大人や親たちは私たちのことを考えてくれているのだなあと知れました。

・若者は集団で集まることが多いと思っていたが、評議員の方から「１人でいることが多い」と言われそういう見方もあるのかと思った。昔の人は家業を継ぐことをまず考えるということが今とは大きく違う。現在は自分で比較的自由な進路選択ができて、幸せな環境にあると思うし、その環境に感謝しないといけない。勉強する環境も整っているのでしっかり生かしたい。

・肩書を見て、堅い人のイメージがあったが、進路の話など自分と似ているところがあった。大人に向けて自分の意見を言うことに緊張したが、良い経験になった。これからの社会を変えていくのは自分たちの世代なので、今回聞いたことを糧に成長していきたい。

・一緒に参加したメンバーは親の仕事を見たことがあると言っていたので、自分も機会があれば見てみたいと思った。そして、進路を決めるために、もっと職業に触れる機会を増やそうと思った。

・私は高校卒業後、皆自分の目標に向かって一直線に進んでいくものだと思っていたが、評議員の方々の話を聞くと、何度も挫折して自分のなりたい職業に就いている人がいたり、自分のなりたい職業とは全く違う職業に就いている人がいたりすることを知り、今からでも自分の目標に向かって取り組めばなりたい職業に就けることを知れてよかった。

～評議員感想～

・自分の子供以外の高校生の意見を聞けて、今の高校生の考えや、様子がわかってとても良い機会でした。

・進路に悩んでいる生徒の思いに触れ、やはり、我々が大人の役割を果たせていないことを実感しました。心を動かされる経験をした生徒、そういった経験がない生徒。我々が様々な場を提供して、どんな生徒にも平等に経験させてあげることが大事だと思いました。

・主体的な意見を持つ子や、自分の将来を考え、進路を決めている子など、生徒の質の高さにとても感心しました。常日頃の先生の指導に頭が下がります。先生と生徒の会話からも、良い関係が築かれている学校の様子を見させてもらい

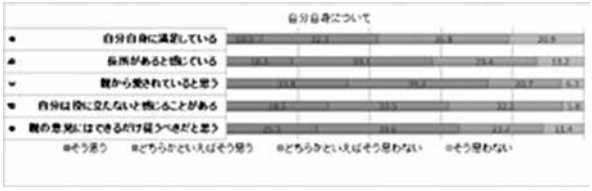
ました。職業人として二つ気づいた意見を申します。近年、世の中は劇的に変化しています。それに対応するため、企業も変化し、求める人材も変わっています。たとえば、エンジニアに英語やコミュニケーション能力が求められ、あるＩＴ企業はプログラマーを文系の生徒しか採用しないなど。昔とだいぶ変化していて、理系や文系といった学校の定義は、社会ではこだわりが無くなっている方向に進んでいます。現代の社会や企業では、どんな力量の人材が必要なのか、もう少し知識を得る機会はあった方がいいと思いました。それと、業種を選ぶ（考える）前に、その仕事を通して、誰を幸せにしたいのかを考えるべきで、その視点で業種や企業を調査すると、企業の理念や事業の目的、社会的意義など、少し違う方向から業種や企業を見ることができます。

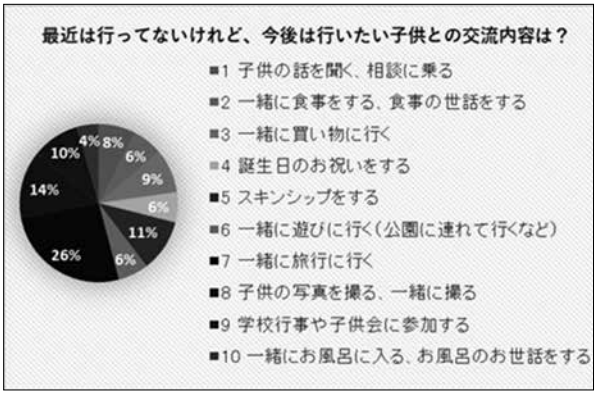
・母親の気持ちを話し過ぎてしまい、高校生にとっては耳の痛い話があったかもしれません。今の都留高生の学ぶ様子や、教育環境を知ることができました。高校生と話す機会があったことで、今の高校生はこんな感じなんだと漠然とですがわかりました。しっかりした考えをもって日々頑張っているのだと感じ、これからも見守っていきたいと思いました。

6　終わりに

学校行事の精選や、コロナ対応としての人と人の接触機会を減らす動きの中で、ＰＴＡ活動をいかに継続発展させていくかということは、頭の痛い問題となっている。「普段見られない生徒の活動の様子を見たい」という一部保護者の要望がある一方で、それをいつ、どのような形でなら実現させられるのか、それが都留高校、とりわけ生徒や教職員のためになるのか、そもそも保護者はどのような形で、どの程度まで学校教育活動に関与していいのか、またするべきなのか…。親と子供の距離感同様、保護者と学校との距離感も難しい時代になってきた。ＰＴＡ活動について本質的な問いかけがされ、その答えはすぐには、見つからない難しさがある。しかし、であればこそ私たちは原点に立ち戻るべきなのかもしれない。今まで通り背中で物言う保護者がいてもいい。しかし、世代間ギャップ研究班が指摘した通り、「意外と話せる保護者」や「自分たちと同じ悩みを抱え、同じ失敗もしてきた保護者」から、とことん話を聞くのもいいのではないかと感ずる。コロナ禍にあって、ＰＴＡ活動も様々な制約下にあるが、過日の「意見交換会」のような、「地に足のついた取り組みと、その共有」こそがＰＴＡ活動の望ましい姿であると確信する。

同じく世代間ギャップ研究班の、注目すべきアンケート結果を掲載し筆をおくことにする。





第3分科会　「生徒指導とＰＴＡ」

発　表　県　神奈川県
発　表　校　神奈川県立相模原弥栄高等学校
発　表　者　ＰＴＡ会長　田代　秀之
発表テーマ　「東西から相模原へ　～相模原弥栄ＰＴＡ白書～」

１．はじめに

相模原弥栄高等学校の PTA 活動について、学校の概要・通常期の活動・コロナ禍における課題・今後に向けての観点より寄稿いたします。

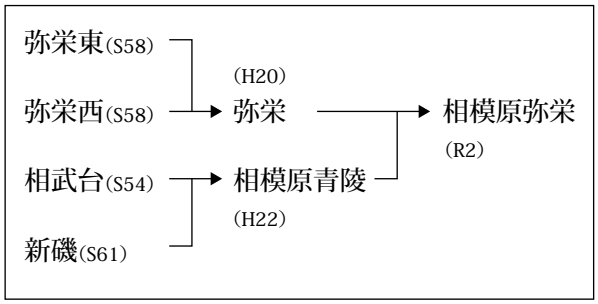
２．東西から相模原へ　６つの学校の流れを汲む特色ある相模原弥栄高校

神奈川県立相模原弥栄高等学校は、神奈川県の北端である相模原市中央区の緑豊かな環境に恵まれたキャンプ淵野辺跡地の一角に２校分の敷地を有しています。

最寄り駅の JR 横浜線淵野辺駅まで徒歩 25 分ほどの住宅街にありながらも、周囲は学校や公共施設、研究機関、自然保存林などがあり、静かで落ち着いた環境です。

令和２年４月に相模原青陵高校と弥栄高校が再編・統合して弥栄高校の敷地と在校生、前身である６校の流れを受けつぎ相模原弥栄高校が開校しました。

本校は普通科と専門学科（音楽科・美術科・スポーツ科学科）が設置された、全国でも珍しい集合型単位制高校です。



専門学科は公立高校とは思えない充実した施設・設備とカリキュラムで学び、普通科高校では考えられないような風景があちらこちらで見られます。普通科も『普通ではない普通科』がうたい文句のカリキュラムと設備の中で学びます。

そのためか県内全域から生徒が集まり、近隣校と比べて市外通学者の割合が高いのが特徴です。最寄り駅からの利用も含めて自転車利用率がかなり高くなっています。

本校は異文化交流の機会を大切にしており、各学科の研修旅行や姉妹校交流などの国際交流をはじめ、身近な例では一年次のクラス編成で所属科を混ぜたミックスクラスでの構成です。

自然とお互いの違い、長所を受け入れて認め合う空気の中で学びが深まり、各々の目標とブレない個性をもった生徒たちの生活からは、プレ大学とも言うべき趣が感じられます。

校舎は「Y・A・E・I」の文字を模っている

３．ＰＴＡは学校生活応援団

本校の PTA は本部と４つの常任委員会（交流推進・広報・環境整備・交通安全推進）で構成され、役員選出時や文化祭の企画時などはそこからさらに委員が選出されて特別委員会が組織されて運営しています。本部を中心に役員会・運営委員会での学校側との協議を通じて、生徒・学校の後押しを PTA の立場でできることを考えて実践してきた伝統が根付いており、活発な活動につながっていると感じます。

(1) 生徒会との懇談

「生徒から直接話を聞ける機会も大切」と考え、一昨年度から生徒会との懇談会を行うよう

にしました。これは、他校のPTA発表を参考に取り入れたものであり、こういったフットワークの軽さも本校の活動の特徴といえます。

この生徒会との懇談では、生徒ならではの意見や希望をうかがうことができ、貴重な機会となっています。

一例として体育祭での暑さ対策としてのテントの増設や、文化祭でのゴミ分別ステーションの配置などの意見が出されました。前者については、学校側が県教育委員会が主催する「かながわ部活動ドリーム賞」へ応募し見事グランプリを受賞、その副賞によりテントが購入され実現されました。

また後者についても、PTAと生徒会とで協力し、翌年の文化祭から取組む方向としましたが、コロナ禍で不特定多数の来場者の制限や飲食の販売禁止などの措置がとられたため、実現には至っていません。

（2）文化祭への応援

秋の一大イベントである文化祭では、例年部活保護者会による飲食等の模擬店の販売の実施に向けた後押しをPTAが担っています。この売り上げは「弥栄応援団基金」に全て積み立てられ、上級大会の遠征時などの補助に充てられることもあり、保護者も積極的に参加します。また、同窓会・PTA本部OB・OGによる展示やカフェなども運営され、世代を超えた交流の場ともなっています。

但し、上述の理由により、昨年度はPTAとして文化祭に参加することは叶いませんでした。制限下の中で行われる文化祭に対しPTAとしてできる取り組みの検討や、これまで培ってきた運営ノウハウの引継ぎ等が懸案事項でもあります。

学園祭でのPTAコーナー「ガーデン・パラダイス」。一昨年は本部OB・OGブースも含め８つの店舗が出店して盛り上げた。

４．神奈川県内初の自転車リサイクルシステム

（1）経緯

常任委員会での特徴的な取り組みとして、交通安全推進委員会の「自転車リサイクルシステム」が挙げられます。これは駅から離れた立地のため、遠距離通学者は自宅～最寄り駅、淵野辺駅～学校の２台の自転車を乗り継ぐ生徒も多く、卒業時に広い学校敷地内に残される放置自転車の処理が問題になっていたことが背景にあります。

「校内の放置自転車をゼロにしたい！」という平成30年度当時の交通安全推進委員の想いから生まれ、神奈川県内初の取り組みとしてスタートしました。

(2) 自転車リサイクルの概要

この取り組みは、卒業時に不要な自転車を引き取り、リサイクルできる自転車を地元の自転車店に依頼して整備し、新入生に必要経費（整備・防犯登録費）で譲り渡すというものです。

新入生には、リサイクルに要した全ての自転車の点検整備費用から、卒業生から預かる500円分を差し引いた代金を均等割りし、これに防

≪卒業生から預かるもの≫
・自転車
・自転車のカギ（予備も含めて）
・防犯登録証
・500 円（リサイクル料金として）

犯登録料金を加えた金額を負担して頂きます。新入生向けの案内チラシには、一人当たり負担する点検整備費用は 3,000 円程と謳われていますが、過去 3 回の実績では 1,000 円に抑えられています。これはご協力くださる地元自転車店のご厚意と、交通安全推進委員会の努力によるものだと考えます。

また当初、新入生への呼びかけは入学説明会時に一斉に行ない、先着順で受付をしていましたが、コロナ禍で説明会が分散実施になったことで抽選方式へと変更しています。

(3) 今後に向けて

今後の改善点としては、回収直後に自転車店で回収自転車のチェックをしてもらう工程を加えることです。

今までは回収した自転車を委員が選別してリサイクルと廃棄に分けていましたが、今年度、見た目がきれいでも修理費用がとても掛かり、修理を断念して譲渡予定者にお断りをするといった事例が発生しました。

交通安全推進委員会による、年に 2 回の自転車点検活動で自転車の状態は比較的チェックされていると考えていますが、点検から数か月でも自転車が傷むということを実感した事例となりました。

今春までの 3 回の取り組みで、70 台ほどの自転車が回収され、40 台近くがリサイクルされています。リサイクルシステム開始前後で 40 台近くの放置自転車を処分したことを考えると、この取り組みはとても有意義で相模原弥栄高校の PTA 活動の一環として誇れるものだと自負しております。

≪放置自転車とリサイクル台数の推移≫（台）

	回　収	リサイクル	廃車数	放置自転車処分
2017年2月	—	—	—	31
2018年5月～2019年2月	放置自転車30台に対し撤去の告知・卒業式で放置自転車を減らす呼びかけを行った結果、放置自転車が10台に減少			
2019年3月	25	12	13	8
2020年3月	19	12	7	—
2021年3月	23	14	9	—
合　計	67	38	29	39

5．コロナ禍での活動

(1) 委員会活動

コロナ禍で活動に制約が多くある中でも「今できる事」を見つけ、今後に繋がるように活動していくことが大切だと考えます。

昨年度、既に非対面での役員選出や専門委員会ではリモート会議などを実践しており、手応えを感じています。

また、交流推進委員会では、例年主催しているバスツアーの開催を断念した一方で、今後の事業実施の在り方を検討することを目的に、委員会有志による研修ツアーを実施し、感染予防の観点からのアテンドや立ち寄り地の予防対策のチェック等を行っています。

(2) 役員選出

役員の選出について、本校ではこれまで入学手続き時に回収する委員会参加希望のアンケートを基に、入学式後の声掛けにより各委員会の委員を募っていました。

しかし、昨年度は入学式の保護者参加が中止となったことにより、以下の様に変更して選出を行いました。

委員会委員募集の流れ
①入学手続き時にＰＴＡの役員アンケート回収
②役員引受可能の回答者を抽出
③回答から希望の委員会に割り振る
④割り振った委員会への参加か参加辞退の受諾回答書を本部から送付。最終意思確認
→　参加確認者を選出

結果として従前に比べ約 1 ～ 2 割少ない委員選出とはなりましたが、各活動に支障のない範囲の委員数を募ることができました。

他方で、委員会活動をアピールする機会がなく、またアンケート項目の「引き受けても良い」の選択肢を選ぶ割合が多く、各人によってどの程度「良い」なのかが非常にみえづらいこ

と等、非対面ならではの課題がいくつか表れています。

特に、本校では慣例上３年間活動に参加して頂くことを前提に募集をしていますが、規約上は「1 年任期で再任を妨げない」と位置づけられているため、このニュアンスを伝える工夫に苦慮しています。

中でも第一子が入学した保護者は、小中学校の習慣での「1 年やれば終わり」、「今やらないと毎年頼まれる」といった感覚がある人が多く、アンケートを踏まえ確認の電話を入れる中でお断わりを受ける事が複数ありました。

逆に、細かいフォローを入れることによって前向きに引き受けてくれるケースもあり、一方通行にならない意思疎通を探っていく必要を感じています。

６．統廃合校のＰＴＡとして今後に向けて

(1) 気持ちを１つに～キャッチフレーズを掲げて～

感染症拡大防止の観点から、PTA 活動を進める上で様々な制約がある現在、次年度に繋げるための活動に終始している状況です。しかし、今まさに「PTA 活動とは何か」を改めて問う機会でもあると考えます。

PTA 活動とは、「親が学校という場を通じて学び・高めあう」ことだと考えますが、そこには一定の交わりが必要であり、現状での課題ともいえます。

そこで、今年度は、これまで設けてこなかった PTA のキャッチフレーズとして『未来（あした）のために…弥栄シナジー 2021』を掲げました。

４つの委員会のシナジー（相乗）によって、知恵を出し合い、今だけでなく未来志向で活動を進めていきたいとの思いを込めました。コロナ禍の今だからこそ、「なぜ活動をするのか」との疑問に応えていきたいと考えています。

(2) 6 校分の想いを大切に

古くからの伝統校が残る一方で、少子化の波を受け県立高校の再編統合は今後も進むものと考えます。相模原弥栄高校は、再編統合を繰り返して誕生した学校です。

今回の再編統合に伴い、私たち弥栄高校の関係者は一抹の寂しさを感じながらも在校生と共に敷地や校舎、校歌などいくつかはそのままの形で受け継ぐことができました。

一方で、完校を迎えた相模原青陵高校の式典に参加した際、生徒や卒業生のパフォーマンスから発せられた母校がなくなる口惜しさには、胸を突かれる思いでした。

同校 PTA では、運営委員会開催の冒頭に参加者全員で校歌斉唱をしていたことが印象的でした。記念碑などの有形物だけでなく、このような「伝統」も引き継いでいけたらと考えています。

再編統合を幾度も経験した本校の PTA だからこそ、今に至るまでの 6 校の卒業生・保護者の想いに寄り添える、そして今後も誕生するであろう他の再編統合校の PTA に一つの道標となるような活動に結び付けていきたいと考えます。

敷地内には、統合した旧校の記念碑等が立ち並んでいる

７．結びに

今回の書面発表の前段となった相模原地区大会の発表に向けた準備は、休校期間を経てほぼ活動ができないという不安の中でのスタートでした。

しかし、準備を通じて自分たちの活動について理解を深め、弥栄らしい発表を目指していく中でお互いの絆が生まれ、深まり、広がっていったように感じています。何年分もの活動と同じ絆を得た思いです。

『東西から相模原へ』。過去から現在、未来へと、“全てが、ここ、弥栄にある”という思いで付けたタイトルです。これからも、私たち相模原弥栄高等学校 PTA は「学校生活応援団」として、生徒と学校を支えていきます。

このような機会を頂きありがとうございました。

第４分科会　「家庭教育とＰＴＡ」

発　表　県　　千葉県
発　表　校　　千葉県立松戸馬橋高等学校
発　表　者　　ＰＴＡ会長　大木　加寿美
発表テーマ　　「馬高流ＰＴＡ活動の在り方」

１　はじめに

（1）本校概要

本校は昭和５２年４月開校　本年度４２年目を迎えました。全２４学級（各学年８学級）若干女子生徒の比率が多いです。

上野～水戸方面に向かう常磐線沿線、松戸駅と柏駅の中間の「馬橋駅」が最寄り駅です。駅からまっすぐ江戸川に向かい約２０分の所にあります。そばに江戸川が流れとても穏やかな環境です。旭町小学校・旭町中学校と隣接しており、小学校・中学校との交流が盛んです。

（2）校訓

・“まこと”をつくせ
（何事にも誠実に取り組める態度の育成）
・自己の限界に挑戦せよ
（部活動で高い目標に挑戦、検定取得等）
・良き国際人となれ
（短期留学・台湾修学旅行等、国際理解教育の推進）

（3）部活動

生徒の加入率は約６５％程度です。７０％超えを目標としています。山岳部が全国高校総体、陸上競技部、男子バレーボール部、水泳部が関東大会に出場しています。

書道部、美術工芸部が全国高校文化祭、茶道部が全国交流茶道フェスティバル、演劇部が関東大会に出場しています。

（4）地域連携

小学校とは、松戸市の「六間川を守る会」とも連携して、花植えボランティアをしています。また、令和２年度は、英語版絵本の読み聞かせをリモートで実施し、千葉県の地方新聞「千葉日報」の取材が入り、掲載されました。

また、小学校・中学校共通の交流として、学習ボランティアで交流しています。中学校とは、ふれあいコンサートを通じて交流をしています。その他にも、大根掘りボランティアや新松戸祭りボランティア等で地域との交流を図っています。

（5）進路状況

進学８１％（４年制大学・短大３３％，専門学校４８％）、就職１５％です。今後は就職にも力を入れていきたいと考えています。

２　ＰＴＡ活動報告

（1）活動概要

私達 PTA 会員のモットーは“無理なく　みんなで　楽しく　笑いながら　誰もができる PTA 活動を目指す！”です。様々な PTA 活動を経て、保護者が明るく子育てをすることで、家庭環境が整うと、子供たちにも良い影響を与えることができる、と考えています。

会長、副会長、書記、会計、会計監査の他に、環境整備委員会、研修委員会、広報委員会の３つの専門委員会の委員長と副委員長、各学年の委員長、副委員長、総勢２６名で常任理事会を

開いております。毎年だいたい年に５回の集まりで、議事をすすめてまいります。常任理事が多い理由は、仕事を細分化し、分業することで個々の負担を減らすためです。そして、PTA 総会の後には歓送迎会、年の終わりには忘年会、行事後の反省会と、保護者だけでなく先生方も参加する懇親会を重ね、親交と交流を深め、PTA 活動が円滑に進むように努めております。

(2) 専門部活動１：環境整備委員会

次に、専門委員会の活動について紹介させていただきます。まずは、環境整備委員会の活動です。毎年９月に天馬祭（文化祭）でバザーの企画運営、12 月に花植ボランティアの準備を行います。

文化祭のバザーでは、ドリンク・おにぎりなどの仕入れ品販売・寄贈品販売・ゲーム　があり全学年が各グループに分かれて作業を進めていきます。

各グループには経験者がいますので、何をしたら良いか分からず手探り状態となることはありません。また１グループは５～６人前後と少人数なので打ち解けやすく、色々なアイデアが出て活発な意見交換が行われています。そして、事前準備に来られない方は、当日の寄贈品販売を担当しますので、それぞれの都合に合わせて、活動に参加できるようになっています。バザーの内容をいくつか紹介します。

ゲームには、輪投げ・射的・ボール投げなどがあります。松戸馬橋高校の近隣に小中学校がありますので、小学生やご兄弟で来て下さるお子様にも楽しんで頂けるようにしています。お客さんがいないときは、役員が童心にかえりゲームを楽しんでいました。

また、地域にある和菓子屋さんより仕入れる、おにぎり・山菜おこわ・みたらし団子なども人気があります。数年前に学校の校章をかたどった焼き印を作成し、通称『馬高どら焼き』を販売しました。初の試みでどうなるかと不安もありましたが、大好評で完売しました。

12 月の花植えボランティアは、近隣の児童と本校の生徒が、地域の方々と協力し、総勢 400 人位で学校周辺に花を植える作業を行い、地域に貢献し親睦を深める大切な活動です。

その前日準備を環境整備委員と、美化委員会の生徒たちで行います。花植えをしやすい様に、様々な花をケースにバランス良く詰める作業を行います。花の配色をどうするかなどを話していくうちに、徐々に話題も広がり、活動を通して楽しい時間を過ごしています。令和２年度は、コロナ禍の影響で、残念ながら全ての活動が中止となりました。活動を再開できる日がとても待ち遠しいです。

(3) 専門部活動２：研修委員会

続いて、研修委員会の活動について紹介させていただきます。

令和２年度はコロナ禍の影響で、色々な学校

行事やPTA行事が中止になりましたが、活動の主である「研修旅行は実施する」となり活動がスタートしました。本校では、非日常的な経験、芸術的文化に触れる体験として、劇場に足を運び観劇するという活動を行ってきました。午前中に現地集合し、近隣ホテルでランチバイキングを楽しみ、その後で観劇し解散します。平成30年度は劇団四季『恋に落ちたシェイクスピア』を、令和元年度には、同じく劇団四季の『アラジン』を観劇しました。参加者からは、とても好評で希望者多数のため、厳選なる抽選を行うほどでした。また、実現できるよう引き継いでいきます。

令和２年度は、研修委員で意見を出し合い、最終的に世界遺産登録の富岡製糸場の見学と川越地区の散策をするプランに決めました。偶然にも、希望者は募集定員と同数のため抽選もなく申込者全員で参加でき良かったです。

当日は、JR馬橋駅に集合し、現地まではバス移動なので、行き帰りの車中余興を検討しました。コロナ禍でマスク着用、会話は控え目が良いのか等、委員のグループLINEで相談を重ねました。その結果、今回は旅行の記念になる土産品の購入をひらめきました。そして、委員で手分けをして飲み物やおやつ、ビンゴゲームの準備など、当日の朝早めに集合して役割分担を決め臨みました。お天気にも恵まれて、準備の甲斐もあり、見学も滞りなくスムーズに終えました。場所を変えて、感染予防対策をたてた美味しい食事をいただきました。その後の川越地区の散策では、情緒ある街並みを堪能し思い思いの買い物を楽しみました。学年を超える情報交換もできて、お土産と共に家庭に持ち帰りました。

バス研修旅行は、色々な心配はありましたが、中止せずに実施できたことで、それぞれに得るものがたくさんありました。今年度の研修委員にとって初めてのことだったので、行き届かない点がありましたが、参加者全員無事に安全で楽しく、旅行を終える事ができて本当に良かったと思います。

(4) 専門部活動３：広報委員会

続いて、広報委員会の活動を紹介させていただきます。広報委員会では、広報誌を年３回、学期末の配布を目指し、保護者の方々に学校の様子をお知らせ出来るよう努めています。様々な学校行事を取材させてもらい、写真を撮影していました。また、写真部の生徒が撮影したベストショットの写真や、飾り気のない学校生活の写真を、生徒達から提供してもらい掲載して作成していました。しかし、令和２年度は、コロナ禍の影響で、あらゆる行事が中止となるなか、実施できた学校行事を伝えるべく、写真をたくさん掲載することにしました。初の試みとして、栄養士監修のもと、お弁当特集を掲載したりと奮闘し、これまで発行したものに負けず劣らずの広報誌が出来あがりました。広報誌を読んだ方からは、『写真が多く掲載されていて、子ども達の様子がわかる。また読みたくなる!!』との声を頂き本当に嬉しく思いました。今後も写真で伝えたいと感じた瞬間でした。

これは、委員長の感想です。

そもそも高校で役員を引き受け、PTA活動をすれば、思春期の我が子の様子を知ることができるかもしれないという気持ちで始めました。

いざ務めてみると、先生方が積極的に携わっていただくことで小・中学校ほどの負担はなく、学校の行事にも堂々と携わることができてとても良かったです。高校生活のヒトコマをうかがえました。コロナ禍の中で必要以上に集まることはできませんでしたが、メールやLINE等を使うことにより編集や校正などをこなすことができました。

個々の負担を減らしたことで、不安を抱いていた保護者から『これならば出来るかも！こんなやり方もアリですね。』と前向きな意見を聞くことができました。また、自然とみんなで助け合う事で、学年を越えて仲間を感じることができました。

(5) 登校指導

その他のPTA活動としては、登校指導という活動があります。2学期の中間考査期間に、朝の登校風景を見守って指導を行います。学校近くの交差点に数名ずつ立ち「おはようございます。」「いってらっしゃい。」と生徒達に声をかけています。

活動中は写真の様に、お揃いの蛍光色のウインドブレーカーを着ていて、校名の入ったのぼりを持っているためPTA活動だと一眼でわかるのです。思春期真っ只中の高校生達ですが、一瞬、戸惑いながらも、マスクの上の目と目が合えば静かに会釈をしてくれたり、気持ちの良い挨拶をかえしてくれたりと、心温まる出来事になっています。活動後には、活発な意見交換を行なっています。この活動は、毎年行なっていますが、年々参加率が上がっており4日間連続で参加する方もいます。保護者からは、引き続き見守っていきたいとの声があがっています。

(6) 講演会

例年は、5月に開催されるPTA総会の前に、会員対象に講師をお招きして、講演会を開催しております。テーマは、毎年、常任理事会で話し合い多方面の内容の講演を企画し盛況のうちに終えております。令和2年度は、コロナ禍の影響で11月に催すことになりました。テーマは、「松戸馬橋高等学校におけるキャリアカウンセリングの現状について」でした。松戸馬橋高校では、千葉県内で唯一、キャリアカウンセラー制度を導入している学校です。令和2年で10年目になるそうですが、NPO法人キャリアサポートネットワークからキャリアカウンセラーの方々が派遣され、定期的に生徒の相談にのってくれています。悩みの解決策を本人から引き出し、導き出すお手伝いをしていただいています。『ホランド興味チェックシート』という専門ツールを駆使して、カウンセラーの方々の豊富な知識と経験で丁寧にお話ししてくれます。カウンセリングを受けた生徒達からは、非

常に役立った、心のモヤモヤが晴れてスッキリしたと大好評の結果を得ています。

講演会に参加した保護者からは、ホランドチェックをやらせてみたい！または、自分もやってみたい、我が子と将来の話をする機会に講演会の内容を参考にしたいといった意見がありました。しかし、残念ながら、キャリアカウンセラー制度の周知率は低くて、お恥ずかしい話ですが、私達保護者も、そのような制度があることを知りませんでした。講演会の終わったその夜に、子どもに進路相談員 (キャリアカウンセラー) さんに、会いにいってらっしゃい！と話しますという意見もありました。学校の取り組みの１つとして、非常に良いと感じているところです。

(7) まとめ

最後に歴代の会長職の保護者の意見を紹介させていただきます。

先生方や理事の方々がたくさん協力して助けてくれたので、皆さんが思っている程 大変なことは無かったです。学校での様子を見られたり、生徒たちと接する機会を頂けたことで、高校生の生の声を聞くことが出来て、自分の子育てにも参考になる、とても有意義な時間を過ごすことができました。全ての生徒たちが松戸馬橋高校に入って良かった！と思って貰えるような３年間を過ごして貰いたいという思いで、微力ながら、色々提案させて貰ったり、活動させて貰いました。とても楽しい３年間でした。

松戸馬橋高校は、入学式後の体育館にて理事決めを行いますが、立候補の理事がたくさんいます。それは、PTA 活動に能動的に関わろうとする現れであり、理事からは忌憚 (きたん) のない意見が出ます。その雰囲気の中で行う会長の職務に、大変な事はほぼありません。

私自身は、会長職を組織のひとつのギアとしか考えていません。会長職は管理職なので下部組織が円滑に活動しているかを見ています。各委員長を信頼し、三役はやたらに積極的介入はしません。皆さんスキルのある精鋭ですし、三役が出しゃばる必要もないのです。

PTA はボランティアなので、役職の違いはあれど関係性は横並びです。おかげで垣根なく関われます。私は力量以上の責務は、副会長や適任者に分業や代行を依頼するスタンスを元から持っていたので、それもストレスなく PTA に関われる要因かもしれません。

それでは、以上をもちまして、千葉県立松戸馬橋高等学校の発表を終わりにしたいと思います。皆さまご静聴ありがとうございました。

第４分科会　「家庭教育とＰＴＡ」

発　表　県　茨城県
発　表　校　茨城県立真壁高等学校
発　表　者　ＰＴＡ会長　杉山　美枝
発表テーマ　「真壁高校とＰＴＡ活動」

１　はじめに

本校が存在する茨城県桜川市は、茨城県の中部に位置し、北は栃木県（真岡市･益子町･茂木町）、東は笠間市・石岡市、西は筑西市、南はつくば市と隣接しています。北の富谷山、東の雨引山・加波山から南の筑波山につらなる山々に囲まれた平野部のほぼ中央を桜川が南下し、市の南北軸を形成しています。その環境のもと多くの湖沼を有し、水資源の確保として活用されています。また、この地域で採れる「みかげ石」を利用した石材業や平野部の肥沃な土地を利用した農業など、地場産業として息づいています。

２　真壁高校の紹介

茨城県立真壁高等学校は、明治 42 年に真壁町立農学校として開校しました。現在は、２万人近い同窓生の方々にしっかりと支えられ、今年で創立 113 年目を迎えました。長き伝統を有する真壁高校は、地域や同窓生の方々から「真高」の愛称で親しまれており「地域のシンボル」として期待されています。

これまで、学科の改編など幾多の変遷を重ねながら、現在は普通科３クラス、農業科２クラス、環境緑地科２クラス、農業・環境緑地科１クラスおよび食品化学科３クラスを有する県内有数の農業関係高校として地域に根ざした教育活動を行っています。

３　PTA 組織

本部委員会は、会長（１名）、副会長（４名：校長含む）、会計（３名：事務長含む）、書記（３名:教頭含む）、監事（３名）と各支部長（10 名）、生徒指導委員長、進路委員長、広報委員長から構成されています。

４　年間事業計画（令和３年度）

４月　７日（水）	第１学年 PTA 支部会
４月２３日（金）	第１回進路・広報・生徒指導委員会、第１回本部委員会
５月　８日（土）	PTA 総会・学年 PTA・支部総会
５月１４日（金）	PTA 総会補充日
６月　１日（火）	朝のあいさつ運動①
７月１８日（日）	PTA 農園管理（トウモロコシの収穫、こんにゃく畑の除草等）
７・８月	夏季休業地域巡回指導
９月　初旬（土）	視察研修
９月１７日（金）	第２回本部委員会
１０月２２日（金）	第３回本部委員会
１１月　１日（月）	朝のあいさつ運動②
１２月　５日（日）	PTA 農園収穫祭
１月１２日（水）	朝のあいさつ運動③
２月　４日（金）	第４回本部委員会、専門委員会 役員選考会①
３月　１日（火）	「PTA だより」発行
３月２５日（金）	役員選考会②

毎年度 PTA 活動の始まりは、入学式後に行われる第１学年 PTA 支部会です。これは各支部長に出席してもらい、新１年生の保護者に年間の支部活動を説明していただく場です。これによりスムーズに５月に開催される支部総会へ進むことができます。では、真壁高校 PTA の特色ある事業・特徴などを一つずつ紹介させていただきます。

5　事業と特徴

(1) 本部委員会

年間４回開催されます。４月下旬に行われる本部委員会では、新年度（PTA 総会後～次年度の PTA 総会まで）の役員の承認、年間事業（案）、会計（案）の承認及び５月に行われる PTA 総会の準備など話し合います。

９月中・下旬に行われる第２回本部委員会では、その時期まで行われた事業の結果及び反省などを話し合います。第３回本部委員会では、各支部晨光祭で何を企画・出店するかが話し合いのテーマとなります。

２月初旬に行われる第４回本部委員会では１年間の事業の反省を中心に話し合います。

(2) PTA 総会

毎年５月初旬の土曜日に開催します。

＜日　程＞

8：30	～		受　　付
8：50	～	9：40	授業参観
9：50	～	10：40	総　　会
10：50	～	11：40	PTA 支部総会
11：50	～	12：40	進路講話２年・１年
11：50	～	13：20	学年 PTA ３年
12：50	～	13：20	学年 PTA ２年
	〃		学年 PTA １年
13：30	～		クラス懇談会

１限目は授業参観が（生徒はその後放課）、２限目に体育館で総会が行われます。ここで年間の事業計画、会計予算および検討事項など審議されます。また、新役員の紹介なども行います。

総会終了後は、指定された教室に移動して

支部総会が行われます。ここでは、各支部の新役員の紹介、年間事業計画など審議されます。その後、進路講話、学年 PTA、クラス懇談会で１日が終了します。

＜ＰＴＡ総会の出席率＞

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
総　会	52（%）	54（%）	57（%）
補充日	63（%）	63（%）	60（%）（含む）

＜ PTA 総会・支部総会の反省と課題＞

・PTA 総会の参加率は、例年 60％前後である。
・支部総会は、PTA 総会と別日に実施していたが、各支部の参加率が低いため PTA 総会後当日に実施している。結果、参加率は上昇し、保護者同士の話し合いも盛り上がり「５０分では時間が足りない。」と申し出る支部長が多くなるほど、活発な意見が交わされるようになった。
・全学年で進路後援会を実施。（１・２年生は、進路について、３年生は、面接に対する心構え・所作等を学習している。）

(3) PTA 農園

真壁高校稲荷原農場の一画にPTA農園を設け、運営と管理をPTAで行い、会員相互の理解を図り親睦を深めています。令和元年度は、60名の保護者・家族・教職員が参加しました。主な栽培品目は、「こんにゃく・ジャガイモ・トウモロコシ」です。管理実施日は、年２回で例年は、６月下旬にジャガイモの収穫、７月中・下旬にトウモロコシの収穫を行っています。

(4) 収穫祭

稲荷原農場で収穫した野菜・作物を利用して「こんにゃく作り」「けんちんうどん作り」をします。以前は、そば打ちなども行っていました。保護者・職員が料理をしながら、和気あいあいと活動しています。調理後の試食の時は、PTA会員同士が生徒たちの学校の様子や部活動の活躍また、支部の運営などについて活発に話し合いがもたれ、貴重な交流の場になっています。

(5) 挨拶運動

生徒指導委員会を中心に６月、11月、１月の年３回実施しています。自宅では、挨拶できない生徒が、学校ではしっかり挨拶している姿を見て保護者たちは、びっくりしています。

(6) 夏季巡廻指導

各支部ごとに、夏季休業中の地域の祭礼の見回りを保護者と支部担当職員で巡回しています。

(7) PTA会報

毎年７月、３月の年２回発行しています。令和２年度は、新型コロナウィルス感染症対策のため広報委員会を実施できず、発行は中止となりました。

(8) 視察研修

進路委員会を中心に、工場や大学・専門学校等を視察研修しています。（毎年９月に実施）令和元年度の例・浅草散策→高級レストランで昼食→江戸東京博物館→本所防災館（暴風雨体験・地震体験、その他）

※　例年参加希望者が多く、２週間以内で定員オーバーのため締め切りとなります。

(9) 晨光祭（文化祭）

各支部が晨光祭で、模擬店を出します。「生徒たちには、負けない！」という気持ちで保護者も楽しんでいます。

＜企画店＞（令和元年度晨光祭より）

真壁支部：フランクフルト
桜川支部：バザー
大和支部：昔ながらの焼きそば
岩瀬支部：ポップコーン＆バザー
協和支部：今川焼き
下館支部：バザー
石岡支部：加工もちの販売＆バザー
二宮支部：くじ引き

明野支部：フランクフルト・ホットドッグ
真岡支部：昔なつかし昭和の縁日

（10）真壁高校公認キャラクター「まかぴょん」

「まかぴょん」は、平成 25 年、当時の 2 年生の男子生徒が原画を描き、その原画を基にコンピュータで編集して生まれたキャラクターです。平成 27 年 6 月には桜川市役所を訪れ、市長を表敬訪問し、「まかぴょん」は、学校と市との連携のスタートとして活躍しています。

真壁高校の生徒たちは、学校行事はもちろん、「収穫祭」などの農作物等の販売や「真壁のひなまつり」などのイベントで、「まかぴょん」と一緒に元気よく活動できるのを楽しみにしています。

6　終わりに

近年、学校で発生している学級崩壊や不登校などの諸問題は、家庭での教育力の低下も大きな要因になっていると考えられます。子供の自立に向けたしつけや情操教育は、各家庭での教育に委ねるほか方法はありません。例えば、子供が勉強に興味・関心を寄せるような家庭での学習補完などの習慣は、親子のコミュニケーションの機会を増やすことや、学級崩壊や不登校に陥る原因の早期発見にもつながると考えます。家庭の教育力の向上のためには、保護者の意識の向上が必要であり保護者、家庭が主体となるような取り組みが必要と考えます。

教育に対する親の意識を高めるという観点で、改めて PTA 活動に注目すると、最近は煩わしいと感じる保護者が増加している様子であり、そうしたところにも家庭での教育力の低下の影響が表れていると思います。まずは、PTA 活動の活性化を促す事業を実施することで、家庭での教育力の向上につなげていくことも可能ではないかと考えます。

第5分科会　「特別支援教育とＰＴＡ」

講　　師　　都留文科大学特任教授　原　まゆみ

演　　題　　高等部の教育実践「青春の太鼓部～一音入魂わかばの響き」

【講師紹介】

・現在、公立大学法人都留文科大学教養学部学校教育学科特任教授
　特別支援学校教職課程の運営及び
　専門科目「知的障害児指導法」「特別支援フィールドワーク２」
　教職必修科目「特別支援教育概論」等を担当。
・日本文化大學非常勤講師、山梨県立やまびこ支援学校評議員、県立ひばりが丘高等学校評議員、北杜市立白州中学校評議員、北杜市社会教育委員、私設図書館はしば文庫主宰
・1981 ～ 2013 まで山梨県教職員として勤務、県立わかば支援学校校長で定年退職。
・2013 ～ 2014 まで県立こころの発達総合支援センター
・2014 ～ 2016 まで都留文科大学非常勤講師、2017 ～現職。

高等部の教育実践「青春の太鼓部～一音入魂わかばの響き」

1　はじめに

〇自己紹介

　私は現在、公立大学法人都留文科大学で特別支援教育を担当し、特別支援学校教職課程を履修する学生の専門科目を教授するとともに、中学校、高校の教職免許取得を目指す学生に「特別支援教育概論」という科目を講義しています。この「特別支援教育概論」は、昨年度から文科省によって教職課程の必修科目とされ、全国の教員免許取得を目指す学生は必ず修得することが義務付けられたものです。学生の多くはこれまでの経験のなかで障害について深くかかわったことがなく、本講義を受けて初めて障害者の問題や特別支援教育の課題について学び、これらの問題が教員を目指す自分にとって決して他人事ではないことを理解し問題意識をもつようになります。さらに彼らは、この科目はすべての大学生が学ぶ必要があるのではないかとも述べています。このような教員養成の仕事をとおして、社会の障害者問題や特別支援教育への理解推進にもつながると考え微力を尽くしているところです。

　さて、私は定年退職まで山梨県特別支援学校の教師として勤務しておりました。特別支援学校での経験は、肢体不自由教育のあけぼの支援学校、知的障害教育のわかば支援学校とかえで支援学校、盲学校で、県教育委員会の経験もあります。私が教師だった時代は養護学校義務制直後からスタートし、高等部設置、重複学級認可も進み障害児教育の充実が目指され、特殊教育から特別支援教育への転換が行われた時期です。

〇知的障害校における教育実践

　特別支援教育がスタートした 2007 年、私は担任教師として 12 年間を過ごした山梨県立わかば

支援学校に教頭として戻りました。そして 2011 年からは校長として 3 年間を過ごしました。18 年もの長い期間を過ごしたわかば支援学校は、私の心の母校でもあります。自然がいっぱいのワイルドなわかばの空気を吸うと新たなエネルギーが湧いてきます。さあ、どんな子どもたちと出会えるのだろう、そんな期待に胸を膨らませてわかばの教育に向き合いました。わかば支援学校での教育実践は小学部、中学部、高等部と経験し、それぞれの発達段階に応じた教育課題について、子どもたちや保護者から多く学ばせていただきました。現在も卒業生や保護者の方々と交流があり、良き思い出と感謝の気持ちでいっぱいです。

こうした経験を踏まえ、今回の講演では特に大規模化、多様化が進む高等部教育に焦点をあてお話したいと思います。以下の講演内容は実践記録（原 2015）を基にしたものです。皆さまと一緒に良き思い出を辿り、意義を確認したいと思います。

2　高等部の教育実践「青春の太鼓部～一音入魂わかばの響き」

〇高等部の歴史

わかば支援学校は養護学校義務制に先立つ 1974 年、県が初めて児童福祉施設に隣接して設置した知的障害教育校です。開校時に高等部はなく、遅れて 1981 年に設置されました。障害のある我が子にも高等部の教育を受けさせたいという保護者の願いを背景に実現したものです。当初は定員 10 人で、定員を超えると重度障害の生徒は不合格となり、合格発表の日、担任は落胆する親子の姿を泣く泣く見送らなければならなかったといいます。やがて高等部希望者全員入学の願いに応えて定員は増加し、不合格を出さなくなりました。次第に地域の中学校からの入学希望者が増加し、1998 年には学外入学が過半数を超える逆転現象が起きました。この傾向は益々強まっています。

こうした高等部の増加は全国的な状況であり様々な課題を山積させています。「教室不足」に代表される施設設備の問題、障害の多様化に伴う教育課程の見直し、社会参加を見据えた進路開拓や進路指導の見直し、教師の専門性の確保、等々です。2007 年に教頭として着任した私は、高等部の増加と多様化に驚くとともに、わかば支援学校で学ぶと決めた生徒や保護者に充実した高等部の 3 年間を提供したい、との思いを新たにしました。

〇新たな高等部教育のデッサン

小中学部からわかばで育った「わかばっ子」と、地域の中学校を卒業して入学してくる生徒が入り混じる高等部。新学期は混乱の時期であります。「わかばっ子」は新しい高等部生活の見通しがもてるまで時間がかかり、パニックを起こすこともあります。一方、軽度障害の新入生は重い障害のある仲間と初めて出会い、自分は彼らと一緒にここで学ぶのか…という葛藤に向き合うことになります。また軽度障害の彼らが引き起こす様々な逸脱行動に職員が振り回されると、重度障害の生徒に光が当たらなくなるといった負の側面も見られます。多様な生徒を含み込む高等部教育が求められることから、私たちは精力的な検討を経て新たにコース制の教育課程を導入しました。生活コースと自立コースです。

生活コースは「ゆっくり学ぶ」をテーマとし、障害の重い生徒がじっくり人や物と関わり、関心の幅を広げ、生活を楽しむ力を育てる青年期に相応しい学びを探求します。テンポの速い軽度障害の生徒たちのペースに振り回されず、自発的な行動を待ち、一人ひとりの特性を生かした学習活動が組立て易くなると考えました。

自立コースは「学び直しと自分づくり」をテーマとし、軽度障害生徒の増加＝就労準備教育といった単純化されたスローガンの下ではなく、目の前に立ちすくんでいる困難を抱えた子どもを深く

理解し、「どうせダメな自分」を体に染み込ませている生徒の意欲を紡ぎ出し、「わかばでいいじゃん」と思えるような魅力的な学校生活を創り出すことを目指しました。学び直しの理科で、浮力の実験の後「あれ、浮力の仕組みが分かるぞ、浮力って面白いなあ」「授業中、初めて自分の考えが言えたぞ」というつぶやきや、障害の重い同級生が親しげに身振りで伝えてくれることがなんかわかる感じがしてうれしい気持ちなど、一つひとつの体験的な学びから「分かった」を実感したり、他者の気持ちを想像したりして自分の気持ちを振り返るという積み重ねが、自分づくりの核になっていくと考えました。

〇太鼓部の取組み

もう一つの教育活動として部活動があります。太鼓部は毎年、高等学校芸術文化祭郷土芸能部門に出場しています。特別支援学校枠ではなく一般高校枠での出場です。和太鼓奏者の天野宣によるオリジナル曲「萌ゆるわかば」を引っ提げて、本気で優勝を狙って出場するのです。心も体も定まらない混乱期の1年生は「やってやれないことはない、やらずにできるわけがない」のスローガンと、一心に太鼓に取組む先輩たちに憧れて入部します。演奏技術だけでなく礼節を重んじ、まずは挨拶ができるよう先輩に指導されます。始めの内は簡単な拍打ちもできない生徒たちに、顧問の教師たちは一人ひとりに合わせた指導を工夫し粘り強く向き合っていきます。週1回の練習日ではなかなか上達できませんが、保護者送迎の負担を考えると練習日を増やせないのが悩みです。高文祭前は特別に送迎の協力をお願いし、早朝練習と夏季合宿を行い補っています。

夏季合宿は重要な練習日です。新入生は1学期を終えて学校生活に見通しがもてるようになり、3年生も最上級生としての自覚が育ってきます。自分の限界に挑む合宿に耐えられず途中で腹痛を訴える1年生。2年生の雄介（仮名）は全体をリードする鐵（てつ）を任され重い責任に耐えかねています。担当するパートの習得に苦戦して泣き出し、顧問に激励されている女子生徒や、「演奏がまとまらない、これでは高校生に負ける」とイライラしている生徒もいます。障害の程度による技術レベルの多様性に加え、生育史や生活環境も様々な生徒達をひとつの演奏にまとめ上げていくのは容易ではありません。そのことは教師だけでなく生徒自身も分かっているのです。猛暑の甲府盆地の夏、様々な葛藤を抱えながら、朝から晩まで体育館で汗だくになりながらバチを握る姿は圧巻です。障害のためにこれまでチャンスを得られなかった部活動の醍醐味を、全身で味わっているようです。

〇高等学校芸術文化祭を目指す生徒の姿

厳しい夏季合宿を乗り越えると、「萌ゆるわかば」が曲らしくなってきて、2学期はいよいよ高文祭に向けたステップアップです。鐵を担当する雄介は、中学校ではほとんど言葉を発することがなく不登校気味の生徒でした。家庭の事情が複雑で祖父母に養育されており、自分の気持ちを表現することは苦手です。そんな雄介がチーム全体をリードする鐵を任されたのですが、自信がないまま地域の演奏会に臨み、全体のリズムを崩して演奏が中断するという失敗も経験しました。雄介は小さい声だがしっかりと「鐵を自分のものにしたいので…」と言って、一人リズム練習をしていました。雄介の闘志が伝わる言葉でした。

児童福祉施設から通う佳織（仮名）は、1年生の時は締太鼓で難しいリズムに取り組んでいましたが、2年生になって笛に抜擢されました。息遣い、指使い、メロディーやリズムなど、笛は特に難しい楽器です。控えめでコツコツ練習するタイプの佳織は笛の専門家の黒田先生の指導で音が出せるようになり、「萌ゆるわかば」の前奏曲に挑戦し始めました。前奏曲は静かな雰囲気のある曲想で相応しい音色を出すのはとても難しいと思われますが、佳織はいつも笛を持ち歩き、時間

を見つけては練習を重ねていました。そんな佳織に憧れて同じ児童福祉施設の同級生も笛に挑戦し始めました。

部長の健児（仮名）は中学部の時、児童福祉施設に入所してわかばに転校してきました。当時はしばしば不安定になり教室から飛び出したり泣き出したりしていました。高等部に入ってからは随分精神的に落ち着き、特に技術が優れているわけではないが部長を任されました。そのことで更に自信がついたようで、後輩たちへも優しく接し模範となるような行動を心掛けていました。

〇高文祭出場

11 月下旬、総勢 42 人の個性豊かな太鼓部は集大成となる高文祭に出場しました。もちろん目標は優勝です。開幕 3 番目はいよいよわかば支援学校。緞帳が上がり気迫を込めた礼。佳織たちによる笛の前奏曲が始まると息を呑むように会場が静まり、鐵や締太鼓が加わって演奏が萌え出すと気分が高揚してきます。丸胴太鼓や桶胴太鼓のしっかりした音と腹から出す掛け声、体いっぱいの振り姿と次々に直球で迫ってくる演奏に客席は圧倒されていました。演奏が終わり最後の礼。会場は大きな拍手で盛り上がり、緞帳が下りても拍手はずっと鳴り止みませんでした。

この感動はいったい何だろう、と考えました。ちょっとぶきっちょで、うまくバチが動かない。長い曲がなかなか覚えられない。うまくいかない自分に時々溜息をつきながら…、でもかっこよく叩きたい。先輩みたいになりたい。いい音で叩きたい。練習に遅れたくない。みんなと合わせたい…。わかばの太鼓が、純粋でエネルギーに満ちていて、聞いている人の心を熱くさせるのは、そんな一人ひとりのまっすぐな心が、太鼓の音に現れているからではないか。言葉少なで、力強く、一心に打ち込む姿が人々を豊かにしてくれる。これが文化なのかもしれないと思います。この太鼓部の活動が高等部生活を充実させ、人間的に成長し卒業してからも自分を育て続ける糧となるだろう。そんなことが私の脳裏を駆け巡っていました。

〇涙の反省会

4 番目以降は一般高校で、少人数で細々と部活動を続けている職業高校、全国大会連続出場の伝統校、芸能教育を特化させている私立高校などが出場しました。高校生の演奏も素晴らしく技術だけでなく舞台構成や照明、演出など目を見張る部分がたくさんありました。それでも 3 位入賞は不可能ではないと思われました。会場の拍手は断トツの 1 位だったのですから。

しかし成績は 5 位でした。今年もまた一般高校に食い込めていないのです。これだけ観客の胸を打つ演奏でも審査員の得点には結びつかない。悔しさを抱えて表彰式を終え、控室で反省会です。この日を最後に引退する 3 年生が一言ずつ挨拶をします。

「優勝の夢を叶えられなくて悔しいです」「来年はがんばって優勝して全国大会に行ってください」「いい仲間と一緒に演奏できてうれしかったです」「後輩にやさしく教えてあげてください」

皆、泣いています。顧問も泣いています。がんばった生徒の姿に感動し、高校を超えられない悔しさに泣いています。わかばの太鼓部は「一音入魂」を部訓とし、全国大会出場の大きな夢に向けて「やってやれないことはない、やらずにできるわけがない」と、苦しくても仲間と一緒に挑戦する心と体を育てています。卒業生は顧問から繰り返し聞いたこの言葉を胸に刻んで巣立っていくのです。

わかば太鼓部の活動はテレビ山梨のドキュメンタリー番組「一音入魂～わかばの響き」として放送され、平成 22 年度ＪＮＮネットワーク協議会のネットワーク大賞を受賞しました。1 年間密着取材したスタッフの岩崎亮（岩崎 2013）は、「わかば支援学校には仲間と助け合ってやり遂げる姿、先生と生徒がお互いに信頼し合って成長していく姿があります。私たち“健常者”と言われ

る人々が学ぶべき、学校教育の本来の姿が、この学校には存在するのです」と述べています。

〇学校から社会への移行を支援する

部長の健児は卒業と共に児童福祉施設を退所し、県内のＡ支援学校の業務員として働き始めました。これは県教育委員会が障害者雇用促進のため知的障害者を支援学校の業務員として雇用する新制度「チャレンジ雇用」です。県内で 10 人雇用されており、わかばでも採用しているが、健児は自宅から通えるＡ支援学校に応募し採用されました。ベテランの業務員さんに丁寧に仕事を教えてもらい、施設管理や清掃など一生懸命働くので大変高く評価されていました。

笛を担当した佳織は進路選択の難しさに直面しました。児童福祉施設を退所するため、グループホーム探しと並行して進路開拓が必要です。一般企業の障害者雇用が決まらず苦戦していた折、ドキュメンタリー番組で太鼓部の活躍を知ったＣ老人介護施設の役員が来校しました。そして卒業生の社会参加を促すことは大切なことと考え、介護の助手としての雇用を検討してくれることになりました。佳織はＣ老人介護施設に実習に行きました。初めて足を踏み入れる老人介護施設で、大変緊張しながらの実習だったと思います。しかし、いつも笑顔で礼儀正しい佳織への評価は高く、介護の現場は任せられないが助手的な仕事を切り出せば採用できる、できればヘルパー２級の資格を取得してきてほしいと申し出がありました。

〇介護助手の職域開拓

この申し出を受け、今後も介護の職域での採用に可能性があると考え、ヘルパー２級取得の方法を検討しました。当然、特別支援学校高等部普通科に資格取得の教育課程は置けません。県の進路指導主事会で紹介のあったヘルパー講習の会社に相談したところ、知的障害者の社会参加の道を開く必要があると前向きに受け入れてくれました。早速、希望する生徒、保護者に紹介し 10 人程が申し込みました。佳織も入所している児童福祉施設の協力を得て受講しました。ヘルパー講習は一般成人や高校生と一緒の内容です。果たしてわかば支援学校の生徒が修得できるだろうかとの心配があり、希望する職員も生徒とともに受講し、私も受講しました。講義中にウトウトすると生徒に「校長先生、居眠りはダメでしょう」と大きな声で注意されたり、車椅子移乗などコツのいる介護に苦心して励まされたりしました。生徒たちは担任に通信課題をサポートしてもらい、施設実習も経て、全員が無事資格を取得しました。佳織も資格を取り、晴れてＣ老人介護施設に就職しました。

佳織が老人介護施設に就職して３年目を迎えた頃、友人からうれしい電話がありました。友人の実母は高齢でＣ老人介護施設に入所し、佳織に担当されているというのです。友人は施設を訪問するたびに優しくて素晴らしい介護士さんだなと思っていて、話しかけたところ、わかばの卒業生と聞いて感動したとのことでした。他の介護士に遜色なく仕事に取り組んでいると知り、私も成長ぶりに驚きました。高等部での学習や部活動をとおして蒔いた「自分を育てる種」が芽吹いたのでしょう。まさに「萌ゆるわかば」そのものだと思いました。

わかばは毎年夏に同窓会を行います。1974 年の開校から 46 年が経過し高齢の同窓生もいます。毎年 200 人を超える同窓生が母校に集まり、カラオケやゲームを楽しみ、和太鼓「萌ゆるわかば」の演奏を楽しみます。卒業して何年も経っているのに生き生きと体が動き現役時代に戻ったようです。輝く青春の高等部が再現される一瞬なのですが、昨年からはコロナ禍のために同窓会が開催できず大変残念です。

3　おわりに

高等部部活動の取り組みをお話してきましたが、特別支援学校高等部で生徒たちが自分を育てる種を蒔き、自分らしい社会参加の姿を見せてくれることは、大きな喜びです。上述の太鼓部の卒業生たち以外にも、色々な存在の仕方で社会参加している卒業生がいます。例えば、Mさんは卒業後に企業に一般就労しましたが､離職して生活を崩してしまいました。しかし福祉の支援を受けて生活を立て直し、数年後に職を得て結婚もして子育てを頑張っています。Eさんは高等部の頃はいつも自信がなさそうな生徒でしたが、地元の温泉ホテルに就職して17年間も厨房の仕事をやり遂げていました。Yさんは重度の障害があり入所施設で暮らしながら、絵画教室で素晴らしい作品をたくさん描いています。ご両親はそのたくさんの作品を前に改めてYさんの作品の価値に気づき個展を開催されました。Yさんの描画はその見事な色使いと筆遣いが、見る者に生きるエネルギーを伝えています。卒業生はそれぞれ自分らしい生き方や暮らし方をしていて、保護者の方々も成人した我が子との暮らしを楽しんでおられます。そんな姿に日常の小さな幸せがあり、高等部卒業後の様々な生き方があることを教えられています。

私の講演は以上です。拙い内容ではありますが、特別支援学校に在学中の保護者の皆様がひと時立ち止まって、子どもさんの将来を考える一助になれば幸いです。お読みいただきありがとうございました。

〈文献〉

岩崎　亮 2013『JNN 情報誌ネットワーク NOW 2013 春号』

原まゆみ 2015「輝く青春の太鼓部～一音入魂わかばの響き」雑誌『教育』10 月号

_____ 2005『マサの卒業と高等部教育』群青社

_____ 2013「特別支援教育とキャリア教育」『精神科治療学』第 29 巻　星和書店

_____ 2017「社会参加に躓く若者の恢復と学びの場の創造
－制度の狭間を支える「かけはし学校」の試み－」臨床教育学研究第 5 巻

_____ 2021「発達障害等のある若者の学校から社会への移行期支援に求められるもの
－思春期キャリア支援プログラムの実践検証をとおして－」

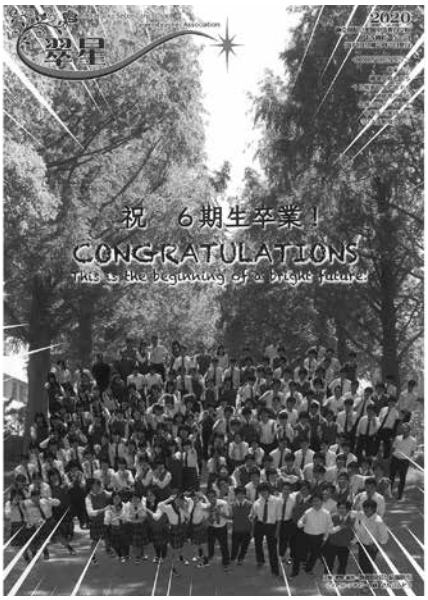
放送大学大学院修士論文

以上

広報紙紹介ページ

神奈川県立高等学校ＰＴＡ連合会

発 行 者 名：神奈川県立平塚中等教育学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「翠星」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：１，１００部
配　布　先：在籍生徒の保護者、一部県立高校など



第 43 回の奨励賞に続き、第 44 回広報紙コンクールにて最優秀賞を頂きました。「翠星」21 号は、表紙が明るく元気との講評を頂きました。内容も、保護者向けの講演会や、6 年間の英語教育への特色ある取り組みなど、しっかり取材して書いた記事が評価され、嬉しく思います。頑張りがカタチになる喜びを味わえた活動でした。

発 行 者 名：神奈川県立中央農業高等学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「ちゅうのう」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：８００部
配　布　先：生徒、職員、地域学校

職員紹介は、なかなか他の科の先生方を知る事が少ない、専門学科がある中央農業の先生方をいかに分かりやすく、また先生方の個性を少しでも伝わるように紹介できるかを工夫しました。先生方の積極的なご協力により中央農業らしい楽しさが伝わる紹介ページが作成出来たと思います。その他、生徒達の活動など全て掲載しました。

発 行 者 名：神奈川県立神奈川総合高等学校パートナーズ（わが校独自の PTA 名称）
広 報 紙 名：「 ざっくばらん 」
年間発行回数：３回
発 行 部 数：１，４００部
配　布　先：在校生の保護者、卒業生（希望者）

第 44 回広報紙コンクール優秀賞 (神奈川新聞社賞) 受賞！全てを子ども達が主体となって運営する行事や、「入学するのは子どもだけじゃない」を合言葉に、土曜には 100 名以上の親が自主的に来校するパートナーズ活動等、公立校でありながら超個性的な神奈総の全てを広報紙で紹介。もしかしたら子どもより楽しんでるかも。（笑）

広報紙紹介ページ

栃木県高等学校ＰＴＡ連合会

発 行 者 名：栃木県立鹿沼東高等学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「ＰＴＡだより」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：７５０部
配　布　先：在籍生徒保護者、教職員

栃木県立鹿沼東高等学校ＰＴＡでは、年２回「ＰＴＡだより」を発行しています。例年７月の会報には、５・６月に行われる運動部の大会結果報告を掲載しています。

しかし、令和２年度は大会が実施されず、コロナ禍での授業、学校生活の様子を中心に掲載しました。今年度は生徒の活躍を報告できることを楽しみにしています。

発 行 者 名：栃木県立小山高等学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「小高ＰＴＡ会報」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：１，０００部
配　布　先：在校生徒の保護者

会報誌を通してＰＴＡがどのような活動をおこなっているか、先生方の紹介や生徒の活躍の様子などが伝わるよう心がけています。高校生になり学校を訪れる機会が少なくなってしまう保護者の方にも学校を身近なものに感じ、ともに生徒を育成する「チームの一員」であると意識してもらえるよう心がけて編集をしています。

発 行 者 名：栃木県立矢板東高等学校・同附属中学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「銀杏（いちょう）」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：１，０００部
配　布　先：附属中学校・高等学校 (全日制・定時制) の全ＰＴＡ会員

本校のＰＴＡ広報紙は、一般的な連絡や報告記事以外に学校行事での生徒達の活動の様子をＰ会員が取材し、Ｐ会員が保護者目線でまとめ上げる記事が毎回大変好評を得ている。今後は動画を含め、紙媒体からインターネットを活用した広報紙へ移行していくことを現在検討中である。

発 行 者 名：千葉県立東葛飾高等学校ＰＴＡ広報委員会
広 報 紙 名：「広報東葛」
年間発行回数：２～３回
発 行 部 数：１，５００部
配　布　先：保護者、教職員

令和２年度は、感染リスクを避けることと作業負担を減らすことを軸に、広報紙づくりに取り組みました。どんな情報を発信したいのか、考えをすり合わせる上で、クラウドサービスやアプリが大変役に立ちました。この経験を今後も生かしていきたいです。
直近の入賞歴：平成３０年度全国高等学校ＰＴＡ連合会佐賀大会千葉県代表

発 行 者 名：千葉県立国府台高等学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「広報　鴻の台」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：１，８００部
配　布　先：在籍生徒の保護者、地域の町内会（回覧板を使用）

広報「鴻の台」が千葉県代表に選出されたという御報告を頂き、喜びより驚きの気持ちで一杯です。コロナ禍において様々な活動が制限される中、「生徒のためにできることをできる範囲でやる」をモットーに、活動を続けました。記事の収集には大変苦労しましたが、多くの方々の御協力により無事発行することができました。

発 行 者 名：千葉県立流山おおたかの森高等学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「ＰＴＡ会報　おおたかの森」
年間発行回数：３回
発 行 部 数：１，７００部
配　布　先：在籍生徒の保護者、学校関係者

今年度は、コロナ禍でＰＴＡ活動にも制限がありました。そうした中でも、何とか生徒たちの学校生活の様子を伝えられたらと思い、広報委員会で知恵をしぼりました。

広報紙紹介ページ

埼玉県高等学校ＰＴＡ連合会

発 行 者 名：埼玉県立鳩山高等学校ＰＴＡ広報委員会
広 報 紙 名：「飛翔」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：６００部
配　布　先：在校生の保護者

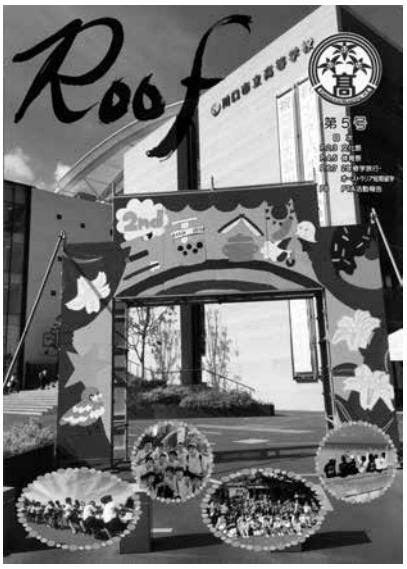
・令和２年度に全ページフルカラー印刷とした。
・入学式や卒業式をはじめとする学校行事やＰＴＡ行事の様子などを、カラー写真を中心として紹介することで好評を得ている。

発 行 者 名：埼玉県立和光国際高等学校ＰＴＡ広報部
広 報 紙 名：「みづのき」
年間発行回数：３回
発 行 部 数：１，０００部
配　布　先：教職員・各家庭等

高校になると保護者が学校に行く機会も減り、子供がどのような様子で過ごしているか気になります。「みづのき」を見れば学校生活がわかるようになるべく沢山の行事を取材し、記載しています。また、ＰＴＡ各部が企画するイベントの取材を通じて、保護者同士の交流を楽しんでいます。

発 行 者 名：川口市立高等学校・附属中学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「Ｒｏｏｆ」
年間発行回数：３回
発 行 部 数：２，０００部
配　布　先：川口市立高等学校・附属中学校保護者、地域等

・職員紹介豪号：学校の教職員の紹介
・入学式や体育祭、文化祭、修学旅行、卒業証書授与式等の学校行事
・各部の部活動紹介やＰＴＡの各専門部等の活動紹介
・短期留学(オーストラリア)紹介等
○コロナ禍なので、現在は難しい面もある。可能な範囲を紹介する。



広報紙紹介ページ

群馬県高等学校ＰＴＡ連合会

発 行 者 名：樹徳高等学校後援会長
広 報 紙 名：「樹幹だより」
年間発行回数：３回
発 行 部 数：３，１００部
配　布　先：全保護者、関係中学校、関連企業、関連団体その他

昭和５７年７月創刊、本校の学校後援会（生徒保護者の会）発行の保護者宛新聞で、昨年度末に１１７号を数えました。年３回、各学期末に発行され、各学期に行われる後援会活動や地区別保護者懇談会の様子等をはじめ、高Ｐ連関連行事への参加報告、また、部活動を中心とした生徒の活躍なども詳しく掲載しております。

発 行 者 名：群馬県立前橋西高等学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「黎明」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：６００部
配　布　先：在校生と保護者、教職員

広報紙名の「黎明」は、校歌の歌い出し「黎明告げる赤城の峰」に由来する。昭和５８年開校の新設校のイメージで命名された。

例年は年２回の発行であったが、昨年はコロナ禍の影響で年１回の発行となった。新型コロナウィルスへの対応のもとで実施された様々な学校行事が綴られている。

発 行 者 名：群馬県立嬬恋高等学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「群馬県立嬬恋高等学校ＰＴＡ通信」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：２００部
配　布　先：保護者、教職員

本校ＰＴＡ通信は年２回発行され、ＰＴＡ本部役員の活動や生徒の部活動、資格試験等における取組みを保護者の方に紹介しています。

広報誌を通して、本部役員が各種行事への参加を通して学んだ知見を学校全体で共有することができ、学校や家庭におけるより良い教育への一助となっています。

広報紙紹介ページ

茨城県高等学校ＰＴＡ連合会

発 行 者 名：勝田高等学校 PTA 広報委員会
広 報 紙 名：「たらさき」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：１，０００部
配　布　先：生徒・保護者

本校で毎年２回発行される広報紙「たらさき」は、100％本校の保護者によって作成されています。作成にあたる保護者は、取材のため学校行事に参加し、写真撮影から生徒へのインタビュー、編集まですべてをこなし、約１ヶ月をかけて力作を完成させます。保護者ならではの目線で作成される記事は、教員が気が付かない生徒の輝きがあふれています。

発 行 者 名：茨城県立水戸第二高等学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「水戸二高ＰＴＡだより」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：１，２００部
配　布　先：生徒および保護者

茨城県立水戸第二高等学校は、１２１年の歴史を誇る伝統校です。文化祭や講演会など多種多様な特別活動に参加する子どもたちを取材し様子を伝えています。また、部活動等に対する取り組みも熱心であり、全国大会出場を果たす部活動もあるので広報誌の紙面は生徒の活躍で彩られています。

発 行 者 名：茨城県立潮来高等学校ＰＴＡ広報委員会
広 報 紙 名：「潮来高校ＰＴＡ会報」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：７５０部
配　布　先：

本校は、創立１１０年余の歴史と伝統を誇り、潮来市内唯一の高校である。ＰＴＡも令和元年度には、元タカラジェンヌの堀内明日香氏の講演会の企画、関東地区高Ｐ連大会分科会での提案発表、鎌倉方面への研修視察、文化祭でのバザーの実施など様々な活動を行うことができた。以前のように活動できる環境を待ちわびている。

広報紙紹介ページ

山梨県高等学校ＰＴＡ連合会

発 行 者 名：甲陵高校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「mews（みゅうず）」
年間発行回数：２回
発 行 部 数：６５０部
配　布　先：中・高保護者、職員

・山梨県高等学校ＰＴＡ広報誌コンクール最優秀賞
（Ｈ２６、２７、２８、３１年度）
・本校のＰＴＡは、「子供の成長とともに歩むＰＴＡ」を目指して、講演会やオリエンテーリング、フードドライブなどの活動を行っています。。

発 行 者 名：甲府西高校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「n・stage for parents」
年間発行回数：１回
発 行 部 数：１,２００部
配　布　先：保護者、教職員、次年度新入生、
同窓会役員　等

昨年度はＰＴＡ行事に制限がかかる中、できることを大切にしました。進路講演会は他会場を借りて実施、フードドライブ活動には多くの協力を得ました。朝の登校時指導では元気よく登校する生徒の姿に保護者も安心しました。諸活動が存分にできなかった生徒達の精神的支えとなった保護者の思いが詰まった広報誌です。

発 行 者 名：山梨県立吉田高等学校ＰＴＡ
広 報 紙 名：「ヒマラヤ杉」
年間発行回数：１回
発 行 部 数：９００部
配　布　先：ＰＴＡ会員

吉田高校は、富士北麓地域の県立高校です。普段の授業や部活動、学校行事を通して未来を生き抜く力を身につけることができるように「吉田高校グラデュエーションポリシー（吉高ＧＰ）」を掲げて教育活動を行っています。ＰＴＡは富士登山強歩大会、蒼風祭（学園祭）、通学時マナーアップ運動などで学校と協力して活動しています。

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会被表彰者（団体）一覧

【○印　団体】

県　名	所　属　学　校　名	県連・単位ＰＴＡ役職名	氏　　名
神奈川県	県立湘南台高等学校	前県連副会長	石　倉　保　男
	県立平塚中等教育学校	〃	鈴　木　ゆかり
	県立大師高等学校	〃	片　岡　邦　彦
	県立小田原城北工業高等学校	前県連会計	安　田　奈　々
	県立海老名高等学校	前県連総務	栗　原　誉　紀
	県立麻生高等学校	前県連理事	西　田　展　子
	県立湘南高等学校	〃	黄　　晋　二
	県立山北高等学校	〃	山　内　亜佐子
	県立厚木東高等学校	〃	笹　　盛　明
	県立上鶴間高等学校	〃	琴　野　総　子
栃木県	県立馬頭高等学校	前県連副会長	谷田部　　学
	県立今市工業高等学校	〃	柴　田　貴　充
	県立のざわ特別支援学校	〃	染　宮　由美子
	県立鹿沼商工高等学校	前県連理事	磯　田　良　一
	県立足利工業高等学校	〃	澤　口　大　樹
	県立大田原女子高等学校	前県連監事	増　子　政　秀
	県立足利清風高等学校	〃	片　庭　和　美
	○県立鹿沼東高等学校	県立鹿沼東高等学校ＰＴＡ	
	県連	前事務局長	澁　江　一　雄
千葉県	県立八街高等学校	前県連会長	櫻　井　澄　香
	県立市川南高等学校	前県連会計	小　柴　尚　美
	県立松尾高等学校	前県連監事	小　林　史　枝
	○県立船橋法典高等学校	県立船橋法典高等学校ＰＴＡ	
	○県立八街高等学校	県立八街高等学校ＰＴＡ	
	○県立松尾高等学校	県立松尾高等学校ＰＴＡ	
	○県立木更津高等学校	県立木更津高等学校ＰＴＡ	
埼玉県	県立春日部女子高等学校	前県連会長	枡　田　幸　弘
	県立大宮光陵高等学校	前県連理事	石　川　純　子
	県立皆野高等学校	〃	福　田　由　理
	県立草加高等学校	〃	廣　島　かず美
	県立所沢西高等学校	〃	諸　星　昭　彦
	県立杉戸農業高等学校	〃	綱　島　里　美
	○県立久喜高等学校	県立久喜高等学校ＰＴＡ	

県　名	所　属　学　校　名	県連・単位ＰＴＡ役職名	氏　　名
群馬県	樹徳高等学校	前県連副会長	杉　戸　健　二
	県立館林女子高等学校	〃	齋　藤　千　秋
	県立伊勢崎商業高等学校	〃	鳥　毛　正　毅
	県立高崎北高等学校	〃	青　木　和　哉
	県立尾瀬高等学校	〃	青　木　美由紀
	県立前橋西高等学校	前県連監事	齋　藤　かおる
	県立前橋女子高等学校	〃	椎　名　健　介
	県連	前事務局長	髙　瀬　　昇
茨城県	県立笠間高等学校	前県連会長	安　見　貴　志
	県立高萩清松高等学校	前県連副会長	我　妻　康　伸
	県立波崎柳川高等学校	〃	浪　川　浩　之
	県立土浦工業高等学校	〃	杉　浦　博　美
	県立古河第三高等学校	〃	張　替　　修
	○県立鹿島高等学校	県立鹿島高等学校ＰＴＡ	
	○県立笠間高等学校	県立笠間高等学校ＰＴＡ	
	県連	前事務局長	大　内　　穣
山梨県	県立甲府工業高等学校	前県連副会長	保　坂　喜　一
	県立身延高等学校	〃	望　月　裕　司
	県立笛吹高等学校	〃	中　川　恒　明
	県立富士北稜高等学校	〃	渡　邊　卓　史
	県立富士河口湖高等学校	〃	小　川　弘　一

令和３年度　関東地区高等学校ＰＴＡ連合会役員名簿

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会

役職名	氏　　名	所属県連	役職名	全国高Ｐ連役職
会　長	米　山　　賢	神奈川	会　　長	理　　事
副会長	金　田　　淳	栃　木	会　　長	監　　事
	須　合　勝　雄	千　葉	会　　長	健全育成委員
	繁　田　　剛	埼　玉	会　　長	調査広報委員
	山　口　　明	群　馬	会　　長	研　修　委　員
	木　村　光　広	茨　城	会　　長	進路対策委員
	宮　川　勇　徳	山　梨	会　　長	
理　事	佐々木　智　央	神奈川	副 会 長	
	杉　山　　肇		事務局長	
	阿久津　信　一	栃　木	副 会 長	
	白　相　　寛		事務局長	
	椎　名　泉　美	千　葉	副 会 長	
	林　　修　一		事務局長	
	沢　辺　真由美	埼　玉	副 会 長	
	島　﨑　育　夫		事務局長	賠償責任補償制度運営委員
	井　上　幸　己	群　馬	副 会 長	
	中　澤　則　行		事務局長	
	長　岡　大　亮	茨　城	副 会 長	
	金　澤　秀　美		事務局長	
	小　野　將　史	山　梨	副 会 長	
	赤　池　　亨		事務局長	
監　事	市　村　杏　奈	神奈川	監　　事	
	渡　貫　由季子		監　　事	

令和３年度 関東地区高等学校ＰＴＡ連合会 事務局一覧

県名	会の名称	事務局所在地	会長名	事務局長名
神奈川	神奈川県立高等学校 ＰＴＡ連合会	〒 231-0023 横浜市中区山下町２番地 産業貿易センタービル９階 TEL：045-641-0337 FAX：045-641-0338 E-mail：kana.koupren@kanagawa -koupren.org	米山　　賢	杉山　　肇
栃　木	栃木県高等学校 ＰＴＡ連合会	〒 320-0066 宇都宮市駒生１－１－６ 栃木県教育会館内 TEL：028-625-1882 FAX：028-622-6327 E-mail：tkpr@star.ocn.ne.jp	金田　　淳	白相　　寛
千　葉	千葉県高等学校 ＰＴＡ連合会	〒 263-0011 千葉市稲毛区天台町２８５ 千葉県総合スポーツセンター宿泊研 修所内 TEL：043-255-0687 FAX：043-255-0681 E-mail：chibakoupren@nifty.com	須合　勝雄	林　　修一
埼　玉	埼玉県高等学校 ＰＴＡ連合会	〒 330-0063 さいたま市浦和区高砂２－２－２０ かぶらぎビル５Ａ TEL：048-822-3690 FAX：048-825-3030 E-mail：sai.p@saikoupren.jp	繁田　　剛	島﨑　育夫
群　馬	群馬県高等学校 ＰＴＡ連合会	〒 371-0801 前橋市文京町２－２０－２２ 群馬県生涯学習センター内 TEL：027-223-3173 FAX：027-223-3199 E-mail：gun-koup@theia.ocn.ne.jp	山口　　明	中澤　則行
茨　城	茨城県高等学校 ＰＴＡ連合会	〒 310-0011 水戸市三の丸１- ５- ３８ 茨城県水戸生涯学習センター内 TEL：029-221-1448 FAX：029-231-1660 E-mail：iba-kopren@dolphin.ocn.ne.jp	木村　光広	金澤　秀美
山　梨	山梨県高等学校 ＰＴＡ連合会	〒 400-0031 甲府市丸の内３－３３－７ 山梨県教育会館内 TEL：055-226-7290 FAX：055-226-7133 E-mail：ymn-kprn@iaa.itkeeper.ne.jp	宮川　勇徳	赤池　　亨

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会 年次別開催県一覧

年度	回	開催県 & 会場	臨場の文部省（文部科学省）関係者
昭和 30	1	山　梨（甲　府）	
31	2	新　潟（湯　沢）	
32	3	東　京（熱　海）	
33	4	神奈川（箱　根）	
34	5	栃　木（鬼怒川）	文部省社会教育官　諸井　三郎
35	6	新　潟（新潟市）	文部省視学官　高山　政雄
36	7	茨　城（水　戸）	文部省視学官　小和田武紀
37	8	山　梨（甲　府）	文部省視学官　小和田武紀
38	9	神奈川（小田原・箱根）	文部省文部事務次官　内藤誉三郎 文部省視学官　小和田武紀 文部省財務課長補佐　宮園　三善
39	10	埼　玉（長瀞・秩父）	文部省文部事務次官　内藤誉三郎
40	11	群　馬（高崎音楽センター・伊香保町）	文部省視学官　小和田武紀
41	12	茨　城（第１日目　大洗ビーチパレス） （第２日目　県民文化センター）	文部省視学官　神谷　四郎
42	13	山　梨（第１日目　石和町） （第２日目　甲府機山高校）	文部省視学官　鳥巣　通明
43	14	神奈川（第１日目　青少年会館） （第２日目　青少年センター）	
44	15	東　京（東京文化会館）	文部省初中局長　宮地　茂 文部省高校教育課長　望月哲太郎
45	16	栃　木（那須町）	文部省初中局長　宮地　茂
46	17	千　葉（鴨川市）	
47	18	埼　玉（浦　和）	
48	19	群　馬（水　上）	
49	20	茨　城（水　戸）	
50	21	山　梨（甲　府）	
51	22	東　京（新　宿）	文部省高校教育課長補佐　加藤　史雄
52	23	栃　木（塩原町）	文部省高校教育課長補佐　加藤　史雄
53	24	千　葉（千葉市）	文部省入学試験係長　菊地　誠
54	25	埼　玉（浦和市）	文部省社会教育局社会教育課振興係長 五十川隆夫
55	26	群　馬（水上町）	

年度	回	開催県 & 会場	臨場の文部省（文部科学省）関係者
56	27	茨　城（水戸市）	
57	28	山　梨（富士吉田市）	
58	29	栃　木（藤原町）	
59	30	東　京（新宿区）	
60	31	千　葉（千葉市）	
61	32	埼　玉（浦和市）	
62	33	群　馬（前橋市）	
63	34	茨　城（水戸市）	
平成 元	35	山　梨（小瀬体育館）	
2	36	神奈川（横浜市）	
3	37	栃　木（第１日目　宇都宮市） （第２日目　藤原町）	
4	38	千　葉（鴨川市）	
5	39	埼　玉（大宮市）	
6	40	群　馬（前橋市）	
7	41	茨　城（水戸市）	
8	42	山　梨（アイメッセ山梨・石和町）	
9	43	神奈川（横浜市）	文部省体育局学校健康教育課 教科調査官（助言者）　戸田　芳雄
10	44	栃　木（第１日目　宇都宮市） （第２日目　藤原町）	
11	45	千　葉（鴨川市 / 文化体育館アリーナ）	
12	46	埼　玉（大宮市 / ソニックシティ）	
13	47	群　馬（前橋市 / 総合スポーツセンター）	文部科学省大臣官房総括 会計官（後援講師）　徳永　保
14	48	茨　城（那珂町 / 笠松運動公園体育館）	
15	49	山　梨（甲府市 / 小瀬スポーツ公園）	
16	50	神奈川（横浜市 / パシフィコ横浜）	
17	51	栃　木（宇都宮市 / マロニエプラザ）	
18	52	千　葉（千葉市 / 千葉ポートアリーナ）	
19	53	群　馬（前橋市 / 総合スポーツセンター）	
20	54	茨　城（つくば市 / つくばカピオ）	
21	55	山　梨（甲府市 / 小瀬スポーツ公園）	
22	56	神奈川（横浜市 / パシフィコ横浜他）	

年度	回	開催県 & 会場	臨場の文部省（文部科学省）関係者
23	57	栃　木（宇都宮市 / マロニエプラザ他）	
24	58	千　葉（千葉市 / 千葉ポートアリーナ他）	文部科学省初等中等局教育課程課 教育課程企画室長　　大金　伸光
25	59	埼　玉（さいたま市 / 大宮ソニックシティ他）	文部科学省スポーツ・青少年局学校安全教育課 安全教育調査官（基調講演者）　佐藤　宏樹
26	60	群　馬（前橋市 / 総合スポーツセンター）	
27	61	茨　城（つくば市 / つくばカピオ）	
28	62	山　梨（甲府市 / 小瀬スポーツ公園他）	
29	63	神奈川（横浜市 / パシフィコ横浜他）	
30	64	栃　木（宇都宮市 / マロニエプラザ他）	
令和 元	65	埼　玉（さいたま市 / 大宮ソニックシティ）	
2	66	群　馬〈中止〉	
3	67	山　梨〈中止〉※紙上開催	

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会会則

第１章　総　　則

（名称及び本部所在地）

第１条　　この会は、関東地区高等学校ＰＴＡ連合会（以下関東高Ｐ連という）と称し、本部を会長県連事務局におく。

（組　織）

第２条　１　この会は、関東地区各県（群馬県、茨城県、山梨県、神奈川県、栃木県、千葉県、埼玉県）高等学校ＰＴＡ連合会をもって組織する。

２　この会は、一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会（以下全国高Ｐ連という）の構成員となる。

（目　的）

第３条　　この会は、関東地区高等学校ＰＴＡ連合会相互の連絡を密接にし、相協力して高等学校教育の振興をはかることを目的とする。

（事　業）

第４条　　この会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

（１）関東地区各県高等学校教育の充実振興に関すること。

（２）全国高Ｐ連との連携。

（３）他地区高等学校ＰＴＡ連合会との連絡提携。

（４）その他本会の目的達成に必要な事業。

第２章　役　　員

（役員の種類と定数）

第５条　　この会に、次の役員をおく。

（１）会　長　　１名

（２）副会長　　６名

（３）理　事　　若干名

（４）監　事　　２名

（役員の選任）

第６条　１　会長･副会長並びに監事は総会において選任し、その就任は関東高Ｐ連大会終了後とする。

２　会長は、関東高Ｐ連大会次年度開催県連会長があたる。

３　副会長は、前項以外の県連会長があたる。

４　理事は、各県より２名（事務局長を含む）とし、必要に応じて会長指名の理事をおくことができる。

５　監事は、総会において選任された会長の県連とする。

（役員の任務）

第７条　１　会長は、この会を代表し、会務を統理し、総会・役員会の議長を務める。

２　副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときは代行する。

３　理事は、役員会に出席して会務を審議する。

４　監事は、会計を監査して、監査結果を総会において報告する。

（役員の任期）
第８条　１　役員の任期は１年とする。
　　２　補欠により選任された役員の任期は、前任者の残任期間とする。
　　３　役員は、後任者が就任するまでは、その職にあるものとする。
（顧　問）
第９条　　この会に、顧問をおくことができる。顧問は会長が総会に諮り推薦する。任期は役員に準ずるものとする。

第３章　会　　議

（会　議）
第 10 条　この会議は、総会と役員会及び委員会とする。
（総　会）
第 11 条　１　総会は毎年一回開催し、必要に応じて臨時総会を開くことができる。
　　２　総会は各県連代表５名をもって構成する。
　　３　総会の決議は、出席者の過半数以上の同意を必要とする。
　　４　総会に付議する事項は次のとおりとする。
　　（１）事業の計画並びに報告
　　（２）予算決算
　　（３）役員の改選
　　（４）会則の改廃
　　（５）その他
（役員会）
第 12 条　役員会は必要に応じて会長が招集する。
（委員会）
第 13 条　１　この会に、次の委員会をおくことができる。
　　（１）総務委員会
　　（２）健全育成委員会
　　（３）進路対策委員会
　　（４）調査広報委員会
　　（５）研修委員会
　　（６）その他の委員会
　　２　委員会は各県より選出された委員若干名により構成する。
　　３　委員長は、委員の互選による。
　　４　委員長は、(社) 全国高Ｐ連定款第３４条に定める委員会の委員となる。
　　５　委員会の招集は、会長又は委員長がする。
　　６　委員会は、全国高Ｐ連委員会の報告及び各県高Ｐ連の課題・照会事項等について協議を行う。

第４章　大　　会

（大　会）

第 14 条　１　大会は、各県高等学校ＰＴＡ連合会の会員によって構成し、本会の目的推進のため、年次大会を開催する。

２　大会で、この会の表彰規定による表彰を行う。

第５章　会　　計

（経　費）

第 15 条　この会の経費は、会費及び分担金その他の収入をもってあてる。

（会費・大会分担金）

第 16 条　１　会費は各県連年額２万円とし、５月末までに本部に納入しなければならない。

２　大会分担金はその都度決定して徴収する。

（会計年度）

第 17 条　この会の会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。

第６章　補　　則

（個人情報保護）

第 18 条　個人情報の保護に関する必要な事項は、役員会の議決を経て別途定める。

（全国高Ｐ連関東地区代表理事）

第 19 条　全国高Ｐ連関東地区代表理事１名は、次年度関東地区高Ｐ連大会開催県連会長があたる。

（帳　簿）

第 20 条　この会に、次の帳簿を備える。

（１）役員名簿

（２）議事録

（３）会計帳簿

付　則

１　この会則は、昭和６３年６月１７日より実施する。

２　この会則は、平成２０年７月３日より実施する。

３　この会則は、平成２１年７月２日より実施する。

４　この会則は、平成２４年７月５日より実施する。

５　この会則は、平成２４年１０月４日より実施する。

６　この会則は、平成２９年７月６日より実施する。

７　この会則は、令和元年７月１１日より実施する。

８　この会則に明記のないものは役員会で決める。

表　彰　規　定

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会

1　本連合会は、高校ＰＴＡ活動において、特に著しい功績が認められる役員または団体に対し、年次大会の席上において表彰状と記念品を贈呈する。

2　各県高等学校ＰＴＡ連合会は、毎年５月末までに表彰候補者または団体を本連合会に推薦し、その決定は役員会がこれに当たる。

3　表彰候補者または団体を本連合会に推薦する場合は、表彰事由等必要事項を記入する。

4　表彰候補者は各県会員５万人以上は１０名以内、５万人以下は８名以内で、退任者に限る。また、団体表彰が必要な場合には各県１団体を原則とし、定数枠の内数とする。

5　記念品代は各県で負担する。

昭和４９年３月２７日　　改訂
昭和５６年７月　８日　一部改訂
平成 元 年７月　５日　一部改訂
平成１４年２月　５日　一部改訂
平成１６年７月　９日　一部改訂
平成２４年２月１７日　一部改訂
平成２７年２月　５日　一部改訂

※　申し合わせ事項

各県連会長・事務局員が退任する場合には、表彰規程４枠外の表彰者とし、その記念品代は当該県で負担するものとする。

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会表彰規定に関する事項

平成２年９月 26 日

１　大会表彰に関する申し合わせ

（１）　規程により、各県から５月末までに表彰候補者を関東高Ｐ連へ推薦する。

（２）　各県連においては、表彰候補者を推薦内定と考え、次の措置をとる。

①　当該者が大会への参加を希望される場合は、他の参加者に加えて、所定の期日（通常５月末日）までに参加申込みを行う。

②　その参加費は免除し、申込者の参加費欄に「表彰候補者」と記入する。

（３）　関東高Ｐ連は次の対応をとる。

①　各県連からの推薦資料を整理して、６月１０日頃までに各県連事務局に送付する。各県連事務局は当該県連の役員の意見を徴して、６月１５日頃まで関東高Ｐ連へ回答する。

②　前項の手続きによる持ち回り役員会によって、表彰者を決定する。

③　６月２０日頃までに各県連宛に表彰者の決定通知及び大会への参加案内状を送付する。

平成２７年２月　５日　　一部改訂

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会に係る個人情報保護に関する細則

（目的）

第 1 条　本細則は、関東地区高等学校ＰＴＡ連合会（以下「関東高Ｐ連」という）が関東高Ｐ連の業務を通して取得した会員の個人情報を適切に管理、利用、保護し、もって会員のプライバシーを保全することを目的とし、合わせて、個人情報の適正な取扱いに関し関東高Ｐ連の個人情報保護に関する施策の基本となる事項を定め、よって会員の権利、利益を守り関東高Ｐ連の業務の健全な向上をはかることを目的とする。

（個人情報保護基本方針）

第 2 条　関東高Ｐ連は、個人情報の保護に関する考え方や方針を定めた個人情報保護基本方針を策定して、対外的に公表し、会員および社会的な信頼を確保する。

2　個人情報保護基本方針は、役員会が決定し、公表する。

（個人情報の定義）

第 3 条　会員の個人情報とは、氏名、住所、電話番号やその他の記述等により、当該本人を識別することができるもの（他の情報と容易に照合することができ、それによって当該本人を識別できるものを含む。）をいう。

（個人情報収集の原則）

第 4 条　関東高Ｐ連が行う会員の個人情報の収集は、関東高Ｐ連の事業の運営に必要な範囲に限定し、会員本人又は会員が同意する第三者から公正な手段によって収集されなければならない。なお、関東高Ｐ連が会員等から個人情報を収集するに際しては、当該情報の利用目的及び当該情報が第６条の各号に該当する者に開示されることがあることについて明示した文書に同意の署名を得た上で行うことを原則とする。

（個人情報利用の原則）

第 5 条　関東高Ｐ連による会員の個人情報の利用は、予め公表した利用目的の範囲に限定して利用されるものとし、会員の同意なく目的外の利用をしてはならない。

（第三者への個人情報提供の制限）

第 6 条　関東高Ｐ連は、次の各号に該当する場合を除き、会員本人の個別の同意なくして、その個人情報を第三者に提供してはならない。

（１）　関東高Ｐ連が業務の一部を外部に委託しており、委託業務の遂行のために必要不可欠な場合

（２）　関東高Ｐ連が加盟し、又は役員を派遣している関係団体であり、かつ会員の利用を主目的とする提携事業を行っており、提携事業の遂行のために必要不可欠な場合

（３）　法令等により、関東高Ｐ連が相手方に当該情報を提供することが義務づけられている場合

（情報管理の原則）

第 7 条　会員の個人情報を扱う関東高Ｐ連の部署・担当者は、関東高Ｐ連において収集・蓄積された個人情報に対して、不正な破壊、改ざん、紛失、或いは目的外の利用、不正な流出等が、何人によっても行われることのないように厳正に管理しなければならない。

（会員の開示請求等）

第 8 条　関東高Ｐ連は、関東高Ｐ連が管理している個人情報に関して会員本人より開示請求がなされた時には、遅滞なく当該個人情報を閲覧に供し、或いは、コピー等を交付することにより開示しなければならない。但し、開示する文書の中に第三者に関する個人情報が含まれる場合においては、当該部分を削除した上で開示するものとする。

２　会員は開示された個人情報の内容につき誤りがあると考える場合には、正しい情報への訂正を請求することができる。

３　関東高Ｐ連は、会員からの訂正請求に理由がある場合には遅延なくこれを訂正するものとし、訂正請求に応じない場合は、その理由を本人に通知するとともに訂正請求がなされたことを当該情報の原本に付記しなければならない。

４　会員は、次の各号のいずれかに該当する場合は、第９条による個人情報保護審査会に不服申立てをすることができる。

（１）　第三者の個人情報として除外されたことによる非開示の確証を求める場合

（２）　本人の訂正請求に関東高Ｐ連が応じない場合

（３）　その他、本人の個人情報の取り扱い方法に関して苦情がある場合

（個人情報保護審査会）

第 9 条　関東高Ｐ連は、個人情報の適切な収集、管理、利用、保護等を推進するにあたり、個人情報の開示、訂正、苦情等に関する適法、適正な取り扱いをはかるために、関東高Ｐ連役員会のもとに個人情報保護審査会を設置する。会長は、この個人情報保護審査会に以下の各号について諮問する。

（１）　個人情報に関する不服申し立てについての審査

（２）　個人情報保護方針に関する諮問

２　個人情報保護審査会の組織と運営等については、別途定める。

（会員外個人情報保護）

第１０条　関東高Ｐが取得した会員外個人情報についても本細則を準用する。

（個人情報保護法等の遵守）

第１１条　個人情報保護の管理運用にあたっては、本細則の他、「個人情報の保護に関する法律」及び関連法規に拠るものとする。

（改廃）

第１２条　本細則の改廃は、役員会において行う。

（施行）

第１３条　本細則は平成２９年１０月２６日より施行する。

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会　個人情報保護方針

関東地区高等学校ＰＴＡ連合会（以下「関東高Ｐ連」という）は、各県連ＰＴＡの相互の連絡協調を図るとともに、相協力して教育の振興発展に寄与することを目的としています。

この目的を実現するために、会員の個人情報を取り扱っております。個人情報の安全･確実な管理は、わたしたちに課せられた社会的使命であると認識し、以下の方針を定め、個人情報の保護に努めます。

１．個人情報の収集・利用について

関東高Ｐ連は、個人情報の収集・利用に際し、利用目的を特定し、適法かつ公正な手段により収集するとともに、特定した目的以外には利用しません。

２．個人情報の適正な管理について

関東高Ｐ連は、個人情報の適正な管理のために、保護方針等を定め、これに基づく必要かつ適切な安全管理措置を講じます。

３．個人情報の第三者への提供について

関東高Ｐ連は、業務の円滑な遂行のため、目的の範囲内で共同利用又は業務委託を行う場合があります。この場合及び法令の定めにより必要とされる場合を除いて、本人の同意を得ずに第三者への提供は行いません。

４．法令等の遵守について

関東高Ｐ連は、個人情報の保護に関連する法令等を遵守します。

第６７回
関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会

山梨大会　準備記録

１　開催要項
２　大会宣言文
３　大会役員

第67回（令和3年度）関東地区高等学校PTA連合会大会
山梨大会開催要項

1　趣　旨　関東地区高等学校ＰＴＡ連合会の会員が一堂に会し、健全でたくましい心身と優れた知性を持ち、創造性に富み国際感覚豊かな青少年を育成するため、各県におけるＰＴＡ活動についての意見や情報の交換し、高等学校及び中等教育学校並びに特別支援学校ＰＴＡの望ましいあり方を探求し、新しい時代の高校教育及び 特別支援教育の充実と発展に役立てる。

2　主　催　関東地区高等学校ＰＴＡ連合会

3　共　催　一般社団法人　全国高等学校ＰＴＡ連合会

4　主　管　山梨県高等学校ＰＴＡ連合会

5　後　援　山梨県教育委員会（予定）
甲府市教育委員会（予定）
山梨県高等学校長協会（予定）

6　参加者　神奈川県、栃木県、千葉県、埼玉県、群馬県、茨城県、山梨県の各高等学校及び中等教育学校並びに特別支援学校ＰＴＡ会員

約２，０００名

7　総　会　令和３年７月　８日（木）　会場：ホテル談露館

8　大　会

全体会　令和３年７月　９日（金）　会場：小瀬スポーツ公園武道館
分科会　令和３年７月１０日（土）
第１分科会（学校教育とＰＴＡ）　会場：山梨県民文化ホール　大ホール
第２分科会（進路指導とＰＴＡ）　会場：山梨県民文化ホール　小ホール
第３分科会（生徒指導とＰＴＡ）　会場：甲府市総合市民会館　芸術ホール
第４分科会（家庭教育とＰＴＡ）　会場：甲府市総合市民会館　山の都アリーナ
第５分科会（特別支援教育とＰＴＡ）　会場：山梨県地場産業センター　大ホール

9　日　程

区　分		月　　日	時　　間	行 事 内 容	
総　会		7月8日 （木）	13：00～13：50 14：00～16：00 17：30～19：30	受付 関東地区高等学校 PTA 連合会総会 （各県代表５名） 大会運営会議	ホテル　談露館 （甲府市）
大会	役員会	7月9日 （金）	10：30～ 11：00～	受付 大会役員会 （正副会長、県連新会長、事務局長） 分科会打ち合せ （司会・発表・進行の担当者）	小瀬スポーツ公園 武道館 （甲府市）
	全体会	7月9日 （金）	10：30～ 11：20～12：20 12：40～14：10 14：30～15：40 15：50～16：00	受付（全体会場） 昼食及びアトラクション 開会式・表彰式 記念講演 　　講師：上田誠仁 氏 閉会	
	分科会	7月10日 （土）	9：30～ 10：00～11：55 12：00～	受付 分科会（５分科会） 山梨大会閉会式	県民文化ホール 総合市民会館 地場産業センター
教育視察		7月10日 （土）	13：00～	教育視察（希望参加） ※３コース設定	山梨県内

10　分科会

分科会	領　　域	提案担当県	発　表　校	会　　場
第１分科会	学校教育と PTA	①埼玉県 ②群馬県	県立杉戸高等学校 県立大間々高等学校	県民文化ホール 大ホール
第２分科会	進路指導と PTA	①栃木県 ②埼玉県	県立小山高等学校 県立松山高等学校	県民文化ホール 小ホール
第３分科会	生徒指導と PTA	①山梨県 ②神奈川県	県立都留高等学校 県立相模原弥栄高等学校	甲府市総合市民会館 芸術ホール
第４分科会	家庭教育と PTA	①千葉県 ②茨城県	県立松戸馬橋高等学校 県立真壁高等学校	甲府市総合市民会館 山の都アリーナ
第５分科会	特別支援教育とＰＴＡ	山梨県	講演及び情報交換会 講師：原まゆみ 氏	地場産業センター 大ホール

11　協議題の発表及び進行役分担

分科会	分　担	神奈川	栃　木	千　葉	埼　玉	群　馬	茨　城	山　梨	備　考
第１分科会	進　行 発表者				●	●			●印 年度順 担当分科会 ○印 年度順 担当分科会 ◎印 開催県 担当分科会
第２分科会	進　行 発表者		●		○				
第３分科会	進　行 発表者	●						●	
第４分科会	進　行 発表者			●			●		
第５分科会	進　行 発表者							◎	

12　参加諸経費等

⑴　参加費（但し、表彰者及び表彰団体代表者は参加費免除です）

全　　日　　制　　6,000 円
定　　時　　制　　3,500 円
特別支援学校　　3,500 円

⑵　宿泊費　※後日案内

⑶　輸送費　（シャトルバス運行）　　１日 1,500 円　※マスク着用者のみ

７月　９日（金）　ＪＲ甲府駅　→　全体会場【小瀬スポーツ公園】
全体会場【小瀬スポーツ公園】　→　ＪＲ甲府駅及び各宿泊施設
７月１０日（土）　各宿泊施設　→　各分科会会場＜５会場＞
各分科会会場＜５会場＞　→　ＪＲ甲府駅 or 石和温泉駅

⑷　教育視察費（各コースとも、最少催行人数２０名）

●Ａコース：（日帰り）（話題のリニア見学センターと桃狩り）　@ 8,000 円

甲府駅北口 ➡ 御坂農園グレープハウス ➡ 山梨リニア見学センター ➡ JR 大月駅

●Ｂコース：（日帰り）（日本一の渓谷美昇仙峡と山梨ワイナリー見学）　@ 7,000 円

甲府駅北口 ➡ 特別名勝昇仙峡 ➡ 山梨ワイン王国 ➡ シャトレーゼ ベルフォーレワイナリー ➡ JR 甲府駅

●Ｃコース：（日帰り）（山梨県立美術館と武田信玄公を訪ねて）　@ 7,500 円

甲府駅北口 ➡ ほうとう小作 ➡ 山梨県立美術館 ➡ 武田神社 ➡ JR 甲府駅

大会宣言文

グローバル化や情報化、人工知能に代表される技術革新、人口減少や長寿化、加えて、新型コロナウィルス感染症への対応など、ますます複雑で予測困難な社会の変化は、社会の在り方、人の生き方に大きな問いを投げかけています。

こうした中でも、子どもたちは日々成長しており、我々、ＰＴＡも子どもたちの健全な成長を全力でサポートしなければなりません。とりわけ、平成３０年６月に公布された「民法の一部を改正する法律」により、成年年齢１８歳が、いよいよ、来年の４月から施行されます。

すでに、選挙権は１８歳から与えられていますが、１８歳成人は学校教育のみならず、人としての生き方、在り方に、想像以上に大きな変化をもたらすことが予想できます。

成年年齢は、一人で有効な契約をすることができる年齢という意味と、父母の親権に服さなくなる年齢という意味があります。このため、親の同意を得ずに、様々な契約を結んだり、自分の住む場所を自分の意思で決めたり、進学や就職などの進路決定についても、自分の意思で決めることができるようになります。もちろん、進路の決定について、保護者や学校の先生の理解を得ることが大切なことに変わりはありませんし、依然として、子どもたちに外的な要因である経済的な独り立ちを要求することは困難であります。しかしながら、価値観や理念･哲学といった独り立ち、いわゆる、内的な『自律』、すなわち、自らの規範やルールを内に持ち、それにしたがって行動し、評価・判断する力を育むことは急務であります。このためには、学校と家庭・地域の連携が極めて重要であり、我々、ＰＴＡの果たす役割は、これまで以上に大きくなっております。

このような状況の中で、第６７回関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会山梨大会を通して、関東地区高等学校等のＰＴＡ会員が、山紫水明の地「山梨」に集い、メインテーマ**「子どもたちの自律を支援するために、今、私たちにできること」**のもと、学校教育や家庭教育について研究協議を重ねることは、誠に意義深いものがあります。

ここに、本大会の趣旨を踏まえ、私たち会員一人ひとりが、次に掲げる事項の実現に向けて、一体となり取り組んでいくことを宣言します。

一　自ら学び、考え、評価できる主体性を持った人間の育成を支援する

一　主体的に進路を選択し、行動・判断できる力を育む教育を支援する

一　規範意識を高め、ルールを守る精神を涵養する教育を支援する

一　地域や学校と連携して、子どもたちの社会性を高める取組を支援する

一　自立と社会参加を目指す特別支援教育の推進を支援する

山　梨　大　会　役　員

1　大会役員

○会　　長　　金丸　　正（前山梨県高等学校ＰＴＡ連合会会長）

○副 会 長　　米山　　賢（神奈川）　金田　　淳（栃　木）　櫻井　澄香（千　葉）
　　枡田　幸弘（埼　玉）　柳澤　剛文（群　馬）　安見　貴志（茨　城）
○運営委員　　杉山　　肇（神奈川）　白相　　寛（栃　木）　林　　修一（千　葉）
　　島﨑　育夫（埼　玉）　中澤　則行（群　馬）　金澤　秀美（茨　城）
　　赤池　　亨（山　梨）

2　実行委員会

○委 員 長　　金丸　　正
○副委員長　　島村　茂幸　　保坂　喜一　　望月　裕司　　中川　恒明　　渡邊　卓史
　　宮川　勇徳　　大島　清隆　　小沢　浩之　　秋山　伸司　　古屋　智久
　　小野　將史
○委　　員　　佐久間真由美　　小川　直人　　鮫田ゆかり　　坂本　　豊　　宮﨑永明子
　　中嶋　尚夫　　栗原　　信　　若月　栄治　　齋藤　徳仁　　宮本　知子
　　窪田　憲道　　中沢　美恵　　武川　裕一　　望月　伸一　　秋山　伸司
　　一瀬　　浩　　田邉　功一　　熊田　貴浩　　堀内　慎也　　古屋　昭光
　　米山　卓也　　流石　良一　　金子未来美　　須田　絵美　　芦澤亜理子
　　谷内　章夫　　中澤　典子　　佐藤　麻紀　　渡邊　美和　　難波　訓美
　　中嶌　良美
　　若林　正人　　﨑田　　哲　　権太　正弘　　小林　久美　　加藤　　忠
　　萱沼　恵光　　清水　章男　　跡部　　和
○監　　査　　望月　敏幸　　市川　　久
○事 務 局　　赤池　　亨　　三井　里紗

あ と が き

第６７回関東大会山梨大会に係る検討、計画、準備の段階から中止決定までの経緯を記すことで、「あとがき」とします。

２年前、令和元年７月に山梨大会で使用する会場を決定し、特例申請等を使い、会場の確保を始めるとともに、大会を演出するイベント業者、来県者の宿泊や輸送をお願いする旅行業者の選定など、令和元年における準備は順調にすすめることできました。

ところが、年が改まり、令和２年の始まりとともに全国的に広がった新型コロナウィルス感染症により、第６６回関東大会郡馬大会をはじめ、全国各地区のすべての地方大会が中止、島根県で開催予定の全国大会も延期の止むなきに至りました。

こうした中で、本県においては、令和２年５月の県高Ｐ連定期総会 (書面表決) において、金丸正氏が会長に、島村茂幸氏、保坂喜一氏、望月裕司氏、中川恒明氏、渡邊卓史氏の５氏が副会長に選任され、令和３年度の山梨大会に向けての検討・準備が本格的にスタートしました。

そこで、山梨大会を開催するに当たって、次のような方針を立てました。

方針①　新型コロナに対応するため、大会への参加者数を会場の収容定員の１／２にすること。このため全体会においては、県内の参加者は会場内に入らず、お手伝いに徹することで、参加者の上限を２,０００人以下に抑えること。

方針②　令和２年度の単Ｐの会長は、全員が大会の実行委員になりその任期は大会終了後まで継続すること。

①については、県外からの参加者を抑制することになり、大会収入の観点から非常に大きな課題になりましたが、本県高Ｐ連の負担金を増額すること、昼食時に弁当の配布をしないことなどにより、なんとか採算の見通しを付けることができました。

②については、単Ｐの数が３９という山梨県の小規模性を活かした初めての取組で、中途の段階で結論を出すことは難しいのですが、多方面にわたりスムーズに準備を進めることができたと考えています。

新型コロナへの対策も含め、大会内容の検討や計画・準備は極めて順調に進んでいましたが、関東地区において２回目の緊急事態宣言が発令され、開催期間中にも再び感染者数の増加が予想されたことから、令和３年３月末に開催した関東高Ｐ連の臨時役員会において、山梨大会の開催を断念することにいたしました。

なお、オンラインによる開催も検討しましたが、１つは予算面、２つ目はオンラインにしても一定の参加者が必要で、密が避けられないことなどから、やはり困難あると判断しました。

案の定、３回目の緊急事態宣言が発令されるとともに、６月に入り本県の感染者数の割合が全国で２番目に悪い状況になり、県知事からもイベント等の自粛が求められる事態になったことを見ると、この判断は間違っていなかったと思っています。

この１年間の経緯を振り返る中で、保護者の皆様からいただいた貴重な会費を有効に使うにはどのようにしたら良いか、大会そのものも従来どおりで良いのかなど、考えさせられることが沢山ありました。コロナ禍での経験をただの一過性のものにせず、今後の高等学校ＰＴＡ連合会の在り方を考える一つの試金石にできたらと考えています。

終わりになりますが、金丸会長をはじめとした本県の６名の役員さんには、令和２年６月から令和３年３月まで間に、４回の役員会、５回の準備委員会、２回の実行委員会、３回の関東高Ｐ連役員会のすべてに参加し、常に建設的なご意見をいただき心より感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。そして、ご苦労様でした。

令和３年７月吉日

第６７回
関東地区高等学校ＰＴＡ連合会大会